半明遺跡

2021年

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

半明遺跡

2021年

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道９号の大田市久手町刺鹿から大田市静間町間は、現道は大田市街地や平面線形及び縦断勾配の悪い区間が連続している大田市仁摩町付近において、死傷事故が多発している状況となっています。また、一般国道９号の代替路線がなく、多くの要防災対策箇所や地すべり防止区域が隣接していることから、交通事故や災害等の発生により、日常生活はもとより、地域の経済活動に多大な支障をきたしております。そのため、中国地方整備局松江国道事務所では、交通障害の解消や安全で信頼性の高い道路網を構築し、防災危機管理の充実、救急医療の向上及び生活圏域の連携促進を目的として、大田・静間道路を平成24年度から事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、令和２年度に実施した大田市長久町地内に所在する半明遺跡の調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では、平安時代の墨書土器や転用硯、輸入陶磁器など官衙に関わる遺物や、水路遺構、鋳鉄製犁先など治水や農耕に関わる遺構・遺物が発見されました。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

令和３年３月

国土交通省中国地方整備局
松江国道事務所長　　藤田　修

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、令和2年度に実施した一般国道9号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

発掘調査を行った半明遺跡は、平安時代から室町時代の集落遺跡です。墨書土器や転用硯などの文字資料や、輸入陶磁器、鋳鉄製犂先が出土したことから、付近には官衙や有力者の館跡があったと推定されます。今回の調査成果は、古代・中世の主要施設が大田市長久町一帯に置かれたことを示唆するものといえます。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

遺跡の調査や報告書作成にあたっては、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめとする諸機関、多くの地元の方々にご協力をいただきました。関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和3年3月

島根県教育委員会

教育長　新田　英夫

例言

1．本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が令和２年度に実施した一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2．本報告書の発掘対象遺跡は下記のとおりである。

半明（はんみょう）遺跡　島根県大田市長久町長久イ5-4外　　550㎡

3．発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については、次の機関に再委託した。

株式会社堀工務店（大田市波根町）

4．発掘調査は島根県埋蔵文化財調査センターが実施し、角田徳幸・大庭俊次・深田　浩・糸賀伸文・岩橋康子が担当した。

5．発掘調査・報告書作成に当たっては、以下の方々から有益な御指導・御協力をいただいた。

調査指導

西尾克己（元島根県古代文化センター長）

調査協力

蓮教寺、大國晴雄（前大田市教育委員会教育長）、目次謙一（島根県古代文化センター専門研究員）

6．本調査に伴う自然科学分析は次の機関に委託して実施し、その成果は第４章に掲載した。

花粉分析・植物珪酸体分析・^{14}C年代測定（AMS法）　文化財調査コンサルタント株式会社

7．本書の石製品の石材鑑定は、中村唯史氏（三瓶自然館サヒメル企画情報課調整監）に依頼した。

8．本書の執筆は、第１章を大庭、第2章、第3章及び第5章を角田が担当した。また、第4章第2節の土器付着物の分析は上山晶子が担当した。

9．本書に掲載した遺構写真は角田と大庭が、遺物写真は大庭が撮影した。また、図版42-1・2のX線透過写真は、澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館）の撮影である。

10．本書に掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、各調査員・調査補助員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。

11．本書の編集にあたっては、DTP方式を採用し、Adobe社のAdobe InDesign CC、Adobe Illstrator CC、Adobe Photoshop CCを用いて作業を行った。

12．本書掲載の図面、写真、出土遺物は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

凡　例

1．遺構図中の方位北は、測量法に基づく平面直角座標第Ⅲ系のX軸方向を指し、座標系XY座標は世界測地系による。
2．遺構図中のレベルは海抜高を示す。
3．本書で使用した第2・6・43図は国土地理院の1/50,000地図及び1/25,000地図（大田、大浦）を使用して作成したものである。
4．本報告書で用いた遺構の略号は、次のとおりである。
SD：溝状遺構、SK：土坑、P：ピット
5．本書に記載する土層及び遺物の色調は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修）に従って記述した。

本文目次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　1.　事業計画の概要 …… 1
　　2.　埋蔵文化財保護部局への照会と調整 …… 1
　　3.　半明遺跡発掘調査の法的手続き …… 3
　第２節　発掘作業と整理作業の経過 …… 4
　　1.　試掘確認調査 …… 4
　　2.　発掘調査 …… 7
　　3.　整理・報告書作成作業 …… 7
　第３節　調査体制 …… 8

第２章　遺跡の位置と環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 10

第３章　調査の成果 …… 15
　第１節　調査の方法 …… 15
　第２節　遺跡の基本層序 …… 16
　　1.　調査区北壁の土層 …… 16
　　2.　調査区中央トレンチの土層 …… 16
　第３節　遺構の配置 …… 18
　　1.　第７層上面 …… 18
　　2.　第 10 層上面 …… 19
　第４節　検出した遺構 …… 20
　　1.　第７層上面 …… 20
　　2.　第 10 層上面 …… 22
　第５節　遺構に伴わない遺物 …… 29
　　1. 概要 …… 29
　　2. 弥生土器・土師器・土錘 …… 29
　　3. 須恵器 …… 29
　　4. 土師質土器 …… 32
　　5. 陶磁器 …… 33
　　6. 鉄製品・石製品 …… 33

第４章　自然科学分析……43
第１節　半明遺跡発掘調査に伴う自然科学分析……43
第２節　半明遺跡出土須恵器高坏付着物質と土師質土器坏付着赤色物質の蛍光Ｘ線分析……55

第５章　総括……61
第１節　遺跡の立地と遺構……61
第２節　出土遺物……62
第３節　遺跡の評価……64

挿図目次

第１図　半明遺跡の位置……1
第２図　事業予定地内の遺跡位置図……2
第３図　試掘確認調査トレンチ配置図……5
第４図　試掘確認調査トレンチ土層図……6
第５図　半明遺跡周辺の地形図……9
第６図　半明遺跡と周辺の遺跡分布図……11
第７図　グリッド配置図……15
第８図　調査区北壁・中央トレンチ土層図・17
第９図　第７層上面遺構配置図……18
第10図　第10層上面遺構配置図……19
第11図　SD1 遺構実測図……20
第12図　SD1 出土遺物実測図……20
第13図　SD2 遺構実測図……21
第14図　SD2 出土遺物実測図……21
第15図　SD3 遺構実測図……22
第16図　SD3 出土遺物実測図……23
第17図　SK1 遺構実測図……24
第18図　SK1 出土遺物実測図……24
第19図　SK2 遺構実測図……25
第20図　調査区西半部ピット実測図……26
第21図　調査区東半部ピット実測図……27
第22図　ピット断面実測図……28
第23図　調査区西半部遺物出土状況図……30
第24図　調査区東半部遺物出土状況図……31
第25図　弥生土器・土師器・土製品実測図35
第26図　須恵器実測図……36
第27図　須恵器・土師質土器実測図……37
第28図　土師質土器実測図１……38
第29図　土師質土器実測図２……39
第30図　陶磁器・中世須恵器ほか実測図‥40
第31図　鉄製品・石製品実測図……41
第32図　試料採取地点位置図……43
第33図　調査区北壁花粉試料採取位置図‥44
第34図　SD3 AMS 試料採取位置図……44
第35図　花粉ダイアグラム……46
第36図　植物珪酸体ダイアグラム……46
第37図　暦年較正結果……48
第38図　暦年較正結果一覧……49
第39図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ１‥‥57
第40図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ２‥‥58
第41図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ３‥‥59
第42図　土師質土器坏外面付着の赤色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ……60
第43図　安濃部の主な古代遺跡と式内社・官衙推定地……67

表目次

第 1 表　事業予定地内遺跡の概要 ……2
第 2 表　ピット計測表……25
第 3 表　陶磁器集計表……34
第 4 表　同定対象分類表……44
第 5 表　微化石概査結果……45
第 6 表　花粉化石組成表……45
第 7 表　植物珪酸体化石組成表 ……47
第 8 表　年代測定結果……48
第 9 表　島根県内出土の鋳造鉄器一覧……65
第 10 表　大田市域の文字関連資料一覧……66
第 11 表　出土土器観察表 ……71
第 12 表　出土木製品・鉄製品・石製品観察表 ……76

写真図版目次

図版 1　1. 遺跡の位置（南西から）
2. 遺跡全景（南から）
図版 2　1. 遺跡全景（南西から）
2. 遺跡全景（北から）
図版 3　1. 遺跡近景（南西から）
図版 4　1. 調査区近景（南西から）
2. 調査区近景（南東から）
図版 5　1. 調査区北壁西側土層（南から）
2. 調査区北壁東側土層（南から）
図版 6　1. 調査区北壁東側土層（南から）
2. 中央トレンチ土層（北東から）
図版 7　1. 第 7 層上面 SD1 検出状況（南から）
2. 調査区北壁 SD1 断面土層（南から）
図版 8　1. SD1 遺物出土状況（南西から）
2. SD1 掘り下げ状況（南から）
図版 9　1. SD1 土層（A-A' 南から）
2. SD1 土層（B-B' 南から）
図版 10　1. SD1 完掘状況（南西から）
2. SD1 完掘状況（南から）
図版 11　1. 第 7 層上面 SD2 検出状況（南から）
2. SD2 土層（南から）
3. SD2 完掘状況（南から）
図版 12　1. 調査区西半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）
2. 調査区西半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）
図版 13　1. 調査区西半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）
2. 調査区西半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）
図版 14　1. 調査区東半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）
2. 調査区東半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）
図版 15　1. 調査区東半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）
2. 調査区東半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）
図版 16　1. SD3 検出状況（南から）
2. 調査区北壁 SD3 断面土層（南から）
図版 17　1. SD3A-A' 断面土層（南から）
2. SD3 断ち割り状況（南から）
図版 18　1. SD3C-C' 断面土層（南から）
2. SD3B-B' 断面土層（南から）
図版 19　1. SD3 完掘状況（南から）
2. SD3 杭列（南西から）
図版 20　1. SK1 検出状況（南から）
2. SK1 断面土層（南から）

図版 21　1. SK1 完掘状況（南から）
2. SK2 検出状況（南から）
図版 22　1. SK2 断面土層（西から）
2. SK2 完掘状況（南から）
図版 23　1. B2 グリッド 7 層 28-52 出土状況（東から）
2. 調査区北壁西側遺物出土状況（南から）
3. B2 グリッド 3 層 25-11 出土状況（南から）
図版 24　SD1 及び SD2 出土遺物
図版 25　SD3 出土遺物
図版 26　SD3 及び SK1 出土遺物
図版 27　遺構外出土遺物 1
図版 28　遺構外出土遺物 2
図版 29　遺構外出土遺物 3
図版 30　遺構外出土遺物 4
図版 31　遺構外出土遺物 5
墨書土器（26-23）墨書赤外線写真
図版 32　遺構外出土遺物 6
図版 33　遺構外出土遺物 7
図版 34　遺構外出土遺物 8
図版 35　遺構外出土遺物 9
図版 36　遺構外出土遺物 10
図版 37　遺構外出土遺物 11
図版 38　遺構外出土遺物 12
図版 39　遺構外出土遺物 13
図版 40　遺構外出土遺物 14
図版 41　遺構外出土遺物 15
図版 42　1. 鍋（31-106）X 線透過撮影画像
2. 犂先（31-107）X 線透過撮影画像

第1章　調査に至る経緯と経過

第1節　調査に至る経緯

1.　事業計画の概要（第2図）

一般国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約755㎞で、山陰地方の諸都市を結ぶ主要幹線道路である。このうち、島根県大田市周辺では、急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が多発しやすい状況にある。通行止め時には大幅な迂回が必要となるなど、日常生活及び経済活動に必要な交通機能が損なわれ、主要幹線道路としての機能に支障をきたしているところであった。

こうした状況を改善し、災害時の緊急連絡道路を確保するために、大田市久手町から大田市静間町に至る延長5.0㎞を結ぶ自動車専用道路が計画され、平成24年度から「大田・静間道路」として事業着手されている。

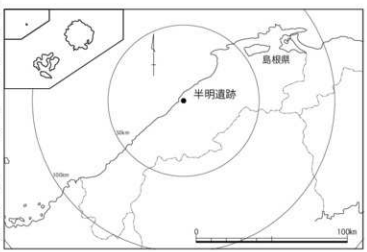
2.　埋蔵文化財保護部局への照会と調整

大田・静間道路の事業化にあたり、平成25年2月8日付け国中整松調設第106号、及び平成26年2月19日付け国中整松調設第94号で国土交通省松江国道事務所から島根県教育委員会に対して事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。島根県教育委員会は、大田市教育委員会の協力を受け、分布調査を2度にわたり実施した結果、6箇所の遺跡と39箇所の要注意箇所を確認し、平成26年5月13日付け島教文財第159号で松江国道事務所に回答した。

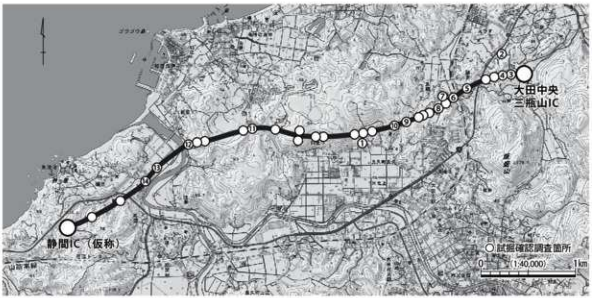
島根県教育委員会は、事業の早期推進と調査体制を強化するために、大田市教育委員会とも協議を行っており、大田市が地元自治体として調査に協力することとなった。大田市教育委員会は、平成26年度に4箇所の試掘確認調査を実施し、その結果に基づいて、平成27年4月付けで文化財保護法第94条第1項に基づく発掘調査実施の勧告が島根県教育委員会から国土交通省松江国道事務所に行われた。大田市教育委員会は、この試掘確認調査で確認された栗林B遺跡と鯛渕遺跡の発掘調査を実施し、報告書はすでに刊行されている。

島根県教育委員会は、平成27年度に大田・静間道路の計画路線内で国庫補助事業として22か所の試掘確認調査を実施し、7か所の遺跡を確認した（第2図）。国土交通省松江国道事務所は、これらの遺跡について文化財保護法第94条1項の規定による通知を島根県教育委員会に提出し、島根県教育委員会は記録保存のための発掘調査の実施を勧告した。

発掘調査は、国土交通省松江国道事務所、島根県教育委員会文化財課、埋蔵文化財調査センターの3者が協議し、埋蔵文化財調査センターが実施す



第1図　半明遺跡の位置



第2図　事業予定地内の遺跡位置図

第1表　事業予定地内遺跡の概要

番号	遺跡名	所在地	調査年次	概要	報告書
1	半明遺跡	大田市長久町	令和2年度	平安・鎌倉時代の水路跡・集落関連遺跡。墨書土器・転用硯、中国製陶磁器、鋳鉄製犂先などが出土。周辺に官衙や有力者館跡が想定される。	本報告
2	諸友大師山横穴墓群	大田市久手町	平成29年度	Ⅳ群1号穴の調査。2次的な改変を受けており、出土遺物はなかった。	(2)
3	奥市井遺跡	大田市久手町	平成 28 年度	古墳時代～中世の段状遺構。中世の段状遺構は、掘立柱建物跡2棟が営まれ、青花・土師質土器が出土した。	(7)
4	諸友越峠遺跡	大田市久手町	平成28年度	弥生・古墳時代の遺物包含層。	(7)
5	諸友西横穴墓群	大田市久手町	平成29年度	県埋蔵文化財調査センター試掘調査。	
6	栗林B遺跡	大田市久手町	平成 27 年度	弥生時代前期の河道跡。古代の遺物包含層。河道跡で杭を円形に打ち込んだ環状杭列が検出された。	(5)
7	栗林C遺跡	大田市久手町	平成 26 年度	大田市教育委員会試掘調査。	
8	栗林A遺跡	大田市久手町	平成 26 年度 令和元・2 年度	平成 26 年度大田市教育委員会が試掘調査。設計変更に伴い、令和元年度に県埋蔵文化財調査センターが再度試掘し、2 年度に大田市教育委員会が本調査。古代の遺物包含層を確認。	
9	尾ノ上遺跡	大田市鳥井町	平成 29 年度	弥生時代の大溝と箱式石棺墓を検出。大溝は前期中葉～後期後葉で、環濠の可能性も想定される。	(3)
10	御堂谷遺跡	大田市鳥井町・長久町	平成 29 年度	弥生～奈良・平安時代の集落跡。弥生・古墳時代の竪穴建物跡をはじめ、奈良・平安時代には門と考えられる建物跡や仏教関連遺物が出土。付近に山林寺院が想定される。	(2)
11	桜田遺跡	大田市鳥井町	平成 29・30 年度	横穴墓と石切場を確認。1 号横穴墓は、改変を受ける。石切場は、近世後半以前のもので、溝切り技法により立方体状の石材が採取された。	(3)
12	鯛渕遺跡	大田市静間町	平成 27 年度	奈良・平安時代の柱穴群、溝を検出。墨書土器・刻書土器・土馬・漆付着土器が出土し、官衙関連遺跡とみられる。	(6)
13	平ノ前遺跡	大田市静間町	平成 28・29 年度	弥生～古代・中世の複合遺跡。弥生時代の水路、古墳時代の竪穴建物跡などのほか、古代の掘立柱建物跡を検出。玉類とともに朝鮮半島製とみられる金銅製歩揺付空玉が出土し、祭祀遺跡としても注目される。	(4)
14	静間城跡	大田市静間町	平成 28 年度	室町時代の山城跡。主郭と北郭の 2 つの曲輪で構成され、掘立柱建物跡・礎石建物跡などを多数検出。国産陶器のほか貿易陶磁も出土し、居館的な居住空間の機能をもつ山城とみられる。	(1)

(1) 島根県教育委員会2018『静間城跡』
(2) 島根県教育委員会2019『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴墓Ⅳ群1号穴』
(3) 島根県教育委員会2019『尾ノ上遺跡・桜田遺跡』
(4) 島根県教育委員会2019『平ノ前遺跡』
(5) 大田市教育委員会2016『栗林B遺跡』
(6) 大田市教育委員会2017『鯛渕遺跡』
(7) 大田市教育委員会2018『諸友越峠遺跡・奥市井遺跡』

ることとなった。本調査は、平成28年度に静間城跡、平ノ前遺跡、平成29年度には御堂谷遺跡、尾ノ上遺跡、平ノ前遺跡（残部）、桜田遺跡（1区）及び諸友大師山横穴Ⅳ群1号穴、平成30年度には桜田遺跡（2区）で行った。平成28年度から平成30年度にかけて実施した各遺跡については、令和元年12月までにそれぞれ報告書が刊行されている。

大田・静間道路地内の発掘調査は、平成30年度までに終えていた。平成31年4月、大田・静間道路の付帯工事である長久調整池が半明遺跡の区域に設計変更されることになり、国土交通省松江国道事務所は、島根県教育委員会に遺跡の有無について照会を行った。建設区域には、周知の遺跡はなかったが、周辺に御堂谷遺跡などがあり、試掘調査が必要な旨を回答し、協議の結果、令和元年度の上半期に試掘確認調査を行うこととなった。

試掘確認調査は、埋蔵文化財調査センターが5月30日～6月7日にかけて、調整池建設予定地と周辺借地予定地1,600㎡を対象に、国庫補助事業として実施した。調査では、古代～中世にかけての遺物包含層と、古墳時代以前の遺物包含層の上下2層に分かれる遺物包含層が確認された。これにより、工事予定地が含まれる区域一帯が遺跡であることが明らかとなり、字名から半明遺跡とすることとした。

3.　半明遺跡発掘調査の法的手続き

試掘確認調査の結果、遺跡が発見されたことから、島根県教育委員会は、令和元年6月20日付け島教文財第272号で国土交通省松江国道事務所と、遺跡が所在する大田市教育委員会にその旨を通知した。また、松江国道事務所に対しては、同文書において公共工事に係る文化財保護法第97条第1項の規定に基づく法的手続きを取るよう促した。

これを受け、松江国道事務所長は、遺跡発見通知を令和元年12月18日付け国中整松工第95号で、島根県教育委員会教育長あてに提出し、半明遺跡を含む区域において公共工事に着手するための手続きが開始された。教育委員会教育長からは令和元年12月26日付け島教文財第103号の9で、松江国道事務所長あてに記録保存のための発掘調査実施が勧告された。

島根県教育委員会文化財課と埋蔵文化財調査センターは、松江国道事務所で協議を行い、令和2年度の上半期に本調査を実施することにした。松江国道事務所は、令和2年3月11日付け国中整松一管第155号で発掘調査費用の照会を行い、島根県教育委員会は、同3月12日付け島教文財第1010号で回答した。これを受けて、松江国道事務所は、同3月24日付け国中整松一管第174号で契約協議を行い、島根県教育委員会が令和2年4月1日付け島教文財第39号で回答し、両者の間で発掘調査委託契約が締結された。

発掘調査は、令和2年5月7日から同年8月31日までの予定で実施した。島根県埋蔵文化財調査センター所長は、文化財保護法第99条第1項に基づく発掘通知を令和2年4月8日付け島教埋第40号で教育長あてに提出した。調査は、予定期間内に終えることができた。調査の終了報告は、令和2年9月10日付け島教文財第39号の10によって島根県教育委員会教育長から国土交通省松江国道事務所長あて送付された。

なお、遺物発見届は、令和2年9月18日付け島教文財第114号の5により教育長から島根県警大田警察署長あて提出している。

第2節　発掘調査と整理作業の経過

1.　試掘確認調査

試掘確認調査対象地は、大田市長久町に所在する。三瓶川下流の右岸に広がる平野部の北端に位置し、鳥井丘陵南東部山麓の谷間に立地する。現況は、棚田状に構築された休耕田及び畑地で、標高は15～19m、丘陵中腹には弥生時代～古墳時代の集落跡が検出された御堂谷遺跡（平成29年度調査）が存在する。

試掘確認調査は、令和元年5月30日～6月7日まで行った。大田静間道路改築工事に伴う長久調整池の整備予定地1,600㎡を対象として、遺構・遺物の有無を確認するため、地形の変化をみながらトレンチ7か所（TR1～TR7）を設定した。試掘したトレンチの総面積は56㎡であった。

調査の結果、TR2及びTR3で水田床土の下層から土師器皿や中世須恵器、陶磁器類が多数出土するなど、中世前半期（12～13世紀）の遺物包含層を確認した。トレンチを設定した地点の周辺にも、遺構・遺物が広がる可能性があることから、TR2及びTR3の周辺を含めた約700㎡について本調査が必要と判断した。

TR 1・TR 6

調整池出入口となる予定の区域に設定したものである。近世以降の遺物が出土する畑作の畝溝や不定形土坑、落ち込みなどの遺構が検出された。

TR 2

段状に構築された水田跡の下段部西側である標高16.7 mに設定した。深さ約2mまで掘削し、1～8層の土層堆積を確認した。堆積する土層は概ね北から南に向かって下る傾向を示している。表土（1層）以下、田の床土と思われる黄褐色土（2-1～2-3層）が60～80㎝堆積し、その下層の黒褐色土（3層）から土師器片と中世須恵器片が出土し、40～50㎝堆積する黒色粘質土（4層）は土師器片（糸切り底）や青磁片を含み、中世の包含層と考えられる。標高15.2m以下に堆積する灰色粘質土（5層）には、拳大～80㎝大の礫がみられ、そこから南方向へ落ち込み状に黒色粘質土（7・8層）が堆積し、土師器片が多数出土した。

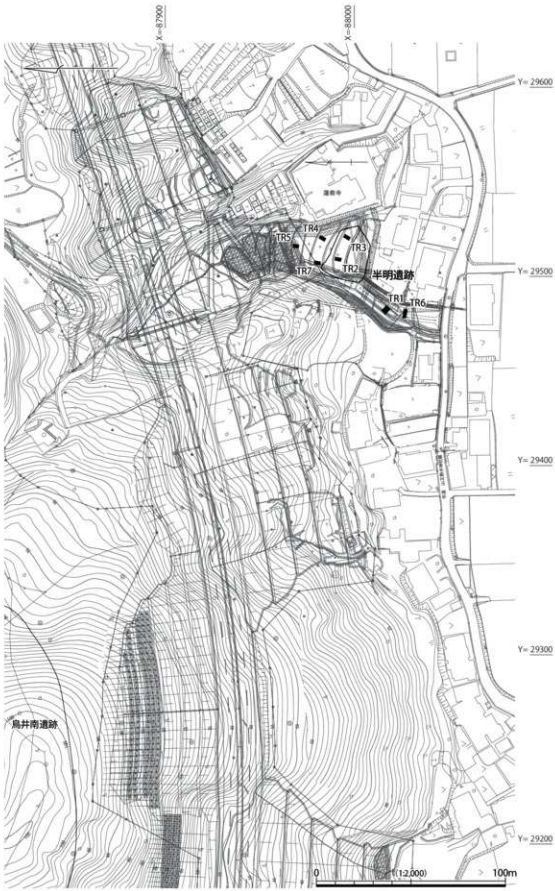
TR 3

TR2と同じ段の東側にあたる標高16.7mに設定した。基本的にTR2と同様の土層堆積を示す。黒褐色土（3層）からは土師器と須恵器の小片が若干出土し、黒色粘土（4層）からは中世とみられる土師器片が出土した。深さ1.8mまで掘削し、4層の下層部では、礫が多く検出された。TR2でみられた遺物を多く含む黒色粘質土の落ち込み（TR2の7・8層）は認められなかった。

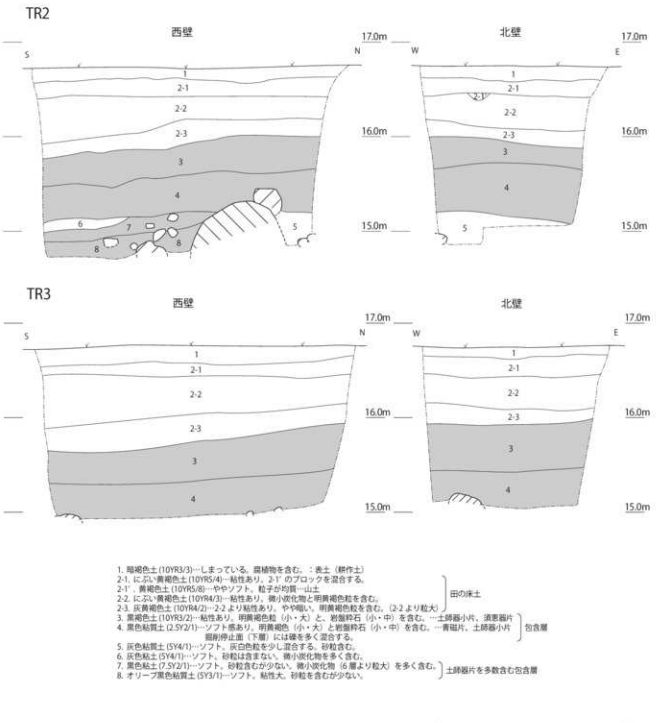
TR 4、TR 5、TR 7

TR4及びTR5の土層堆積状況はTR3と同様で、TR7の土層堆積状況はTR2と同様であった。この3地点からは遺構・遺物は検出されなかった

半明遺跡試掘作業状況



第3図　試掘調査トレンチ配置図



第4図　試掘確認調査トレンチ土層図

2.　発掘調査

発掘調査は令和2年6月1日から同年8月26日まで実施した。調査面積は550㎡である。発掘調査現場への進入路の整備、調査区が位置する谷奥からの排水施設の整備、補強するなど、周囲の民家等に影響が及ばないように国土交通省松江国道事務所、高規格道路本体施工業者及び関係住民と十分協議して環境整備を進めた。

半明遺跡発掘作業状況

機械による調査区の全面的な表土掘削と、部分的な無遺物層の掘削は、2回に分けて実施した。この間、人力による包含層掘削も機械による掘削と交互に行った。2層に分布する包含層掘削段階が終了するたびごとに遺構検出作業をしており、3条の溝状遺構と不定形な土坑1基、多数のピットあるいは柱穴などを検出している。遺構については半裁、写真撮影、実測を行った。

8月18日には、元島根県古代文化センター長 西尾克己氏の調査指導を受けた。検出した遺構や周囲の遺跡からわかる遺跡の性格、土層観察等から推察される土地利用の変遷などのほか、出土遺物については、陶磁器の時期・種別・産地などについても指導して頂いた。

遺跡における土地利用の変遷については、植物珪酸体分析、花粉分析を行う必要があったことから、㈱文化財調査コンサルタントに依頼して、調査区北壁の土層より分析試料を採取した。また、検出された溝状遺構の年代を確認するため、SD3の杭については取り上げ、同社でAMS年代測定をした。その成果は、本書第4章自然科学分析で報告している。

8月29日には、半明遺跡が所在する地域の自治会内を対象として、遺跡現地説明会を開催した。当日は、真夏の猛暑の中、小学生から高齢者まで幅広い年齢層の方々、17名の参加があった。また、新型コロナウイルス感染症が流行していたことから、参加者には感染防止対策としてマスクの着用、手指の消毒、緊急時連絡先の記入などをお願いして実施した。

発掘調査は、8月26日に終了した。その後、9月4日までに埋め戻し作業を行って現状復旧をして、9月14日に現場を松江国道事務所に引き渡した。

3.　整理・報告書作成作業

遺物の水洗・注記・接合作業は、現地調査と並行して行った。現場終了後は、埋蔵文化財調査センターで、これらを継続するとともに、実測などの整理作業をした。

現場で作成した図面・写真・各種測量データなどの記録類は、出土遺物の情報と併せて総合的な整理検討を行い、本報告書刊行に向けて、遺構・遺物のトレース、遺物の写真撮影、各種版下の作成と割付、原稿執筆をした。

なお、画像処理、図版作成、挿図表の作成編集にはAdobe社のソフトを使用した。

第3節　調査体制

発掘調査・報告書作成は、次の体制で行った。

調査主体　島根県教育委員会

教育庁文化財課

課長　萩　雅人、文化財グループGL　田中明子

管理指導スタッフ調整監　池淵俊一

埋蔵文化財調査センター

所長　椿　真治、総務課長　和田　諭、管理課長　守岡正司

高速道路調査推進スタッフ調整監　角田徳幸、同企画幹　大庭俊次

同企画幹　深田　浩

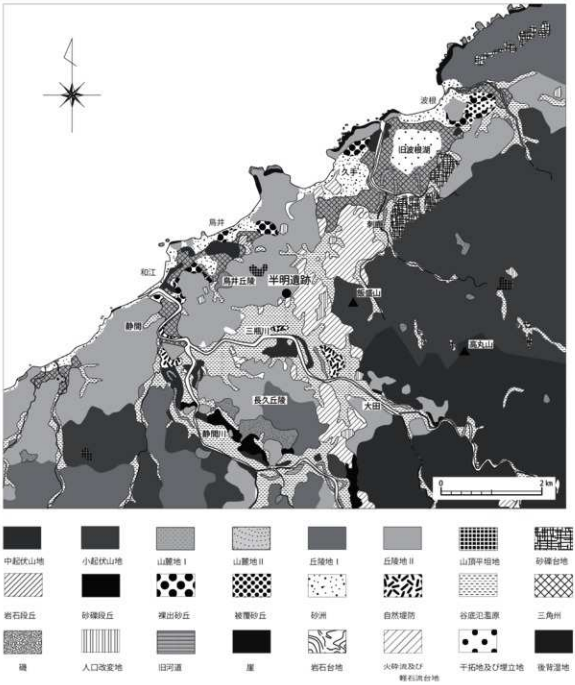
会計年度任用職員調査補助員　糸賀伸文、岩橋康子

第2章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

大田市は、東西に長い島根県のほぼ中央部に位置する。南には三瓶山や大江高山の火山群があり、北は日本海に面している。三瓶山や大江高山から流れ出る三瓶川や静間川は、下流域に小規模な谷底沼濫原である大田平野を形成し、河口周辺の海岸部は砂州となる。半明遺跡は、三瓶川がつくった大田平野の北側に所在する。

半明遺跡のある大田市長久町は、明治22年(1889)の町村制施行時に安濃郡東用田村・西用田村・



第5図　半明遺跡周辺の地形図

野井村を合わせて長久村とされたところである。長久村は、昭和29年(1954)に大田町などと合併して大田市となり、現在に至っている。

大田市長久町周辺の地形は、北側の鳥井丘陵、南側の長久丘陵、東側の飯盛山・高丸山の山塊に囲まれ、その中に形成された大田平野を三瓶川が東西に流れる。鳥井丘陵は標高100m前後、長久丘陵は標高200mまでの丘陵地である。飯盛山周辺は標高200mまでの小起伏山地、高丸山周辺は標高300m前後の中起伏山地となる。表層地質は、鳥井丘陵と飯盛山・高丸山の山塊は安山岩質岩石、長久丘陵は流紋岩質岩石である。大田平野の北西側にあたる鳥井丘陵と飯盛山の間には、標高40mくらいまでの低い火砕流及び軽石流台地が広がっている。これは4万5千年前に噴出した三瓶大田軽石流の堆積物である。

三瓶川は、大田平野で流れを北西から東西方向に変え、静間川と合流して日本海へ注ぐ。静間川は、本来、海岸に形成された砂州によって流れが妨げられ北東に大きく蛇行しており、河口は鳥井町付近にあった。これが、たびたび洪水を引き起こす原因となったため、元禄年間に砂州が開削され設けられたのが、現在の河口である。

鳥井丘陵の東には、かつては波根湖があった。波根湖は、久手町・波根町の海岸に発達した砂州によって海と隔てられた潟湖である。昭和26年(1951)の干拓により陸地化した範囲はさほど大きくないが、その周囲や西側には広く三角州が広がる。これが波根湖が徐々に埋まった痕跡とみれば、その水域は鳥井丘陵の東麓まで及んでいたこととなる。

大田平野は、周囲を丘陵や山地に囲まれているが、三瓶川・静間川や波根湖を介して、日本海とも繋がる特徴的な地理的環境にある。

第2節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

大田市域では旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていない。中尾H遺跡（4区）では、縄文時代早期から草創期に遡る可能性のある尖頭器が出土しており、今後、旧石器時代にさかのぼる遺跡が明らかになることが期待される。

縄文時代の遺跡も少ないが、波根湖の縁辺部で中尾H遺跡・門遺跡・荒槇遺跡・波根川遺跡が知られる。このうち、中尾H遺跡では、前期・中期に加えて後期の磨消縄文土器、縁帯文土器がまとまって出土しており、線刻石や大型石棒なども確認された。

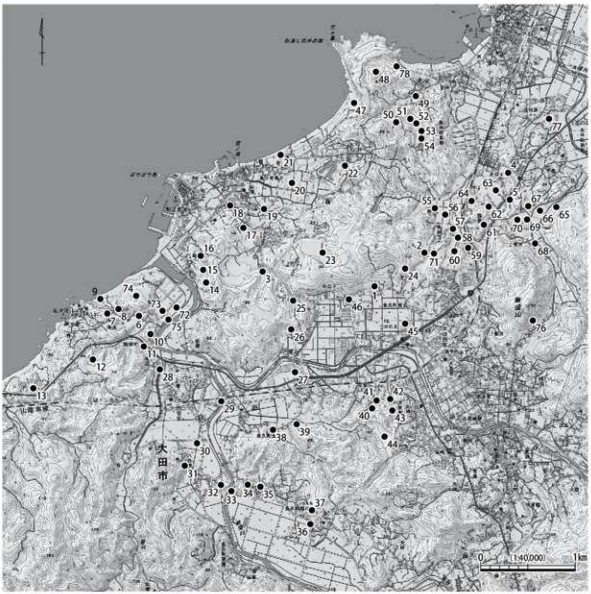
弥生時代

弥生時代になると遺跡は増加する。前期の遺跡としては、栗林B遺跡や御堂谷遺跡・土江遺跡などが知られる。このうち、栗林B遺跡は前期の河道があり、その中から環状杭列が確認された。鳥井丘陵に位置する御堂谷遺跡では前期後葉の土器が大量に出土し、前期の高地性集落があったとみられる。

中期末～後期前半には、3～4棟を1単位とする竪穴住居跡群が確認できる。鳥井南遺跡では弥生時代中期後半から古墳時代前期初頭にかけての大規模な集落跡が発見されている。弥生時代の遺構には、焼失建物が含まれているほか、塩町式土器が複数出土しており、備後北部との交流が推測される。なお、尾ノ上遺跡では、弥生時代後期後半とみられる箱式石棺が明らかになっている。

古墳時代

古墳時代の集落跡としては、平ノ前遺跡、烏井南遺跡、市井深田遺跡などがある。静間川河口部の平ノ前遺跡では前期から後期にかけての竪穴建物の他に中期から後期頃の灌漑用水路跡が確認された。水路内からは多量の土器とともに金銅製歩揺付空玉1点が出土している。この空玉は朝鮮半島製もしくは国内で製作された可能性が考えられ、当時の朝鮮半島との交流を窺い知ることのできる貴重な資料といえる。また、烏井南遺跡では、人形や武器形・鏡形・玉形・器材形などの土製模



1. 半明遺跡　2. 尾ノ上遺跡　3. 桜田遺跡　4. 諸友大師山横穴Ⅰ～Ⅲ群　5. 諸友大師山横穴Ⅳ群1号穴　6. 平遺跡　7. 垂水古墳
8. 近藤平遺跡　9. 近藤浜横穴　10. 柿田立目後横穴群　11. 竹下忠紀宅後横穴　12. 垂水遺跡　13. 漆東遺跡　14. 鰐渕遺跡　15. 静間駅
16. 渡瀬遺跡　17. 西烏井遺跡　18. 山根遺跡　19. 上山根遺跡　20. 北沢遺跡　21. 伝地山古墳　22. 大平横穴群　23. 烏井南遺跡
24. 御堂谷遺跡　25. 烏井西遺跡　26. 浄土寺遺跡　27. 八石遺跡　28. 笹川遺跡　29. 土江遺跡　30. 八日市駅　31. 八日市横穴群
32. 第二八日市横穴群　33. 八日市遺跡　34. 稲用城　35. 稲用下遺跡　36. 大迫横穴　37. 延里遺跡　38. 天主山横穴　39. 大道横穴
40. 宮の奥遺跡　41. 宮の奥横穴群　42. 鶴山遺跡　43. 亀山横穴　44. 貝狼城跡　45. 中島遺跡　46. 野井神社遺跡　47. 大平A遺跡
48. 石弩城跡　49. 迫A遺跡　50. 迫B遺跡　51. 迫山田西横穴群　52. 山田横穴群　53. 迫横穴群　54. 迫C遺跡　55. 烏越B遺跡
56. 中垣遺跡　57. 烏越C遺跡　58. 栗林C遺跡　59. 栗林B遺跡　60. 栗林A遺跡　61. 諸友西横穴群　62. 山田廊夫宅裏横穴群
63. 二中横穴群　64. 烏越A遺跡　65. 市井深田遺跡　66. 中尾H遺跡　67. 中尾横穴　68. 市井遺跡　69. 奥市井遺跡　70. 諸友越峠遺跡
71. 諸友西ケ迫遺跡　72. 平ノ前遺跡　73. 網引原遺跡　74. 平山横穴　75. 静間城跡　76. 城山古墳　77. 竹原古墳　78. 百済駅

第6図　半明遺跡と周辺の遺跡分布図

造品が多数出土し、巨樹の根元に捧げものを置く祭祀が想定されている。

古墳時代の大田市域は、前期～中期については不明な点が多い。波根湖周辺にある竹原古墳は、円墳で墳丘上に割石が散在し、この頃のものと思われる。後期には、横穴式石室をもつ古墳が知られており、石室規模の大きい行恒古墳や加土古墳をはじめ、城山古墳・垂水古墳・鳥井南遺跡などがある。また、大田市域は石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯である。特に多く分布するのは波根湖周辺の丘陵部であり、大西大師山横穴墓群など多数の横穴墓が営まれている。近隣の静間町・大田町では平山横穴や近藤浜横穴、柿田立目後横穴群、垂水横穴墓群などがみられるほか、立花横穴墓群のように頭椎大刀が出土したものもある。

古代

大田市東部は、『和名抄』の安濃郡にあたる。安濃郡は、波禰・刺鹿・安濃・静間など8郷で構成されていた。延喜式は、山陰道の駅として出雲国境から石見国府のあった伊甘駅までの間に、波祢・託濃・樟道など5つの駅を挙げている。郡家の所在地については、「コホゲ」の遺称がある長久町稲用説や、式内社の迩幣姫神社がある長久町土江説がある。波祢の駅家は、「天馬」（伝馬）の地名が残る波根町の八幡宮付近に比定されており、その周辺では天王平廃寺や瓦経が出土した高砂遺跡などが明らかになっている。また、半明遺跡の西400mほどのところには、式内社である野井神社がある。

近隣の古代遺跡としては、平ノ前遺跡・八石遺跡・鯛渕遺跡・市井深田遺跡・御堂谷遺跡・垂水遺跡などがある。平ノ前遺跡は3間×6間の規模をもつ大型の掘立柱建物が確認されたほか、漆付着土器などが出土している。鯛渕遺跡では、柱穴群や溝などが確認されており、「司」の刻書、「郡」や「佛」等が記された墨書土器や土馬・漆付着土器・東海地方産土器などが出土した。両者は静間川の両岸に位置しており、古代交通に関わる遺跡とも考えられる。

三瓶川南岸の八石遺跡では、ピット・溝などが確認され、円面硯が出土している。郡家推定地のうち長久町土江説の迩幣姫神社から比較的近く、関連施設が考えられる。鳥井丘陵と飯盛山の間の丘陵地にある中尾H遺跡（1・2区）では、木簡が確認されている。木簡は「二斗一升二合」「石□」と読めるもので、海産物のカメノテを貢献する際の荷札木簡との推定がある。中尾H遺跡の付近にある市井深田遺跡では、丘陵斜面に営まれた平安時代前半までの集落跡が明らかになった。加工段に掘立柱建物や、海岸部では類例の少ない造り付け竈を持つ竪穴建物が多数営まれており、土製権が出土したことなどから公的機関との関りも想定される。中尾H遺跡と市井深田遺跡は、式内社の刺鹿神社から入った谷筋に位置にある。また、神谷遺跡では横口付炭窯跡が確認されており、製鉄関連遺跡が近くに存在する可能性が考えられる。

鳥井丘陵の南西部にある御堂谷遺跡では、門とみられる建物跡とともに、灯明皿形土器・朱墨の痕跡がある皿・転用硯・鉄鉢形土器が出土した。調査区外の丘陵斜面には平坦面が連続する地形があり、寺院関連施設の存在が想定される。

中世・近世

鎌倉時代の安濃郡には荘園2ヶ所、国衙領11ヶ所があり、半明遺跡周辺は国衙領長久郷に含まれていた。鎌倉中期には、近隣の稲用に石見守護伊東祐時の領地が存在した。1223年（貞応2）の「石見国中庄公惣田数注文案」によれば、国衙領大田郷の田数（面積）は34丁2反300歩、同じく用田郷は25丁5反300歩、長久郷14丁8反180歩とある。安濃郡内では大田郷次いで用田郷の順

に面積が広く、長久郷を含むこの地域が郡内でも広大な耕地を擁していたことがわかる。

南北朝・室町時代には、山口の大名大内氏の勢力が石見国、殊に邇摩郡へ及ぶようになる。1481年（文明13）、大内氏は石見吉川氏に上静間氏が先に治めていた静間郷の一部を領地とすることを認めるが、1515年（永正12）以前にそれらは上静間氏へ与えられた。1541年（天文10）時点でも石見吉川氏はそれらを獲得しておらず、上静間氏の支配が続いていたと推測される。

静間城は、この上静間氏の拠点とも目される15世紀後葉～16世紀前葉の山城である。主郭と北郭などからなり、廂付きの大型掘立柱建物3棟などが確認された。国産陶器のほか青磁・白磁・青花などの貿易陶磁が出土しており、居館的な居住空間を兼ね備えた山城との評価がある。

広域の交易に関して注目されるのが波根湖で、中世には日本海水運の拠点としての役割も果たしていた。明の鄭若曾が1561年に編纂した『日本図纂』には「番尓」、「山子介」の地名がみえ、それぞれ波根、刺鹿に比定されている。海につながる穏やかな内水面が天然の良港となり、中世後期には遠く明まで知られていたことがわかる。

対外交易での銀需要を背景として、1527年（大永7）に神屋寿貞により石見銀山が発見され、その開発が本格化すると、銀山の支配を巡って大内氏・毛利氏と尼子氏が争うことになる。大田市東部では静間城のほか稲用城などが築かれている。16世紀後半において、長久郷の支配者は邑智郡の領主小笠原氏から大名毛利氏へ移り変わったことが、野井神社の1571年（元亀2）および1600年（慶長5）の棟札からうかがわれる。

近世に入ると、石見銀山領となり、30ヶ村（東用田村・西用田村・野井村など）が置かれる。安濃郡のうち、20ヶ村（東用田村など）は1643年（寛永20）から４０年間、会津若松から移封された加藤氏の吉永藩があった。

元禄年間には、静間村の前原家が洪水対策や新田開発を目的として、静間川の流れを遮っていた海岸の砂州を開削し、その河口を現在の位置に付け替える。また、日本海の水運を利用し、たたら製鉄が沿岸部で行われるようになる。前原家が経営した静間村鉧（和江鉧）や、鳥井村の石田家による百済鉧では銑鉄生産を中心とした操業が行われており、明治時代前期まで稼業した。

【参考文献】

大田市1968『大田市誌　十五年の歩み』

大田市教育委員会2000『八石遺跡』

大田市教育委員会2016『栗林Ｂ遺跡』

大田市教育委員会2017『鯛渕遺跡』

大田市教育委員会2018『島井南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』

大田市教育委員会2018『島井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

大田市教育委員会2019『中世大田・石見銀山関係史料集』

角川書店1991『角川日本地名大辞典32　島根県』1991年

島根県1925『島根縣史4』

島根県1979『都道府県土地分類基本調査―石見大田、大浦-』

島根県教育委員会1997『島根県中近世城館分布調査報告書（第1集）石見の城館』

島根県教育委員会2013『門遺跡・高原遺跡Ⅰ区・中尾Ｈ遺跡』

島根県教育委員会2014『市井深田遺跡・荒槇遺・鈴見B遺跡1区』
島根県教育委員会2016『城ヶ谷遺跡（1区）・神谷遺跡・涼見E遺跡』
島根県教育委員会2017『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』
島根県教育委員会2018『旭山遺跡・中尾H遺跡（3区）・門遺跡（2区）』
島根県教育委員会2017『鈴見B遺跡（3区）』
島根県教育委員会2018『静間城跡』
島根県教育委員会2019『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴墓Ⅳ群1号穴』
島根県教育委員会2019『平ノ前遺跡』
島根県教育委員会2019『尾ノ上遺跡・桜田遺跡』
関和彦 2015『古代石見への誘い道』今井出版
中林保 1978「石見国」『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂
西田友広 2007「鎌倉時代の石見守護について」『鎌倉遺文研究』20　吉川弘文館
長谷川博史 2003「日本地図から見た十六世紀の「中国地域」」『中国地域と対外関係』山川出版社
平凡社1995『日本歴史地名大系33　島根県』

第3章　調査の成果

第1節　調査の方法

半明遺跡は、大田市街の北にある丘陵の南側、平野に面する小さな谷部に位置する。調査前は荒地となっていたが、もとは水田であり、段状に造成された平坦面が谷奥に向かって続いている。

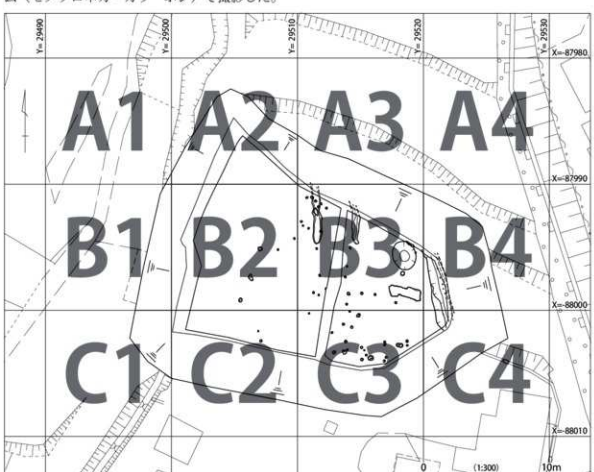
試掘調査によって、表土の下には厚い造成土があり、その下が遺物包含層であることが確認されていたことから、表土と造成土については重機掘削で除去した。

調査グリッドは、遺跡北西側のX=-87,980・Y=29,490を起点に10m四方の方眼を組んだ。方眼は、南へA・B・C、東へ1・2・3・4とする。グリッドは、北西隅の交点で名づけ、A1・B1・C1・A2・B2などと呼んだ。

遺物包含層は、人力で掘り下げた。遺物は、調査区全体に設定した10m四方のグリッドごとに採取し、出土位置の明確なものは、遺跡調査システム「SITE」を用いて座標を記録した上で、取り上げを行っている。

遺構平面図は、遺跡調査システム「SITE」で測量し、出力後、補正した。遺構断面図は、オートレベルで測量して作成し、高低差のある壁面は「SITE」を使って作図した。

遺構等の写真は、デジタルカメラを用いたが、報告書に掲載が見込まれるものは6×7判フィルム（モノクロネガ・カラーポジ）で撮影した。



第7図　グリッド配置図

第2節　遺跡の基本層序

基本層序は、調査区北壁（A-A'断面）、及び調査区中央に南北に設定したトレンチの土層（B-B'断面）で確認できる。

1.調査区北壁の土層

上層より1層：暗褐色土(10YR3/3：表土)、2層：にぶい黄褐色土(10YR4/3：造成土)・3層：黒褐色土(10YR3/2：遺物包含層、明黄褐色土粒と石砕片含む)・4層：黒色粘質土(2.5Y2/1：遺物包含層、明黄褐色土粒と石砕片含む)・7層：黒色粘土(7.5Y2/1：遺物包含層、微小炭化物含む)・8層：オリーブ黒色粘質土(5Y3/1：遺物包含層、砂礫含む)・10層：灰白色シルト(7.5Y7/1：無遺物層、砂礫を含む)となる。

7層の上面には、幅が狭く、溝状に窪んだ堆積が2ヶ所に認められ、9層：灰色粘砂土（5Y4/1）が溜まっていた。これは、それぞれ溝状遺構SD1とSD2の埋土である。北壁西寄りでは、7層の上を12層:黒褐色砂礫（5Y2/1、拳大の円礫を多く含む）が広く覆っており、洪水時の堆積物とみられる。12層の下は、8層を挟んで14層:灰色砂礫（7.5Y6/1）がある。14層は、人頭大までの円礫を多く含んだ砂礫層で、水の作用により堆積したものとみられる。10層のほか、東側の15層：灰白色粘土（7.5Y8/1）・16層：灰色砂礫（7.5Y4/1）を掘り込んだ溝状遺構SD3の埋土である。8層または10層の上面では、これから掘り込まれたピットの埋土である11層：黒色粘質土（5Y1.7/1）が確認できる。

基盤となる10層は、西から東に向かって緩く傾斜している。調査区中央の標高14.8m付近から東側にかけては比較的平坦になる。土坑やピットなどの遺構は、この平坦になった面に掘り込まれる。調査区北西側では大きな山石がまとまって確認されているが、10層に覆われていることから、10層の堆積以前に発生した土石流の痕跡とみられる。

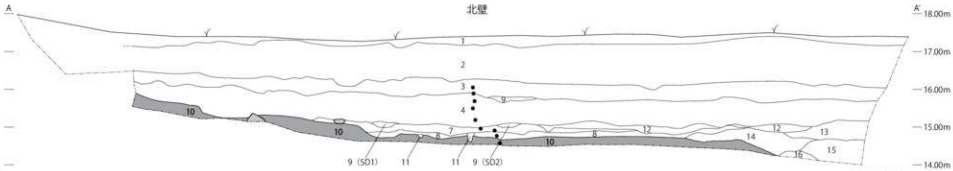
なお、調査区北壁の中央部の3層・4層・7層・8層・10層では、土壌試料を採取して、花粉分析などの自然科学分析を行った。その成果は、第4章第1節に掲載している。

2.調査区中央トレンチの土層

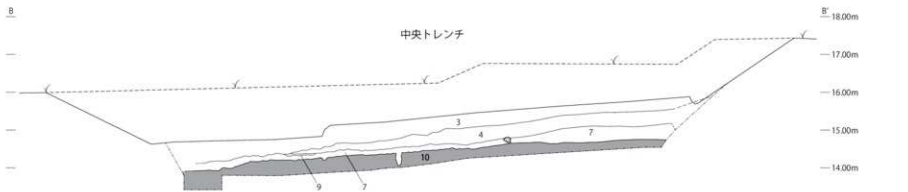
中央トレンチは、重機掘削の後に設定したもので、3層以下の土層が観察できる。北壁と同様に、上層から3層・4層・7層・10層の順に堆積する。

このうち、4層は南に行くほど薄くなって消滅しており、南側では7層の上に3層が直接のる。7層は、調査区北壁側が厚く、南にいくに従って薄くなる。北壁土層では7層は層厚があり、下層を8層:オリーブ黒色粘質土として分けているが、中央トレンチでは不明確であったため、8層を含めて7層として扱った。南側では7層の上に9層が部分的にみられるが、浅い溝状をなしており、前述した溝状遺構SD1の続きとみられる。

10層は、上面にはピットなどの遺構が掘り込まれている。下層の状況を確認するため、中央トレンチ南端部を深く掘り下げたところ、10層の層厚は50cm以上あることがわかったが、遺物は検出されていない。



1　暗褐色土（10YR3/3）　表土
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　造成土
3　黒褐色土（10YR3/2）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
4　黒色粘質土（2.5Y2/1）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
7　黒色粘土（7.5Y2/1）　微小炭化物を含む
8　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）　砂礫含む
9　灰色粘砂土（5Y4/1）　砂礫含む。自然流路
10　灰白色シルト（7.5Y7/1）　砂礫含む
11　黒色粘質土（5Y1.7/1）　ピット埋土
12　黒褐色砂礫（5Y2/1）　拳大までの円礫を多く含む
13　灰白色粘土（7.5Y7/1）　きめ細かい
14　灰色砂礫（7.5Y6/1）　人頭大までの円礫を多く含む。SD3
15　灰白色粘土（7.5Y8/1）　きめ細かい
16　灰色砂礫（7.5Y4/1）　人頭大拳大の円礫を含む



3　黒褐色土（10YR3/2）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
4　黒色粘質土（2.5Y2/1）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
7　黒色粘土（7.5Y2/1）　微小炭化物を含む
9　灰色粘砂土（7.5YR4/1）　明黄褐色土粒と灰色砂を少し含む
10　灰白色シルト（7.5Y7/1）　白色砂と石砕片を少し含む

第8図　調査区北壁・中央トレンチ土層図

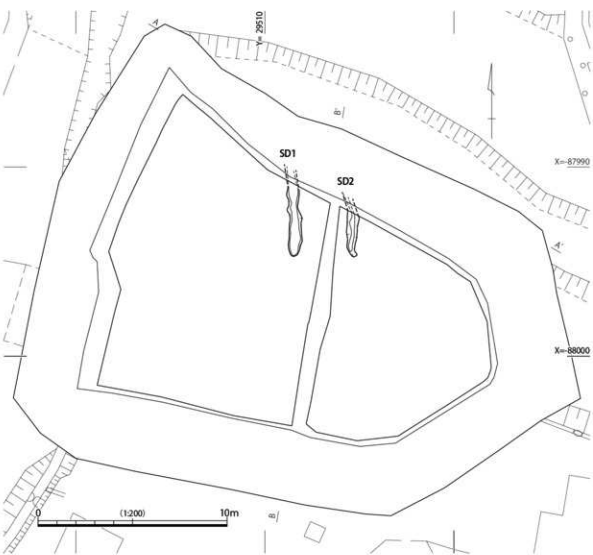
第3節　遺構の配置

調査は、上層の1層・2層を重機によって除去した後、遺物包含層である3層以下を手作業で掘り下げ、7層上面及び10層上面で遺構の検出を行った。

1.第7層上面

調査区の中央、北壁に近いところでは、細長い溝状遺構（SD1・2）が検出された。これらは、主軸を北北西から南南東方向にとり、2.4mほどの間隔で平行に延びる。SD1は、前述のように調査区中央トレンチの南側で、その続きとみられる部分が確認されている。発掘調査で検出できた範囲は、北側の2.5m程度にすぎないが、本来は調査区を横切るように南南東方向に延びていたと考えられる。SD2もSD1と状況がよく似ており、同様に南南東方向へと延びていたとみた方がよいだろう。

SD2の西側には、黒褐色砂礫（第8図12層）が広く覆っており、大雨の際などに谷から流れで出たことが想定される。



第9図　第7層上面遺構配置図

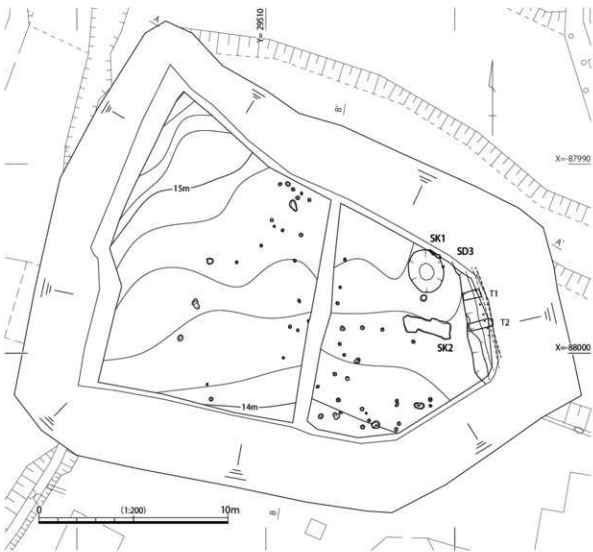
2.第10層上面

調査区の北西から南東方向に向かって緩やかな傾斜をもつ。中央付近の標高14.8m付近から東側は、比較的平坦になっており、遺構が掘り込まれる。

遺構は、調査区東端部で溝状遺構（SD3）、その西側1mのところで土坑（SK1・2）が検出された。このうち、SD3は、調査区北壁から続いており、主軸を北北西から南南東方向にとるとみられる。後述するように、その内部で杭列が確認されていることから、谷水を導水するような水路として利用されたものと考えられる。

SK1・SK2は、ともにSD3の西側1mに接する位置にある。SD3と両者に切り合い関係は認められないので、これらは併存したようである。

調査区中央部の比較的平坦なところを中心として、ピットが多数検出された。一部に直線的に並ぶものも認められるが、径が小さいものがほとんどである。その配置や形状からみると、建物跡を想定するのは難しい。



第10図　第10層上面遺構配置図

第4節　検出した遺構

1.第7層上面

(1) SD1

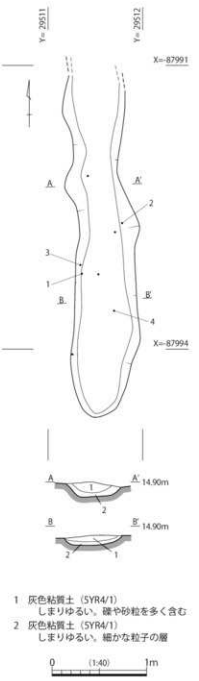
溝状遺構で、長さ4mの範囲で検出された。調査区北壁に続いており、本来は北北西から南南東方向に延びていたと考えられる。ほぼ直線的にみえるが、平面形は整っていない。幅は80cm、深さは15cmと浅く、横断面形は底面が平坦で両側面が緩く立ち上がる。

埋土は、上層から1層：礫や砂を含む灰色粘質土(5YR1/4)、2層：細かな砂を含む灰色粘質土(5YR1/4)の順となる。これらは、礫や砂が中心であることから、水によって流されてきたものとみられる。

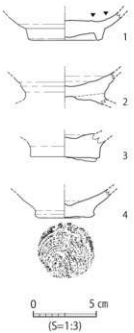
出土遺物には、白磁碗、土師器坏がある。

第12図1は白磁碗の底部である。外面は露胎、見込み蛇の目釉剥ぎ（▼-▼間）となる。

2～4は、土師器坏の底部である。2は、回転糸切後、外方に開く高台が付けられる。色調は外面がにぶい黄橙色であるが、内面は黄灰色を呈する。3・4は、底部が回転糸切りされ、高台をもたないものである。3は底部がやや厚く切り離される。切り離しの面に粘土の剥離痕があり、柱状に成形された可能性がある。4は、色調は外面がにぶい黄橙色であるが、内面は黄灰色を呈する。



第11図　SD1遺構実測図



第12図　SD1出土遺物実測図

(2) SD2

溝状遺構で、長さ2mの範囲で検出された。調査区北壁に続いており、本来はSD1と同様に北北西から南南東方向に延びていたと考えられる。

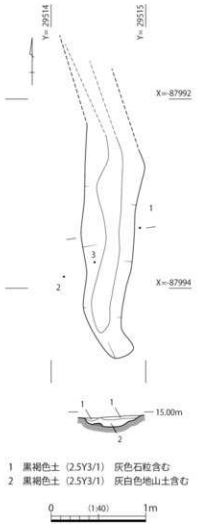
平面形は不整形ながら、検出した範囲では直線的で、屈曲はみられない。ただし、北壁にみられるSD2の位置からすれば、北北西方向からやや曲がっているようである。幅は60㎝、深さは10㎝と浅く、現状では南南東がすぼまり消滅する。横断面形は、丸みを帯びた底面から両側面が緩い傾斜をもって立ち上がる。

埋土は、上下2層に分かれる。1層:灰色石粒を含む黒褐色土(2.5Y3/1)は薄くのっており、2層:灰白色地山土を含む黒褐色土(2.5Y3/1)は比較的厚くたまっている。1層・2層とも、礫や砂を多く含んでおり、標高が高い北北西側から水で流され堆積したと考えられる。

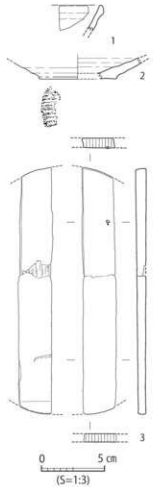
出土遺物には、白磁碗、土師器皿、木製品曲物がある。

第14図1は白磁碗口縁部の小片である。外面が緩い玉縁となり、丸みのある体部へ向う。2は土師器皿底部の小片である。大きく開く浅い体部をもち、底部外面には静止糸切痕が残る。

3は、曲物の底板の破片である。本来は径19.5㎝ほどの円形板で、厚さは8㎜ある。木取りは柾目取り、両端部は丸く加工される。材表面の一部に刃物痕と小さな釘様のものが残る。



第13図　SD2遺構実測図



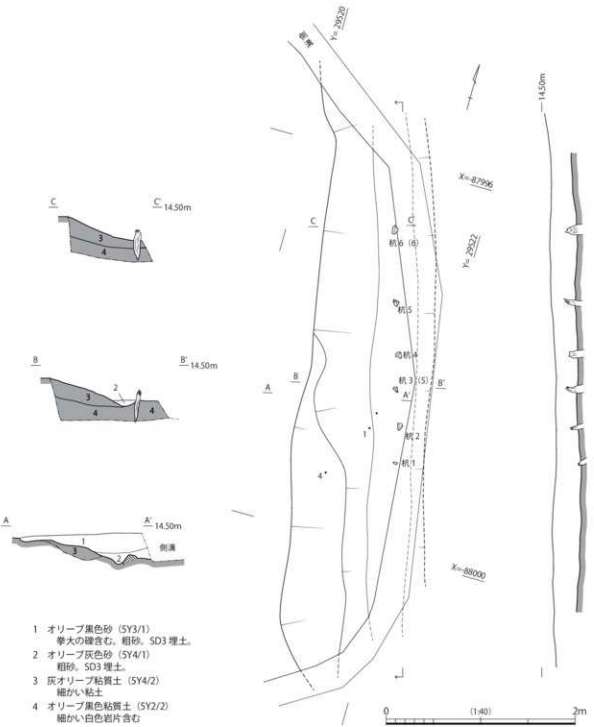
第14図　SD2出土遺物実測図

2.第10層上面

(1)SD3

溝状遺構で、長さ5mの範囲で検出されている。調査区北壁から続く遺構で、北北西から南南東方向へと延びるものである。溝は西辺のみ検出されているが、調査区北壁と南東壁には、溝の東辺断面が落ち込みとして確認できる。西辺と、この東辺の落ち込みから想定される溝の幅は1.4m・深さ30cmである。

溝は、基盤層となる3層：細かい粘土である灰オリーブ粘質土(5Y4/2)と4層：細かい白色岩片



第15図　SD3遺構実測図

を含むオリーブ黒色粘質土(5Y2/2)を掘り込んでいる。埋土は、上層から1層：拳大の礫を含むオリーブ黒色粗砂(5Y3/1)、2層：オリーブ灰色粗砂(5Y4/1)である。ともに砂礫層であり、標高が高い北北西側から流れ出し、堆積したものとみられる。

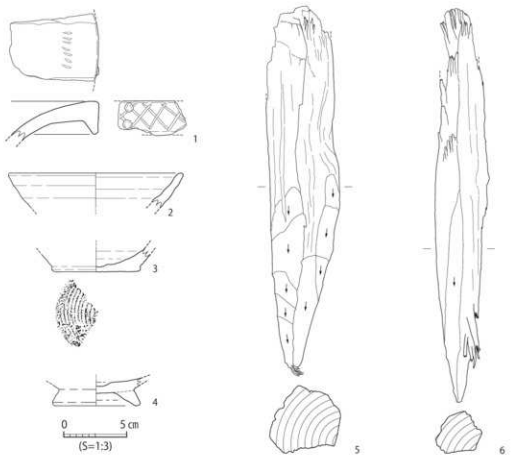
溝の底面には、40 ～ 80cm間隔で6本の杭がほぼ1列に並ぶように打ち込まれていた。杭の間隔は、杭1-杭2：80cm、杭2-杭3：50cm、杭3-杭4：40cm、杭4-杭5：40cm、杭5-杭6：40cmである。杭1-杭2間がやや広いが、間に打たれた杭が失われている可能性があり、40 ～ 50cm間隔で設けられていたようである。これらは、しがらみ、あるいは板などの押さえとして打ち込まれた可能性があり、溝は水路として利用されたと考えられる。

出土遺物には、弥生土器壺、土師器坏のほか、木杭がある。

第16図1は、弥生土器壺口縁部の小片である。口縁は大きく外反しており、端部は斜格子文と円形浮文、上面には刺突文が施される。

2 ～ 4は、土師器坏である。2は口縁部で体部は丸みを帯びる。3は、底部には高台はなく回転糸切痕が残る。4は外方に広がる高台をもち、回転糸切後に、高台を貼り付ける。

5・6は木杭である。5（杭3）は残存長31.2cm・幅3.3 ～ 3.7cmである。木材をミカン割りして先端は加工されて尖る。6（杭6）は残存長29.3cm・幅5.5cmである。木材をミカン割りしたもので、外面に自然面が残る。先端部は尖るよう加工される。なお、木杭の放射炭素年代を測定したところ、5は2σで707-883calAD、6は703-881calADであった。



第16図　SD3出土遺物実測図

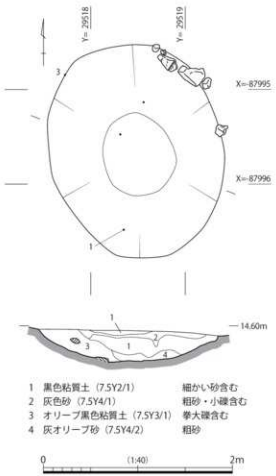
(2)SK1

平面形が整った楕円形をした土坑である。大きさは長径225㎝・短径185㎝・深さ33㎝である。大きさのわりに深さが浅いのが特徴的で、横断面形は底面が丸みを帯び、壁が緩く立ち上がる皿状になっている。北東辺では上端に沿う位置に、並べたようにみえる石が数個あるのが確認されている。SK1は大形の土坑であり、SD3に隣接する位置にあることから、これに関連する遺構とも考えられるが、その機能は明らかでない。

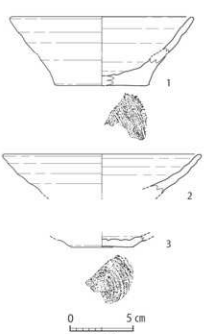
埋土は、西側に溜まる3層：オリーブ黒色粘質土(7.5Y3/1)を、1層：黒色粘質土(7.5Y2/1)と4層：灰オリーブ砂(7.5Y4/2)が切るように見える。1層は上層に2層：灰色砂(7.5Y4/1)を薄く挟んでいる。こうした状況からすれば、土坑は掘削後に1度3層で埋まり、その後、径150㎝程度の狭い範囲が再度掘り上げられ、1・2・4層が堆積したものとみられる。

出土遺物には、土師器坏・皿片がある。

第18図1は、大きく外傾する口縁と高台のない底部をもつ。口縁部と底部の接合はできなかったが、色調や作りから同一個体と判断した。底部はやや厚手になっており、回転糸切痕が残る。2は、やや丸みを帯び、外傾する口縁部である。3は高台のない底部で、回転糸切痕が残る。薄手で、体部は大きく開くので皿であろうか。



第17図　SK1遺構実測図



第18図　SK1出土遺物実測図

(3)SK2

平面形が不整形なくぼみである。大きさは、長さ250㎝・幅65～85㎝・深さ5㎝ほどである。不整形で浅いため、人為的に掘られた遺構ではないともみられるが、SK1・SD3に隣接することから、遺構として扱った。

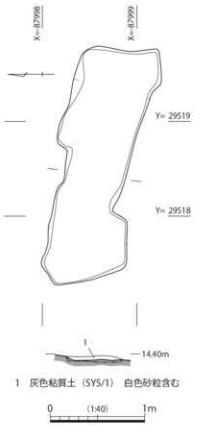
埋土は、1層で、白色砂粒を含む灰色粘質土(5Y5/1)である。

出土遺物はなかった。

(4) ピット

ピットは、54個が確認され、径は15～40㎝・深さは10～80㎝と様々である。

その大きさは小さいものが多く、配置に規格性が認められないことから、建物跡を想定することは難しい。例えば、農作業に使われるハデ木など、臨時的で簡易な施設に伴うものであったと思われる。

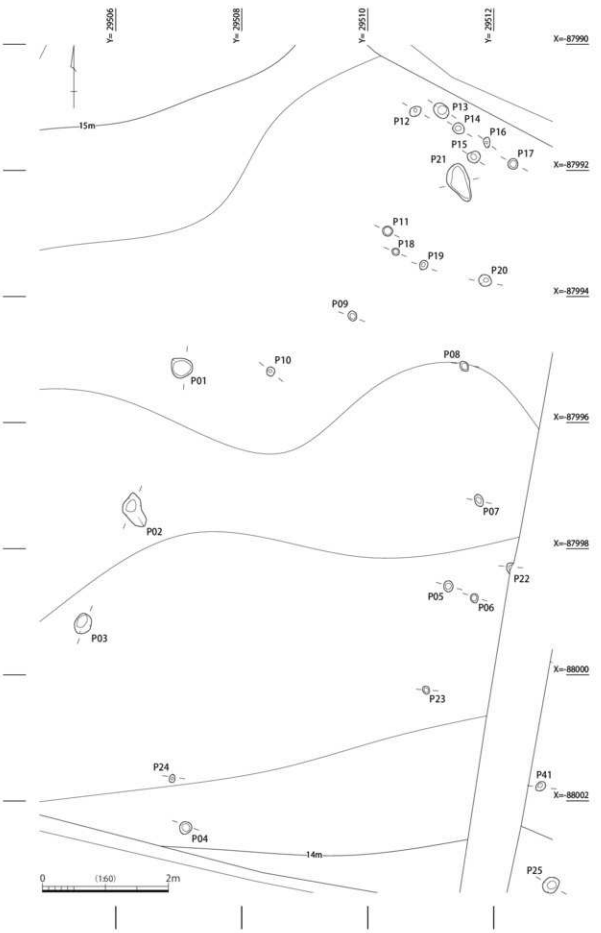


第19図　SK2遺構実測図

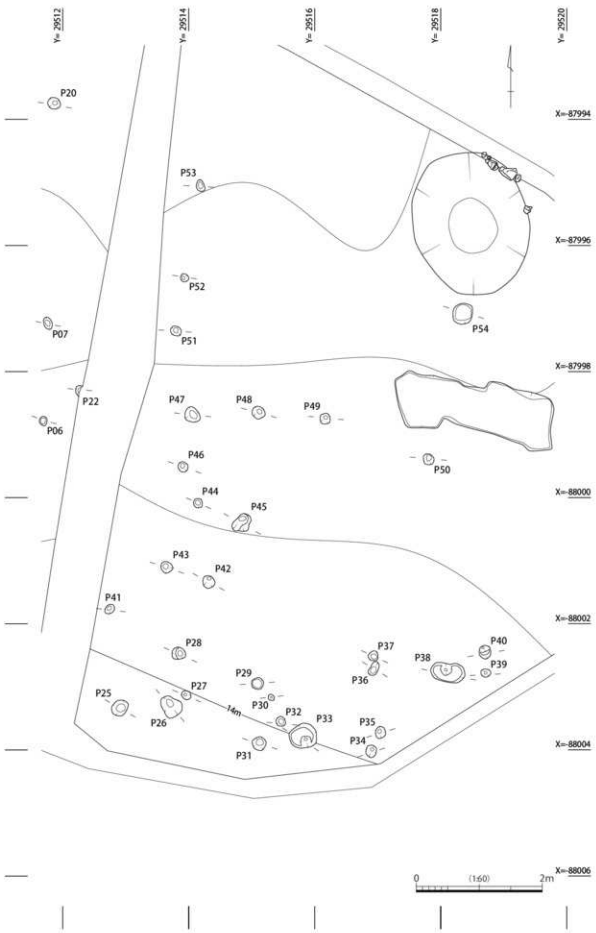
第2表　ピット計測表

遺構名	長径（cm）	短径(cm)	深さ（cm）
P01	38	34	19
P02	50	54	23
P03	34	28	19
P04	22	20	18
P05	20	16	42
P06	16	13	15
P07	21	13	58
P08	18	14	18
P09	16	14	33
P10	14	14	34
P11	18	16	22
P12	21	16	35
P13	28	22	44
P14	20	18	21
P15	20	20	26
P16	18	11	22
P17	18	18	30
P18	14	12	14
P19	17	14	58
P20	22	20	36
P21	64	36	10
P22	14		60
P23	14	12	58
P24	14	10	31
P25	28	24	46
P26	37	32	87
P27	18	14	31

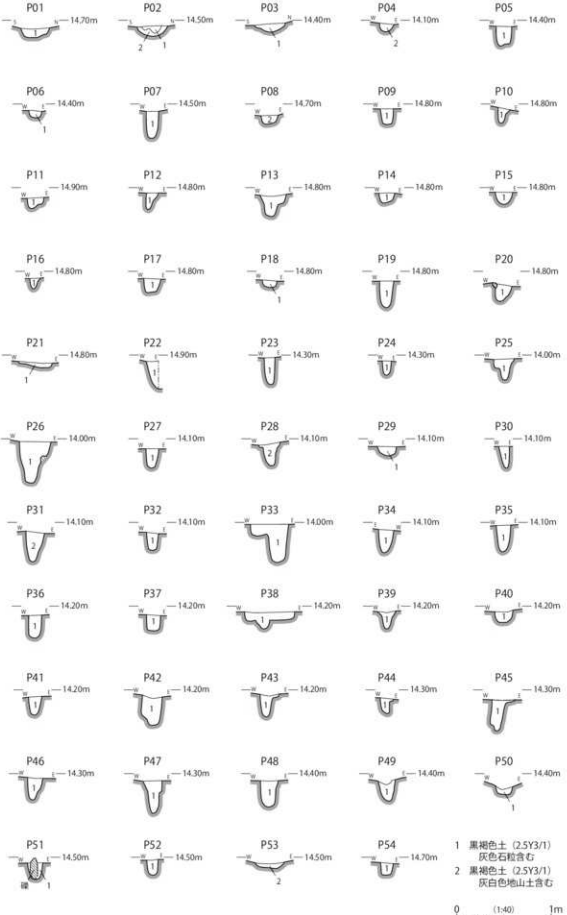
遺構名	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
P28	26	20	48
P29	22	20	20
P30	12	10	48
P31	22	22	64
P32	17	16	37
P33	45	44	80
P34	19	18	48
P35	18	18	57
P36	24	14	48
P37	18	17	34
P38	56	32	35
P39	16	14	38
P40	23	20	24
P41	18	14	39
P42	21	20	58
P43	21	21	47
P44	17	16	33
P45	33	26	66
P46	18	18	46
P47	27	24	68
P48	22	21	56
P49	18	18	44
P50	18	18	20
P51	18	17	35
P52	14	14	34
P53	37	34	12
P54	20	26	26



第20図　調査区西半部ピット実測図



第21図　調査区東半部ピット実測図



第22図　ピット断面実測図

第5節　遺構に伴わない遺物

1.概要

遺物包含層は、3層・4層・7層・8層である。調査区内では、中央トレンチを挟んで西側の方が東側よりも多い傾向があり、特に須恵器は調査区西辺付近で比較的まとまって確認されている（第23･24図）。出土状況は、ほとんどが小片で、原位置を保つものはない。こうした傾向からすれば、遺構に伴わない遺物の多くは、西側の丘陵から流入したものと考えられる。

遺物には、弥生土器、土師器、土錘、須恵器、土師質土器、陶磁器（青磁・白磁）、中世須恵器・瓦質土器がある。主体となるのは平安～鎌倉時代初めの須恵器・土師質土器・陶磁器で、弥生～古墳時代の弥生土器・土師器・須恵器は数が少なく小片が多い。

このうち、平安時代の須恵器には坏底部に「東」と書かれた墨書土器や、ヘラ書き文字の記された刻書土器があり、坏の底部を利用した転用硯も確認できる。陶磁器は、中国産の褐釉陶器、越州窯青磁、白磁、龍泉窯青磁があり、これらとともに国産の中世須恵器や土師質土器柱状高台付坏などが出土している。

2.弥生土器・土師器・土錘

第25図1・2は、弥生土器である。1は壺の頸部で、外面に斜行刺突文と羽状文が2段に施されており、その間に凹線がめぐる。文様は細く、鋭利な工具で刻まれている。2は、平底になった底部で、器壁が薄く小形の甕と推定される。

3～11は土師器である。3･4は、壺の頸部で、ともに複合口縁となるが、口縁は欠損する。3は頸部に斜行刺突文、4は口縁の下方に竹管文が2つ並ぶように施される。5・6は複合口縁の甕である。ともに口縁端部は平坦で、稜は横方向に突出する。

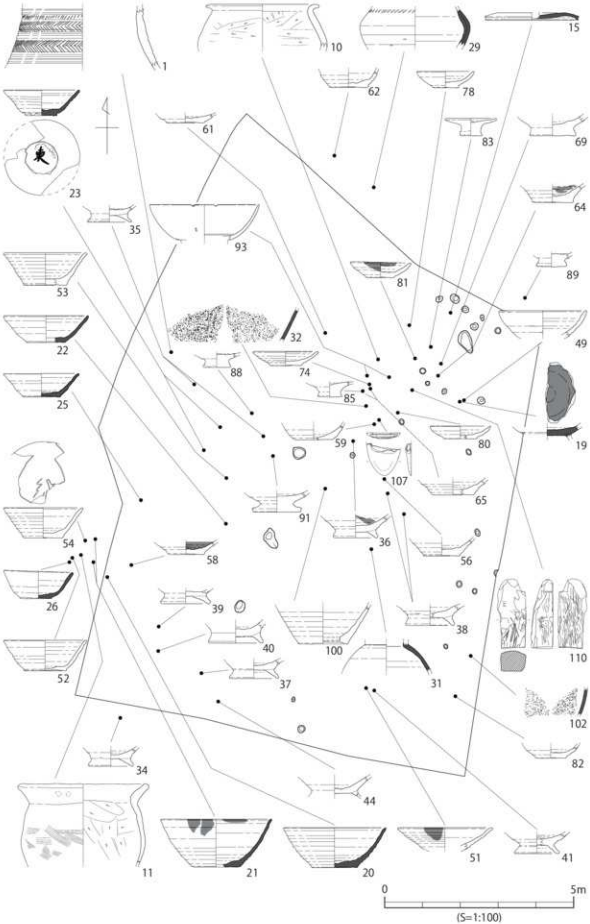
7は、高坏である。坏部と脚部の接合部分の小片で、脚部内面には中心に半貫通の孔のある円形粘土板を充填する。8は、外側に「ハ」字状に広がる脚部をもち、低脚坏とみられる。内面はヘラミガキ調整される。9は、厚手で深い体部をもち、底部に低い脚がつく。外面はハケメ、体部内面はケズリではなくナデ調整が行われていることから、台付壺ではなく低脚坏になると推定される。

10・11は、外反する単純な口縁をもつ甕である。10は口縁が短く、内外面にケズリが入る。11は、10よりも口縁が長く緩く外反する。胴部外面はハケメ、内面はヘラケズリである。これらの胴部外面は火を受け黒くなり、煮炊きに使われたとみられる。

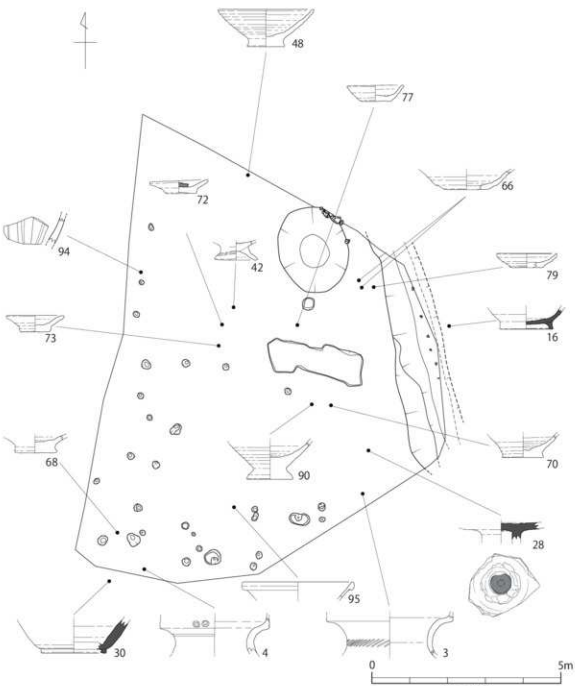
12･13は土錘である。12は両端を欠損しており、幅は0.8～1.5cmである。芯棒に粘土を巻き付けて成形したもので、粘土の接合痕や指による成形痕が残る。13も半分が欠損する。横断面形は整った円形をしており、幅は1.8cmである。

3.須恵器

第26図14･15は坏蓋である。14は頂部片で、輪状つまみが付き、その周囲は回転ヘラケズリがある。つまみは回転ナデ調整されるが、内側に切り離し痕がわずかに残る。15は、口縁部である。端部が短く屈曲するもので、頂部にはつまみの痕跡がある。外面には色調差があり、重ね焼きの痕跡とみられる。



第23図　調査区西半部遺物出土状況図



第24図　調査区東半部遺物出土状況図

16 ～ 19は高台付の坏である。16・17は、垂直に立つ高台をもつが、後者はやや低い。高台の内側には回転糸切痕が残る。18は、外方にやや広がった高台をもつ。底部外面に回転糸切痕が残るが、周囲は回転ナデ調整される。19は、高台を意図的に打ち欠き、硯に転用されたものである。内面は使用によって平滑になっており、墨痕が顕著に残る。外面底部には回転糸切痕があり、一部は欠損するが「ノ」状にヘラ描きがある。

20 ～ 27は高台をもたない坏である。20・21は、口径が16.2㎝～ 17.6㎝と大きく、器高も7.2㎝前後と深いものである。体部は丸みを帯びて立ち上がり、底部には回転糸切痕が残る。21は口縁が黒褐色に変色しており、灯明を灯すのに使われた可能性がある。27は、口縁を欠くため全形は不明だが、同様のものとみられる。22 ～ 26は、口径11 ～ 13.4㎝、器高3.7 ～ 4.5㎝である。外傾する口縁をもち、底部に回転糸切痕がみられる。23は、底部に大きく「東」と墨書がある。24 ～ 26は、口縁外面に色調差があり、重ね焼きの痕跡とみられる。

第27図28は高坏である。盤状になった平らな坏部をもつものであったようだが、坏部・脚部に意図的な打ち欠きがある。上下を逆にして脚部の内面をパレット状に使用しており、灰白色をした光沢のある薄い膜状の付着物が認められた。蛍光X線分析を行ったところ、リンやカルシウムが検出されたが、物質の特定には至らなかった(第4章第2節参照)。

29・30は壺である。29は肩部～胴部で、肩部は丸みを帯びる。外面に上部に刺突文が施されており、下半はヘラケズリ調整される。30は底部で、直立する低い高台をもつ。内面は荒れて斑状に剥離している。

31は、瓶の肩部である。頸部下に低い稜線が入っており、肩部が張らない特徴的な器形をもつ。胎土は細かく精良である。肩部には、微妙ながら剥離痕が観察でき、注ぎ口などが付いていた可能性がある。

32は、甕の胴部である。外面は平行タタキ、内面は同心円状の当て具痕が残る。内面には焼成時に生じた黒色の熔融物が付着する。

4.土師質土器

第27図33 ～ 45は高台付坏である。このうち、33 ～ 41は、外方に広がる高台をもつ。37は底部の切り離しが観察でき、回転糸切り後に高台を貼り付ける。また、37は坏部内面に黒変がみられる。41・42は、外方に広がる高い高台がある。43は、高台をナデ付けた際の痕跡が沈線状に残るほか、内外面に黒変がみられる。43･44は高台の端部を欠損するが、底部に回転糸切痕が残り、切り離し後、高台を付ける。

45は厚手で大形のもので、底部に高台の剥離痕がある。丸みを帯びた体部をもち、内面には黒変がある。坏部の破面も変色することから、破損後または意図的に口縁部を打ち欠き、灯明皿として利用されたことが考えられる。

第28図46 ～ 70は、高台の付かない坏である。46 ～ 51は、丸味のある体部をもち、底部が残るものはいずれも回転糸切痕を残す。46は内外ともに黒変がある。48は回転糸切りの位置が低く、底部が厚くなる。52 ～ 54は直線的に立ち上がり、外傾する体部をもつ。底部にはいずれも回転糸切痕を残す。54は内面底部にヘラにより文字を書いた刻書土器である。偏は、糸偏のようにみえるが、文字の判読は難しい。底部は回転糸切りの後、ナデ調整される。55 ～ 66は、薄手の底部で、

回転糸切痕がある。57は底部外面、58・64は内面に黒変がある。67～70は厚手の底部で、回転糸切痕がある。なお、60・63・70などの底部には、焼成前に付いた筋状の圧痕がみられる。

第29図71～82は、高台の付かない皿である。71は口縁が短く浅いもので、底部はヘラ切りである。72・73は口縁が大きく外反しており、底部に回転糸切痕を残す。72の内面は黒色の付着物がある。74～81は、体部が丸みを帯び、やや深い皿で、底部には回転糸切痕がある。このうち、81は口縁端部が赤く、鉄系の赤色顔料、ベンガラの塗布が推定される(第4章第2節参照)。口縁及び内面は黒く変色しており、灯明皿として使われたと考えられる。

83～89は、柱状高台付皿である。小形で浅い皿の底部が高く柱状になったもので、底部には回転糸切痕が残る。84の口縁部には黒変がある。90・91は、柱状高台付皿と同様に底部が厚いが、身が深く坏状になる。底部は、外側に広がる形態をとり、回転糸切痕がみられる。

92は、鉢の底部である。厚く、平底状になるものとみられるが、表面の風化が著しく、調整等は不明である。

5.陶磁器

陶磁器は、中国産陶磁器と国産陶器・中世須恵器が出土している。中国産のものは越州窯青磁・龍泉窯青磁・白磁・褐釉陶器があり、破片点数は第3表のとおりである。

第30図93は、越州窯青磁の碗である。丸みを帯びた体部をもち、口縁部に小さな切込みを入れ輪花となる。体部の一部に花弁を表現する沈線も観察できるが、その数は不明である。見込みには沈線がめぐる。

94は龍泉窯青磁碗の小片である。外面には中央に鎬のある蓮弁が表現される。

95～99は白磁の碗である。95～98は口縁部の小片で、95～97は外面が大きく膨らんだ玉縁となる。98は、これらより口縁の玉縁が小さいもので、わずかに膨らむ程度である。99は底部の破片である。高台は、低く厚めで露胎となる(▼以下)。見込は施釉されている。

100は褐釉陶器壺の底部である。外傾しながら立ち上がる体部をもち、底部は少し窪み上げ底になる。体部は施釉されるが、底部は露胎である。

101・102は中世須恵器甕の胴部である。ともに外面には格子タタキが入っており、内面はハケメ調整される。

103～105は、瓦質土器である。103は鉢の口縁部で、大きく外傾する体部をもち、口縁外面は帯状に厚く作られる。内外面ともにハケメ調整される。104は壺の口縁部で、口縁は短く垂直に立ち上がり、肩部が張り厚手である。体部内面には粗いナデが入る。105は香炉である。口縁はやや内傾しながら立ち上がり、底部は平底である。円形粘土板を底部とし、その上に帯状の粘土板を円形に回して成形されたものとみられる。外面には、「C」字状になった押捺文が3ヶ所に残る。内面上半部には黒変が認められる。

6.鉄製品・石製品

第31図106・107は鉄製品で、ともに鋳造品である。

106は鍋の口縁部で、復原口径は43cmある。口縁が大きく屈曲し、蓋受けとなるもので、屈曲部の外面には稜がついている。X線写真によれば、丸く小さな鬆がかなり認められる。

107は挟先の先端部で、袋部は大半が欠損する。上面は平坦、下面は丸みを帯び盛り上がる形状をもち、横断面形は低いカマボコ形となる。刃先は使用により、少し丸くなる。袋部は、現状で幅8.6㎝・高さ1.1㎝である。X線写真をみても鬆が少なく、鋳上りは良い。

108～110は、石製品である。

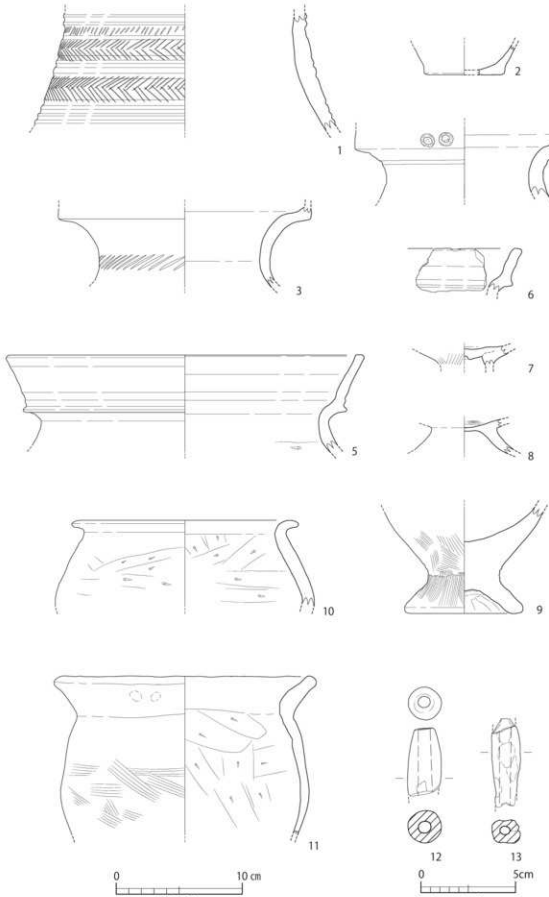
108は敲石で、両端部及び側面の一方に敲打痕が認められる。109は磨石で、両面が使用により滑らかになる。

110は砥石である。端部の一方が欠損することから、大形であったと推測される。上下面及び側面の一方の使用が顕著で、面が平滑になるほか無数の擦痕が残る。側面の一方は欠損するが、その破面にも部分的に研磨痕がみられる。

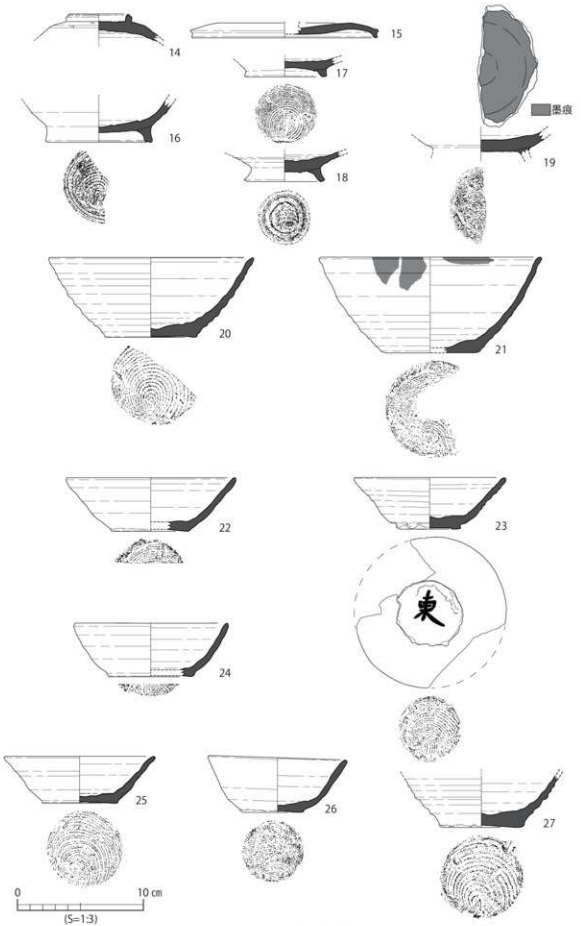
なお、調査区内では珪化木が出土している（図版41下）。大田市内では国天然記念物「波根西の珪化木」がよく知られており、周辺地域から持ち込まれたものとみられる。

産地	種別		器種	破片数	小計	備考
国産	中世須恵器	（亀山・勝間田・在地）	壺	13	14	
		（在地）	鉢	1		
	陶器	（茶色）	壺？	1	3	
		（暗褐色）		2		
中国産	褐釉陶器		壺	5	5	
	越州窯青磁	（輪花）	碗	4	4	
	龍泉窯青磁	Ⅱb類	碗	1	1	
	白磁	Ⅷ類	碗	1	18	SD1
		Ⅳ類	碗	1		SD2
		Ⅳ類	碗	5		
		小片		10		
		Ⅴ～Ⅷ類（外面クシ文）	碗	1		
計					45	

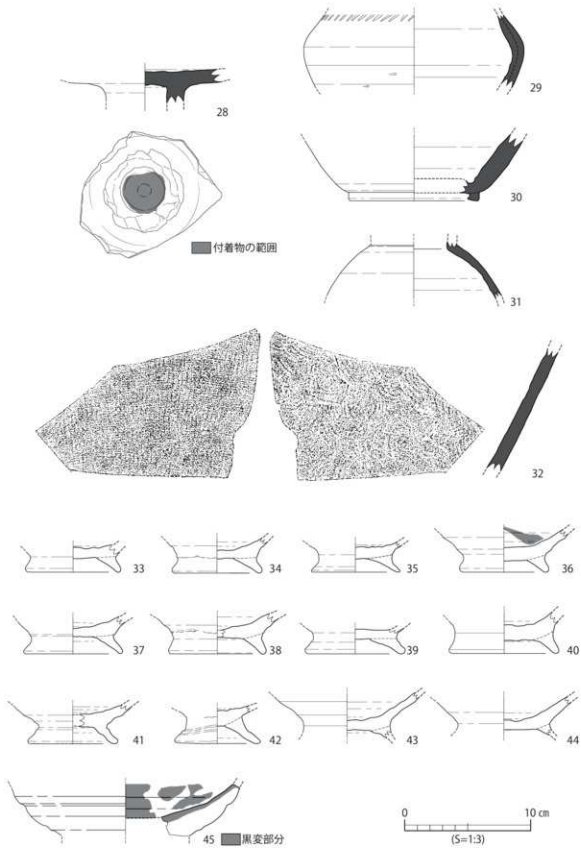
第3表　陶磁器集計表



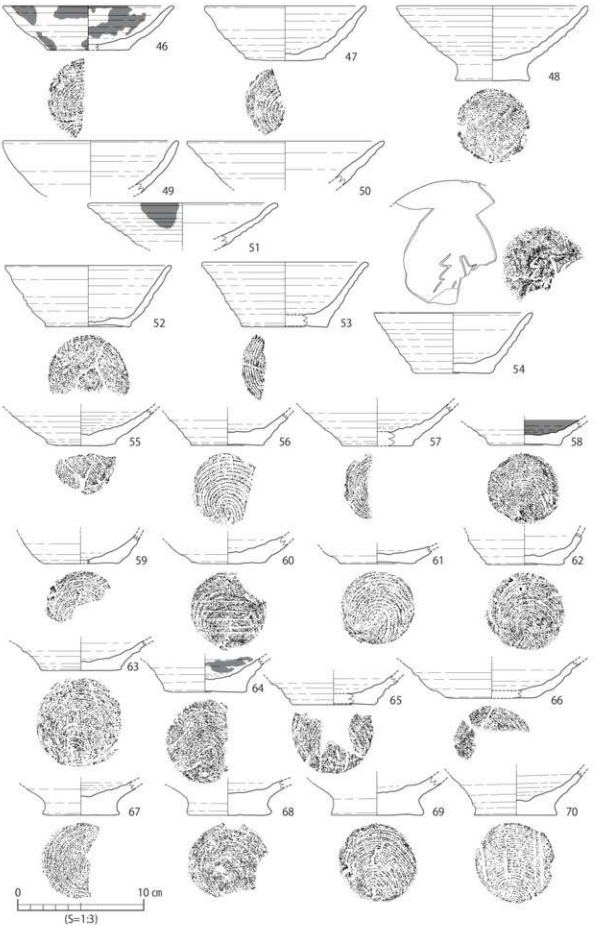
第25図　弥生土器・土師器・土製品実測図



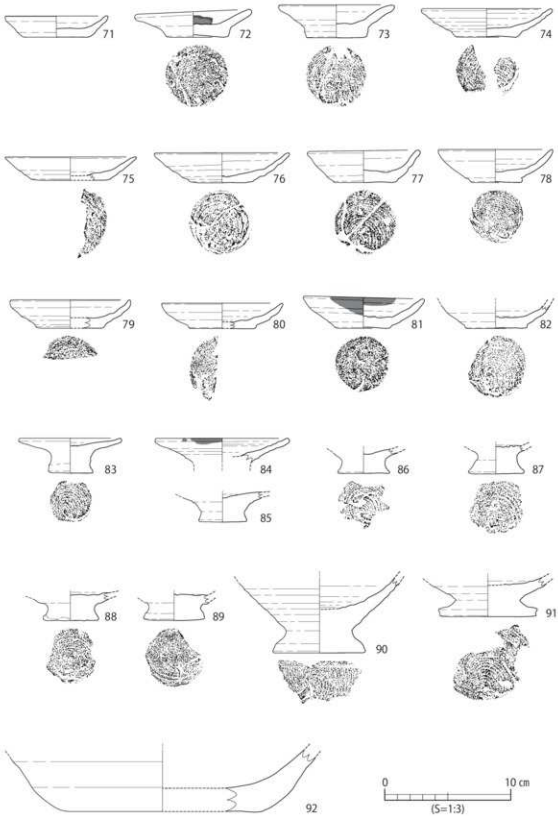
第26図　須恵器実測図



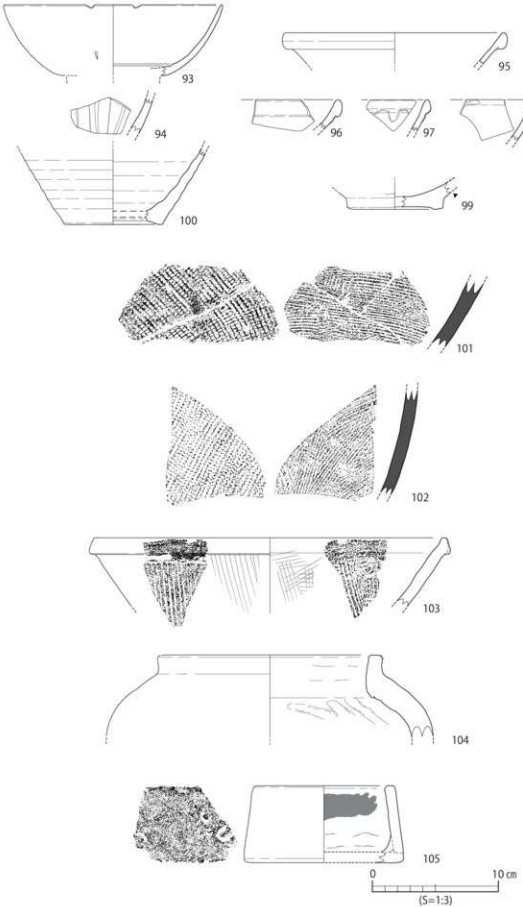
第27図　須恵器・土師質土器実測図



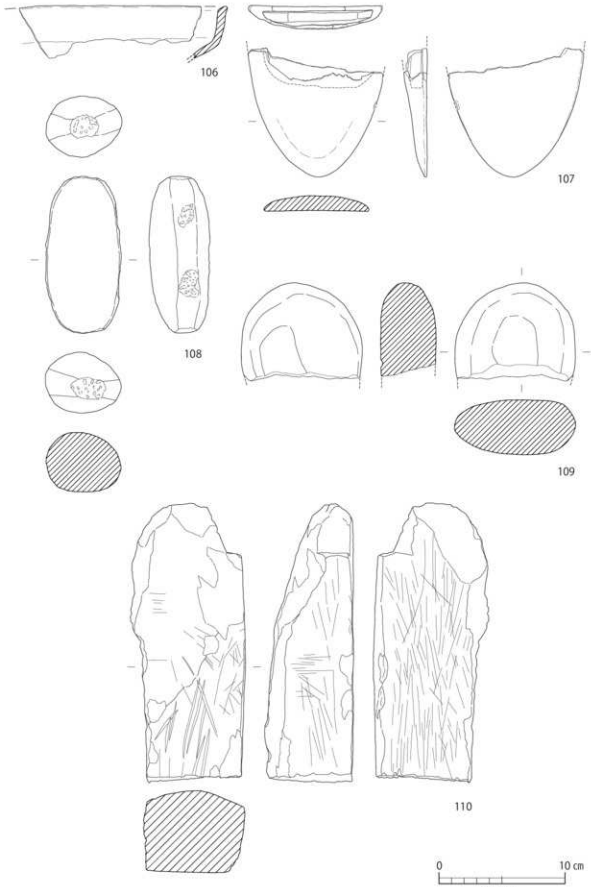
第28図　土師質土器実測図1



第29図　土師質土器実測図2



第30図　陶磁器・中世須恵器ほか実測図



第31図　鉄製品・石製品実測図

第４章　自然科学分析

第１節　半明遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

文化財調査コンサルタント（株）　渡辺正巳

はじめに

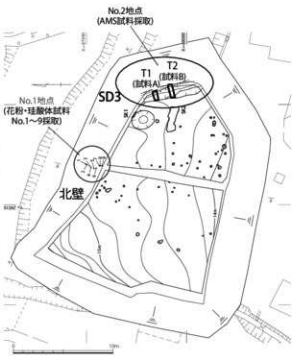
半明遺跡は島根県中部大田市長久町地内に位置し、活火山三瓶山に源流を持つ三瓶川が成す沖積平野に面した丘陵の裾野に立地する。また現在の日本海の海岸線までは、遺跡背後の丘陵を挟んで1.7km ほどである。

本報は遺跡内及び遺跡周辺での植生変遷を明らかにするとともに、遺構の時期を明らかにする目的で、文化財調査コンサルタント株式会社が、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターからの委託を受け、実施・報告した調査報告書を再編したものである。

分析試料について

分析試料のうち花粉分析、植物珪酸体分析用試料は、島根県教育庁埋蔵文化財センターと協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。AMS 年代測定用試料は島根県教育庁埋蔵文化財センターにより採取・保管されていた試料から分取していただいた。また、以下に示す平面図及び断面図は、島根県教育庁埋蔵文化財センターより御提供を受けた原図をもとに、作成した。

調査区平面図（第 32 図）中に試料採取地点を、各地点の断面図（第 33、34 図）中に分析試料の採取位置を示す。



第 32 図　試料採取地点位置図

分析方法

(1) 微化石概査方法

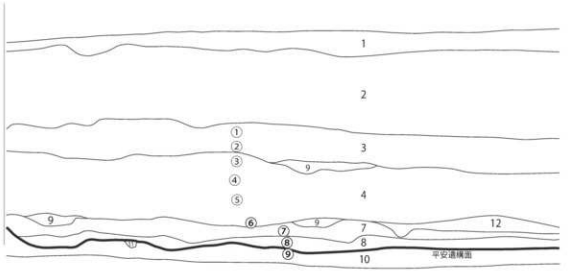
花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を５段階で示した。

(2) 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40 ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40 ミクロン未満) に細分した。

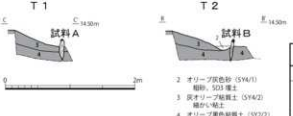
(3) 植物珪酸体分析方法

藤原 (1976) のグラスビーズ法に従って実施した。プレパラートの観察・同定は、光学顕微鏡に



1　暗褐色土（10YR3/3）　表土
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　造成土
3　黒褐色土（10YR3/2）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
4　黒色粘質土（2.5Y2/1）　明黄褐色土粒と石砕片を含む
7　黒色粘土（7.5Y2/1）　微小炭化物を含む
8　オリーブ黒色粘質土（5Y3/1）　砂礫含む
9　灰色粘土（5Y4/1）　砂礫含む，自然流路
10　灰白色シルト（7.5Y7/1）　砂礫含む
11　黒色粘質土（5Y1.7/1）　ピット埋土
12　黒褐色砂礫（5Y2/1）　奉大までの円礫を多く含む

第 33 図　調査区北壁花粉試料採取位置図



第 34 図 SD3AMS 試料採取位置図

より常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。同定に際して、母植物との対応が明らかな、イネ亜科の機動細胞を中心とした分類群 (第 4 表) を対象とした。また、植物珪酸体と同時に計数したグラスビーズの個数が 300 を超えるまで、計数を行った。

(4) AMS 年代測定方法

塩酸による酸洗浄の後に水酸化ナトリウムによるアルカリ処理、更に再度酸洗浄を行った。この後、二酸化炭素を生成、精製し、グラファイトに調整した。^{14}C 濃度の測定にはタンデム型イオン加速器を用い、半減期：5568 年で年代計算を行った。暦年代較正には OxCal ver. 4.4（Bronk Ramsey, 2009）を

第 4 表　同定対象分類群

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3	3	イネ籾殻（穎の表皮細胞）	イネ
栽培植物との対応が明らかな分類群	21	ムギ類（穎の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族 B	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ
4	11	サヤヌカグサ属	サヤヌカグサ・アシカキ
	13	マコモ属	マコモ
	31	ヨシ属	ヨシ
	33	ダンチク属	ダンチク
	35	ヌマガヤ属型	ヌマガヤ
	51	シバ属型	シバ属
	71	トダシバ属	トダシバ属
	81	ススキ属型	ススキ属
	83	ウシクサ族 A	チガヤ属など
	201	メダケ節型	メダケ節
	203	ネザサ節型	ネザサ節
母植物との対応が明らかな分類群	205	チマキザサ節型	チマキザサ節・チシマザサ節
	207	ミヤコザサ節型	ミヤコザサ節
	209	マダケ属型	マダケ属
	350	カヤツリグサ科（スゲ属など）	スゲ属
	390	シダ類	シダ類
	501	ブナ科（シイ属）	シイ類
	503	ブナ科（アカガシ亜属）	カシ類
	510	クスノキ科	バリバリノキなど（クスノキ以外）
	520	マンサク科（イスノキ属）	イスノキ属
	530	アワブキ科	アワブキ科
	540	モクレン属型	モクレン属
	570	マツ科型	マツ科
	580	マツ属型	マツ属

第 5 表　微化石概査結果

調査区	試料No.	花粉	微粒炭	植物片	珪藻	植物珪酸体	火山ガラス
北壁	1	○	○	△	◎	◎	○
	2	○	○	△	○	◎	○
	3	○	○	△	○	○	○
	4	○	○	△	◎	◎	◎
	5	○	△	△	◎	○	○
	6	△	◎	△×	△×	◎	△
	7	△	◎	△×	×	○	○
	8	△	◎	△×	×	◎	○
	9	○	◎	△×	×	◎	○

凡例 ◎ ：十分な数量が検出できる　○ ：少ないが検出できる　△ ：非常に少ない
△× ：極めてまれに検出できる　× ：検出できない

利用し、INTCAL20 (Reymer et al., 2020) を用いた。

分析結果

(1) 微化石概査結果

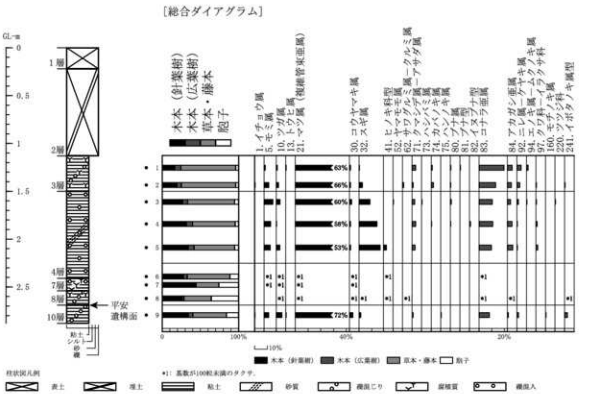
概査結果を第 5 表に示す。

試料№ 5 より上位と、6 より下位で微化石の検出傾向が異なった。上位では花粉、珪藻化石の検

第 6 表　花粉化石組成表

調査地点			北壁 No.1地点																	
地層			2層				4層								7層		8層		10層	
		試料No.	1		2		3		4		5		6		7		8		9	
3	*Podocarpus*	マキ属			1	0.5%													1	0.5%
5	*Abies*	モミ属	2	1.0%	8	3.8%	16	7.0%	11	5.2%	10	4.9%	2	7.7%	2	4.7%			8	3.7%
10	*Tsuga*	ツガ属	2	1.0%	4	1.9%	7	3.0%	1	0.5%	6	2.9%	2	7.7%	3	7.0%	3	5.3%	10	4.6%
13	*Picea*	トウヒ属	1	0.5%															1	0.5%
21	*Pinus* (*Diploxylon*)	マツ属(複維管束亜属)	131	63.0%	141	66.2%	138	60.0%	124	58.5%	108	52.9%	16	61.5%	34	79.1%	41	71.9%	157	71.7%
30	*Sciadopitys*	コウヤマキ属	2	1.0%	2	0.9%	4	1.7%	2	0.9%	2	1.0%	1	3.8%	4	9.3%	4	7.0%	6	2.7%
32	*Cryptomeria*	スギ属	1	0.5%	6	2.8%	20	8.7%	30	14.2%	34	16.7%					3	5.3%	3	1.4%
41	Cupressaceae type	ヒノキ科型									5	2.5%	1	3.8%			1	1.8%		
52	*Myrica*	ヤマモモ属					1	0.4%												
62	*Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属			2	0.9%											1	1.8%		
71	*Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属	6	2.9%	2	0.9%	3	2.2%	6	2.8%	5	2.5%							2	0.9%
73	*Corylus*	ハシバミ属					1	0.4%												
74	*Betula*	カバノキ属	2	1.0%	4	1.9%			1	0.5%										
75	*Alnus*	ハンノキ属																	1	0.5%
80	*Fagus*	ブナ属	1	0.5%	1	0.5%	2	0.8%	1	0.5%										
81	*Fagus crenata* type	ブナ型	1	0.5%																
82	*Fagus japonica* type	イヌブナ型							2	0.9%										
83	*Quercus*	コナラ亜属	41	19.7%	28	13.1%	24	10.4%	23	10.8%	20	9.8%	4	15.4%			2	3.5%	18	8.2%
84	*Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	8	3.8%	7	3.3%	6	2.6%	8	3.8%	9	4.4%					1	1.8%	2	0.9%
92	*Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	7	3.4%	5	2.3%	3	1.3%	1	0.5%	1	0.5%							3	1.4%
94	*Celtis-Aphananthe*	エノキ属－ムクノキ属	3	1.4%			1	0.4%												
97	Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科			1	0.5%	1	0.4%	2	0.9%	3	1.5%								
160	*Ilex*	モチノキ属																	1	0.5%
220	Ericaceae	ツツジ科					1	0.4%												
241	*Ligustrum* type	イボタノキ属型			1	0.5%											1	1.8%	5	2.3%
284	*Lonicera*	スイカズラ属									1	0.5%							1	0.5%
305	*Alisma*	サジオモダカ属			1	0.5%	3	1.3%	1	0.5%	1	0.5%					1	1.8%	1	0.5%
306	*Sagittaria*	オモダカ属	12	5.8%	18	8.5%	10	4.3%	5	2.4%	9	4.4%					5	8.8%	1	0.5%
311	Gramineae(<40)	イネ科(40ミクロン未満)	220	105.8%	203	95.3%	167	72.6%	99	46.7%	125	61.3%	17	65.4%	9	20.9%	24	42.1%	71	32.4%
312	Gramineae(>40)	イネ科(40ミクロン以上)	309	148.6%	322	151.2%	191	83.0%	157	74.1%	102	50.0%	18	69.2%	11	25.6%	14	24.6%	102	46.6%
320	Cyperaceae	カヤツリグサ科	25	12.0%	14	6.6%	16	7.0%	10	4.7%	5	2.5%	1	3.8%	1	2.3%	2	3.5%	16	7.3%
352	*Lilium*	ユリ属							1	0.5%										
411	*Rumex*	ギシギシ属							1	0.5%										
416	*Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節	3	1.4%	1	0.5%	2	0.9%	1	0.5%	1	0.5%					1	1.8%	6	2.7%
420	*Fagopyrum*	ソバ属			1	0.5%			1	0.5%					1	2.3%				
422	Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	3	1.4%	7	3.3%	7	3.0%	3	1.4%	3	1.5%	3	11.5%	5	11.6%	7	12.3%	12	5.5%
430	Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	0.5%	1	0.5%			1	0.5%										
450	Ranunculaceae	キンポウゲ科	5	2.4%	1	0.5%	4	1.7%	2	0.9%	5	2.5%					2	3.5%	4	1.8%
481	Cruciferae	アブラナ科					1	0.4%			1	0.5%								
651	*Patrinia*	オミナエシ属			2	0.9%														
677	*Cucumis*	キュウリ属							1	0.5%										
710	Carduoideae	キク亜科	6	2.9%	6	2.8%	6	2.6%	7	3.3%	1	0.5%	1	3.8%	1	2.3%	7	12.3%	4	1.8%
711	*Ambrosia-Xanthium*	ブタクサ属－オナモミ属							1	0.5%	1	0.5%							1	0.5%
712	*Artemisia*	ヨモギ属	2	1.0%	1	0.5%	5	2.2%	1	0.5%	3	1.5%							2	0.9%
720	Cichorioideae	タンポポ亜科	27	13.0%	23	10.8%	14	6.1%	6	2.8%	2	1.0%	4	15.4%	1	2.3%	8	14.0%	20	9.1%
802	*Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型											1	3.8%						
842	Subgenus Sceptridium	フユノハナワラビ亜属			1	0.5%											2	3.5%		
850	*Ophioglossum*	ハナヤスリ属							3	1.4%										
863	*Osmunda Cinnamomea* type	ヤマドリゼンマイ型							1	0.5%	1	0.5%			2	4.7%				
875	*Davallia*	シノブ属	2	1.0%			2	0.8%	2	0.9%	2	1.0%	2	7.7%	2	4.7%	4	7.0%	3	1.4%
881	Pteridaceae	イノモトソウ科	1	0.5%									1	3.8%	2	4.7%	4	7.0%	3	1.4%
886	Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	3	1.4%	2	0.9%	3	1.3%					2	7.7%	1	2.3%	10	17.5%	23	10.5%
891	Polypodiaceae	ウラボシ科			1	0.5%			1	0.5%										
898	MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	10	4.8%	6	2.8%	8	3.5%	3	1.4%	4	2.0%	2	7.7%	2	4.7%	7	12.3%	10	4.6%
899	TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	15	7.2%	22	10.3%	24	10.4%	14	6.6%	18	8.8%	1	3.8%	16	37.2%	44	77.2%	48	21.9%
木本(針葉樹)			139	16.3%	162	19.1%	185	26.7%	168	31.5%	165	33.8%	22	27.8%	43	44.3%	52	26.1%	186	34.1%
木本(広葉樹)			69	8.1%	51	6.0%	45	6.5%	44	8.2%	39	8.0%	4	5.1%			5	2.5%	33	6.0%
草本・藤本			613	71.9%	601	71.0%	426	61.5%	298	55.8%	259	53.1%	44	55.7%	29	29.9%	71	35.7%	240	44.0%
胞子			31	3.6%	32	3.8%	37	5.3%	24	4.5%	25	5.1%	9	11.4%	25	25.8%	71	35.7%	87	15.9%
総数			852		846		693		534		488		79		97		199		546	
含有量(粒数/g)			7,718		5,330		5,343		7,728		7,888		277		292		337		1,345	

左よりカウント粒数, 百分率



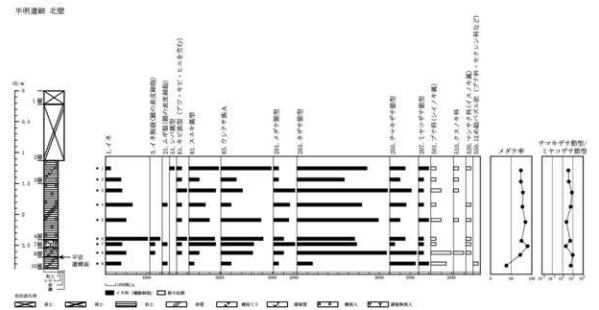
第 35 図　花粉

出量が多く、微粒炭の検出量が少なかった。一方下位では微粒炭の検出量が多く、花粉、珪藻化石の検出量が少なかった。また、植物片、植物珪酸体、火山ガラスの検出量に大きな差はなかった。

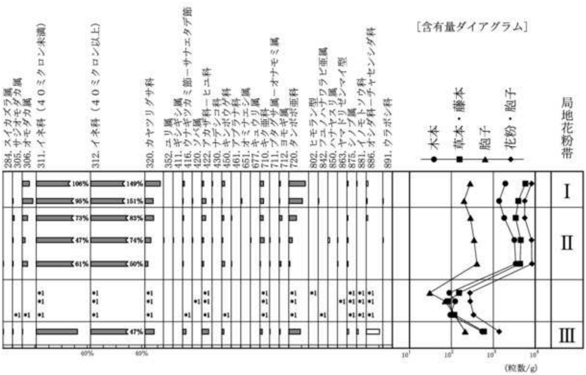
(2) 花粉分析結果

分析結果を第 35 図の花粉ダイアグラム、第 6 表の花粉組成表に示す。

花粉ダイアグラムでは、分類ごとに百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。）を、分類群ごとに異なるハッチのスペクトルで表している。このほか、[総合ダイアグラム] とし



第 36 図　植物珪酸体ダイアグラム



ダイアグラム

第７表　植物珪酸体化石組成表

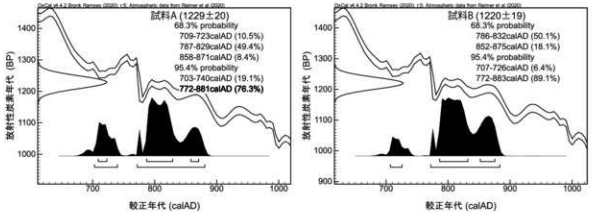
調査地点		北壁 No.1地点								
	地層	3層		4層				7層	8層	10層
	試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	イネ	1	3	3	5	4	8	3	4	3
		5	15	16	26	20	41	16	20	15
		0.14	0.45	0.46	0.77	0.58	1.19	0.47	0.06	0.42
3	イネ籾殻(穎の表皮細胞)	-	-	-	-	-	2	1	1	-
		-	-	-	-	-	10	5	5	-
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
21	ムギ類(穎の表皮細胞)	-	-	-	1	-	-	1	-	1
		-	-	-	5	-	-	5	-	5
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
51	シバ属型	1	-	-	-	-	-	-	-	-
		5	-	-	-	-	-	-	-	-
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
61	キビ族型	1	1	2	1	1	2	1	1	-
		5	5	10	5	5	10	5	5	-
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
81	ススキ属型	6	2	5	3	4	5	5	2	1
		29	10	26	16	20	25	26	10	5
		0.36	0.13	0.32	0.19	0.24	0.31	0.33	0.13	0.06
83	ウシクサ族A	10	4	4	2	8	8	6	6	2
		49	15	21	10	39	41	32	31	10
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
201	メダケ節型	1	1	4	3	3	2	4	2	1
		5	5	21	16	15	10	21	10	5
		0.06	0.06	0.24	0.18	0.17	0.12	0.25	0.12	0.06
203	ネザサ節型	14	9	17	12	12	11	11	17	3
		68	46	88	63	79	56	58	87	15
		0.33	0.22	0.42	0.30	0.38	0.27	0.28	0.42	0.07
205	チマキザサ節型	3	2	4	3	2	3	1	5	5
		15	10	21	16	10	15	5	26	25
		0.11	0.08	0.16	0.12	0.07	0.11	0.04	0.19	0.18
207	ミヤコザサ節型	2	1	1	1	2	1	1	1	2
		10	5	5	5	10	5	5	5	10
		0.03	0.02	0.02	0.02	0.03	0.02	0.02	0.02	0.03
501	ブナ科(シイノキ属)	1	1	2	1	2	1	1	4	3
		5	5	10	5	10	5	5	20	15
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
510	クスノキ科	1	1	1	-	1	-	-	2	-
		5	5	5	-	5	-	-	10	-
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
520	マンサク科(イスノキ属)	1	-	-	1	1	1	1	1	-
		5	-	-	5	5	5	5	5	-
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
550	はめ絵パズル状(ブナ属など)	-	-	-	-	-	-	-	-	1
		-	-	-	-	-	-	-	-	5
		-	-	-	-	-	-	-	-	-
プラント・オパール総数		230	148	239	209	247	254	212	271	127
カウントガラスビーズ数		483	478	473	467	493	478	455	483	490
カウント総数		713	626	712	676	740	732	667	754	617
試料重量(×0.0001g)		8970	8780	8770	8890	8940	8930	8800	8720	8860
ガラスビーズ重量(×0.0001g)		232	234	236	237	238	237	232	236	233
メダケ率(%)		73.6	73.7	78.6	77.4	84.6	75.0	89.8	72.0	38.2
チマキザサ節型／ミヤコザサ節型		3.67	4.00	8.00	6.00	2.33	5.50	2.00	9.50	6.00

上段　検出粒数
中段　検出密度(単位：×100粒/g)
下段　推定生産量(単位：kg/㎡・cm)

第８表　年代測定結果

試料										
試料№	地区	出土地点（遺構ほか）	状況	重量(g)	推定時期	前処理	$\delta^{13}C$ (‰)	$\delta^{13}C$補正無年代 (yrBP±1σ)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C 年代 (yrBP±1σ)
A	SR03	No.2地点 T1	木片	0.191	平安時代	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2%、水酸化ナトリウム：1.0%、塩酸：1.2%)	-22.92±0.21	1195±20	1229±20	1230±20
B		No.2地点 T2	木片	0.678		超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸：1.2%、水酸化ナトリウム：1.0%、塩酸：1.2%)	-20.94±0.23	1153±19	1220±19	1220±20

14C年代を暦年代に較正した年代範囲			
試料№	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲	測定番号
A	709- 723 cal AD (10.5%) 787- 829 cal AD (49.4%) 858- 871 cal AD (8.4%)	703- 740 cal AD (19.1%) 772- 881 cal AD (76.3%)	PLD-41896
B	786- 832 cal AD (50.1%) 852- 875 cal AD (18.1%)	707- 726 cal AD (6.4%) 772- 883 cal AD (89.1%)	PLD-41897



第 37 図　暦年較正結果

て分類群ごとの割合を示したほか、[含有量ダイアグラム] として分類群ごとに含有量（湿潤試料 1g 中の粒数）を算出し、変化を示している。また花粉・胞子化石含有量が少なく、木本花粉がほとんど検出できなかった試料№８～６については検出できた分類群を「＊」で示した。

(3) 植物珪酸体分析結果

分析結果を第 36 図の植物珪酸体ダイアグラム、第 7 表の植物珪酸体分析組成表に示す。

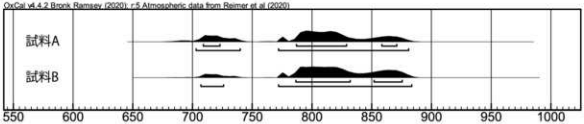
植物珪酸体ダイアグラムでは、検出密度を分類群ごとにスペクトルで表している（イネ科（機動細胞）は黒、樹木起源は白のスペクトルで表した。）。また、寒暖の指標である「メダケ率」と、関東地方での積雪量の指標である「チマキザサ節型 / ミヤコザサ節型」をグラフで示した。

年代測定値について

年代測定結果を第８表、第 37 図に示す。

第８表には、試料の詳細、前処理方法、$\delta^{13}C$ 値と 4 種類の測定年代を示している。第 37 図には INTCAL20（Reymer et al., 2020）を用いた暦年較正結果を示した。また、確率分布と σ、2 σ の構成範囲を示している。

第 38 図に暦年較正結果を並べて示す。試料 A（杭 6）から 1,230 ± 20yrBP（暦年較正年代：703 ～ 881 calAD：2 σ）、試料 B（杭 3）から 1,220 ± 20yrBP（暦年較正年代：707 ～ 883



第 38 図　暦年較正結果一覧

calAD：２σ）と、ほぼ一致した値が得られた。

また、これらの値は飛鳥時代～平安時代を示し、遺溝が認められた 10 層上面を平安時代遺溝面と考えることと、ほぼ一致する結果であった。

花粉分帯

花粉分析結果を基に局地花粉帯を設定した。また、花粉組成の変遷が明らかになるように、下位から上位に向かい記載を行った。

(1) Ⅲ帯（試料№ 9（～ 6））

マツ属（複維管束亜属）が高率を示し、コナラ亜属がこれに次ぐ。また、マツ属（複維管束亜属）を除く針葉樹種花粉の割合が高い傾向にある。

(2) Ⅱ帯（試料№ 5 ～ 3）

マツ属（複維管束亜属）が高率を示し、スギ属がこれに次ぐ。一方でスギ属は減少傾向を示す。このほかモミ属、コナラ亜属がそのほかの種類に比べやや高い出現率を示す。

(3) 1 帯（試料№ 4、5）

マツ属（複維管束亜属）が高率を示し、コナラ亜属がこれに次ぐ。一方でコナラ亜属は増加傾向を示す。

花粉化石が含まれなかった原因について

花粉分析の結果、下位の 3 試料では、花粉・胞子化石含有量が 500 粒 /g 以下と低く、木本花粉の検出量が 200 粒に達しなかった。植物珪酸体分析ではチマキザサ節型が多量に検出されるほか、ススキ属型、ウシクサ族 A（チガヤなど）が検出され、調査地が草地であった可能性が示唆される。また、微化石概査結果では微粒炭の含有量が多く、花粉分析で胞子、草本・藤本化石の割合が高いことなどからも、このことが示唆される。

土壌化に伴う堆積物であり、堆積速度が極めて遅く、紫外線により花粉・胞子粒が消滅した可能性が高い。また、微粒炭が相対的に多く含まれることから、これらによる希釈効果が生じた可能性もある。

従来の分析結果との比較

大田市街地を挟んで東部と西部では全く異なる完新世の花粉化石群集が得られることが知られている。東部の波根干拓地で得られたデータ（廉・渡辺，1996）では、スギ属が数～ 10%程度の出

現率にとどまることに対し、西部の仁摩平野ではスギ属が8000年前頃以前から中世頃まで高率を示している（渡辺・山田，2010など）。これら、更に東西の地域の結果と比べると、今回の結果のようにマツ属（複維管束亜属）が高率を示すのは、おおよそ中世末から近世以降のことと考えられる。

前述のように10層上面が平安時代の遺構面であり、花粉化石群集の比較結果（中世末から近世以降）とは異なる。したがってマツ属（複維管束亜属）が高率を示すのは、当該地域での局地的な植生を示していると考えられる。また、Ⅱ帯ではマツ属（複維管束亜属）に加えスギ属やモミ属が特徴的に検出されるなど、大田平野東西地域での中世頃までの特徴を併せ持つ。

一方、上部のⅠ帯ではモミ属、スギ属はほとんど検出されなくなり、中世末から近世の植生を示していると考えられる。

古植生について

植物珪酸体分析結果・花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生変遷について、設定した局地花粉帯ごとに考察する。

(1) Ⅲ帯期（試料№9(～6)）：平安時代以前

① 近辺の植生

植物珪酸体分析結果ではネザサ節型のほか、ススキ属型、ウシクサ属Aが多量に検出されるほか、イネ、イネ籾殻、ムギ類も検出される。一方花粉分析結果ではサジオモダカ属やオモダカ属などの水生植物由来の花粉も検出される。

これらのことから、試料採取地はススキやチガヤの繁茂する草地で、草地内の湿地にサジオモダカ類やオモダカ類が生育し、周囲の丘陵を覆う森林の林縁にはネザサ類などが分布していたと考えられる。一方で、栽培種であるソバ属花粉が僅かに検出されるほか、稲作を示唆するイネ科（40ミクロン以上）が花粉の出現率も高いことから、近辺でイネやムギ類、ソバが栽培されていた可能性が指摘できる

また、シイノキ属、クスノキ科、イスノキ属などの常緑広葉樹の植物珪酸体も僅かであるが検出されている。これら樹種の花粉は散布距離が極めて狭いか、分析処理の過程で花粉粒が消滅することが知られている。一方、これらと同じ常緑広葉樹で混交するアカガシ亜属の出現率は低率であることから、近辺の限られた場所にこれらの樹木が生育していたいと考えられる。

メダケ率が10層では例外的に低く、やや冷涼であった可能性が指摘できる。また、検出密度が低く確実ではあるが、チマキザサ節型の割合がミヤコザサ節型より高く、多雪であった可能性も示唆される。

② 周囲の山地植生

マツ属（複維管束亜属）が高率を示し、アカマツ林の広がりが推定できる。調査地は三瓶川の河口に近く、クロマツ海岸林に由来する可能性もある。

島根県西部の平野部では中世以前にスギ林が分布していたと考えられているが、大田平野では分析が成されていないことから不明であった。Ⅲ帯が特に局地的な植生を示す、あるいは花粉粒の劣化により選択的にスギ属花粉が消滅している可能性もあり、Ⅲ帯でのスギ林の動態については不明である。

(2) Ⅱ帯期（試料№５～３）：中世

① 近辺の植生

植物珪酸体分析結果ではネザサ節型のほか、ススキ属型、ウシクサ属Ａが多量に検出されるほか、イネも検出される。一方花粉分析結果ではイネ科（40ミクロン以上）が高率を示すほか、サジオモダカ属やオモダカ属などの水生植物由来の花粉も数％と高くなる。また、試料№４では栽培種のソバ属やキュウリ属が検出されるほか、ムギ類の植物珪酸体も検出される。これらのことから、試料採取地は休耕期にソバやキュウリ類、ムギ類が栽培される水田で、周囲にススキやチガヤの繁茂する草地、周囲の丘陵を覆う森林の林縁にはネザサ類などが分布していたと考えられる。またⅢ帯から引き続き、シイノキ属、クスノキ科、イスノキ属などの常緑広葉樹の植物珪酸体も僅かであるが検出されている。これらと同じ常緑広葉樹で混交するアカガシ亜属の出現率は低率であることから、引き続き近辺の限られた場所にこれらの樹木が生育していたいと考えられる。

メダケ率、チマキザサ節型の割合はⅢ帯と変化なく、引き続き温暖で多雪であった可能性が示唆される。

② 周囲の山地植生

スギ属の出現がⅢ帯から不連続であるが、試料№５で高く、その後減少傾向を示す。島根県西部の平野部では中世以前にスギ林が分布していたと考えられており、Ⅱ帯での傾向は中世以降の一般的な傾向と一致する。一方マツ属（複維管束亜属）は微増傾向にあり、大田平野周辺での開発に伴うスギ林の縮小と薪炭林としてのアカマツ林の拡大が推定できる。

(3) Ⅰ帯期（試料№２、１）：中世末から近世

① 近辺の植生

植物珪酸体分析結果に大きな変化はなく、ネザサ節型のほか、ススキ属型、ウシクサ属Ａが多量に検出されるほか、イネも検出される。一方花粉分析結果にも大きな変化はなく、イネ科（40ミクロン以上）が高率を示すほか、サジオモダカ属は低率になるもの、オモダカ属はやや高率になる。また、試料№２では栽培種のソバ属が検出される。これらのことから、試料採取地は休耕期にソバが栽培される水田で、周囲にススキやチガヤの繁茂する草地、周囲の丘陵を覆う森林の林縁にはネザサ類などが分布していたと考えられる。またⅢ帯から引き続き、シイノキ属、クスノキ科、イスノキ属などの常緑広葉樹の植物珪酸体も僅かであるが検出されている。これらと同じ常緑広葉樹で混交するアカガシ亜属の出現率も引き続きは低率であることから、引き続き近辺の限られた場所にこれらの樹木が生育していたいと考えられる。

メダケ率、チマキザサ節型の割合はⅡ帯と変化なく、引き続き温暖で多雪であった可能性が示唆される。

② 周囲の山地植生

マツ属（複維管束亜属）がやや減少し、コナラ亜属が増加する。薪炭林の主要な構成種としてアカマツ、コナラ類があげられ、アカマツ主体からコナラ類主体へと変化した可能性が示唆される。また、クロマツ海岸林が伐採されコナラ林へ変化した可能性も指摘できる。

まとめ

半明遺跡において、AMS 年代測定、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。この結果、以下の事柄が明らかになった。

1) AMS 年代測定値として、1,230 ± 20yrBP（暦年較正年代：703 ～ 881 calAD：2 σ）、1,220 ± 20yrBP（暦年較正年代：707 ～ 883 calAD：2 σ）の値が得られた。これらの値は飛鳥時代～平安時代を示し、遺溝が認められた 10 層上面を平安時代遺溝面と考えることと、ほぼ一致する結果であった。

2) 花粉分析結果を基に、Ⅲ～Ⅰ帯の局地花粉帯を設定した。Ⅰ帯については木本花粉の含有量、検出量が少なく、花粉粒の選択的な消滅が起こっている可能性が指摘できる。

3) Ⅲ帯で花粉化石の含有量、検出量の少ない原因について考察した。土壌化に伴い、紫外線により花粉・胞子粒が消滅したほか、微粒炭による希釈効果が生じた可能性もある。

4) 近隣地域での既知の花粉分析結果との比較検討を行った。Ⅲ帯（平安時代）にマツ属（複維管束亜属）が高率を示すことは、局地的な植生を反映した結果であると考えられた。一方でⅡ、Ⅰ帯については、中世、中世末から近世の特徴を示すと考えられる。

5) 花粉分析結果を基に、遺跡周辺地域の古植生変遷を推定した。特筆すべき事柄は、以下の通りである。

① Ⅲ帯の時期から、調査地近辺では農耕が行われていた。Ⅱ帯に入ると調査地で、水田耕作が行われていた可能性が指摘できた。Ⅱ帯ではイネのほかソバ、キュウリ、ムギ類が栽培されていたと考えられる。

② マツ属（複維管束亜属）が平安時代から高率を示す原因として、クロマツ海岸林の影響が示唆される。

引用文献

中村　純（1974）イネ科花粉について、特にイネを中心として．第四紀研究，13,187-197.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) －数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29

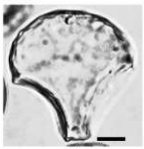
Bronk Ramsey, C. (2009). Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

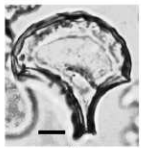
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

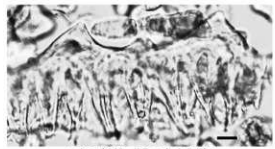
廉　鍾權・渡辺正巳（1996）羽根湖における OH94 ボーリング試料の花粉分析．島根大学地球資源環境学研究報告，15，41-46.

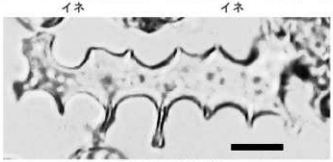
渡辺正巳（2010）花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法，174-177. ニュー・サイエンス社.

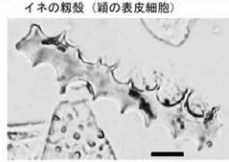
渡辺正巳・山田和芳（2010）五丁遺跡・庵寺遺跡発掘調査に伴う自然科学分析．梨ノ木坂遺跡 庵寺古墳群 庵寺遺跡Ⅱ，一般国道 9 号仁摩温泉津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，3，93-130，国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会.

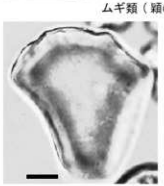

イネ

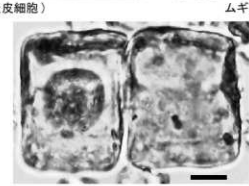

イネ


イネの籾殻（穎の表皮細胞）

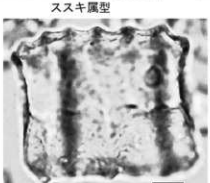

ムギ類（穎の表皮細胞）

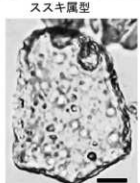

ムギ類（穎の表皮細胞）

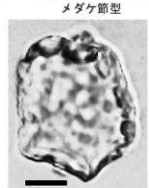

ススキ属型

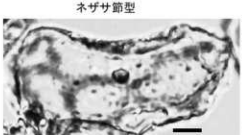

ススキ属型

メダケ節型


ネザサ節型


チマキザサ節型


ミヤコザサ節型


ブナ科（シイ属）

クスノキ科

マンサク科（イスノキ属）
スケールはすべて 0.01 ㎜

植物珪酸体化石顕微鏡写真

第２節　半明遺跡出土須恵器高坏付着物質と土師質土器坏付着赤色物質の蛍光Ｘ線分析

島根県埋蔵文化財調査センター　上山晶子

半明遺跡から出土した須恵器高坏（第 27 図 -28）の脚部内部に付着している物質と土師質土器坏(第 29 図 -81)の外面に付着している赤色物質について蛍光Ｘ線分析による成分分析を実施した。

1.　分析の方法と対象資料（試料）

分析の方法は、主に蛍光Ｘ線分析による元素定性分析である。使用機器は島根県古代文化センター所有、島根県埋蔵文化財調査センター設置の「エスアイアイ・ナノテクノロジー社（現；日立ハイテクサイエンス）製 SEA1200VX 卓上型ケイ光Ｘ線分析計（エネルギー分散型）」である。Ｘ線管球は Rh（ロジウム）、検出器はマルチカソード Si 半導体検出器である。対象の資料（試料）と測定条件については以下のとおりである。

（1）須恵器高坏（第 27 図 28）の脚部内部に付着している白色の物質

実体顕微鏡（20 倍）観察では、白色でやや光沢を持った塗膜状を呈していることが確認された。対象試料が凹部にあり、使用機器の仕様上、遺物に付着した状態では測定できなかったので、調査担当者から許可を得て、実体顕微鏡下で試料部分のみを 2㎜程度切り取って測定に供した。したがって一部破壊分析である。また、比較対象試料として、胎土部分（土器破断面）の測定を非破壊で実施した。測定条件は、測定時間 100 秒（一次フィルタ off、Cr、Pb 設定時；うち、測定可能な有効時間は　69 ～ 99 秒）と 300 秒（一次フィルタ Cd 設定時；うち、測定可能な有効時間は　289 ～ 300 秒）、試料室雰囲気は真空／大気、管電圧は試料室雰囲気真空時が 15kV、大気時が 50kV、管電流は管電圧の設定による自動設定（450 ～ 1000 μ A）、コリメータ（測定範囲）は直径 8.0mm である。一次フィルタとして、試料室雰囲気真空時には Cr フィルタとフィルタ off を設定し、大気時には Pb、Cd フィルタを設定した。なお、試料は Chemplex 社製マイラーフィルムを用いたマイラーカップに入れて測定した。

（2）土師質土器坏（第 29 図 81）の外面に付着している赤色物質

実体顕微鏡（20 倍）による観察では胎土の上に塗膜状を呈していることが確認されたため、当該箇所を非破壊で測定した。また、比較対象試料として、胎土部分（土器破断面）の測定も非破壊で実施した。測定条件は、測定時間 100 秒（うち、測定可能な有効時間は　91 ～ 95 秒）、試料室雰囲気は大気、管電圧は 50kV、管電流は管電圧の設定による自動設定（1000 μ A）、コリメータ（測定範囲）は直径 8.0mm である。一次フィルタとして Pb フィルタを設定した。なお、装置の仕様上、Chemplex 社製マイラーカバーを使用している。

2. 結果

以下のとおりである。

（1）須恵器高坏（第27図28）脚部内部に付着している白色の物質

白色の物質からは主に軽元素のスペクトルピーク（以下、ピーク）を検出した。胎土部分の測定結果と比較して、やや高いピークがみられる元素はCa（カルシウム）、P（リン）である。想定される物質として漆喰（水酸化カルシウム；$Ca(OH)_2$、長期間大気に暴露されると炭酸カルシウム；$CaCO_3$に変化；安田1986）やリン酸カルシウムを含む物質などがあげられるが、今回の分析結果だけでは判断できない。

（2）土師質土器坏（第29図81）の外面に付着している赤色物質

赤色部分からはFe（鉄）の高いピークを検出した。赤色で鉄を含む物質としては、赤色顔料のベンガラ（Fe_2O_3；酸化第二鉄）がある。胎土部分からもFeの高いピークを検出しており、胎土自体にも鉄が含まれているものとみられるが、顕微鏡観察の結果と併せると、鉄系の赤色顔料（広義のベンガラ）の使用が推測される。

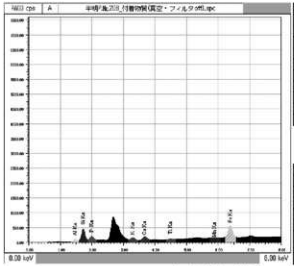
引用・参考文献

市毛勲 1998『新版　朱の考古学』雄山閣

朽津信明 2005「広島県福山市周辺の漆喰使用古墳について」『考古学と自然科学』51 日本文化財科学会 pp.11-18

白石純 2009「付載2 備前国分寺跡出土の白色物質について」『赤磐市文化財調査報告 第3集　備前国分寺跡』岡山県赤磐市教育委員会　pp.307-308

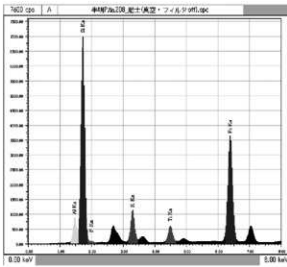
安田博幸 1986「五 古代赤色顔料と漆喰の材料科学」『日本考古学論集1 考古学の基本的問題』斎藤忠 編　吉川弘文館 pp.389-407



測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	78
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ0.0mm
励起電圧（kV）	15
管電流（μA）	1000
フィルタ	OFF
マイラー	7μA
ピーキングタイム	1.0msec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	978.228	1.35-1.62
14	Si	ケイ素	Kα	3404.349	1.60-1.88
15	P	リン	Kα	1491.117	1.88-2.15
19	K	カリウム	Kα	1802.029	3.16-3.46
22	Ti	チタン	Kα	1771.446	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	Kα	2628.833	5.73-6.07
26	Fe	鉄	Kα	6248.025	6.23-6.57
20	Ca	カルシウム	Kα	2107.953	3.54-3.84

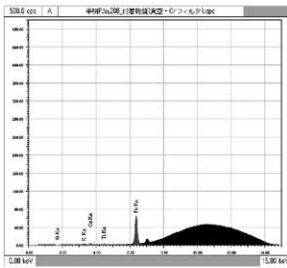
白色物質（真空・フィルタ off）



測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	69
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ0.0mm
励起電圧（kV）	15
管電流（μA）	450
フィルタ	OFF
マイラー	7μA
ピーキングタイム	1.0msec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
13	Al	アルミニウム	Kα	7314.479	1.35-1.62
14	Si	ケイ素	Kα	40271.139	1.60-1.88
15	P	リン	Kα	1326.779	1.88-2.15
19	K	カリウム	Kα	9946.587	3.16-3.46
22	Ti	チタン	Kα	2540.395	4.35-4.67
26	Fe	鉄	Kα	32560.997	6.23-6.57

土器胎土（真空・フィルタ off）

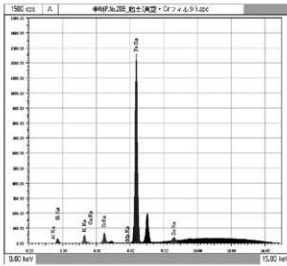


測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	97
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ0.0mm
励起電圧（kV）	15
管電流（μA）	1000
フィルタ	Cr薄
マイラー	7μA
ピーキングタイム	1.0msec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
14	Si	ケイ素	Kα	15.152	1.60-1.88
19	K	カリウム	Kα	24.525	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	Kα	38.310	3.54-3.84
22	Ti	チタン	Kα	23.256	4.35-4.67
26	Fe	鉄	Kα	308.958	6.23-6.57

白色物質（真空・Cr フィルタ）

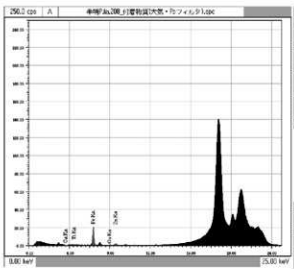
第 39 図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光 X 線分析スペクトルデータ 1



測定条件	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	94
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ8.0mm
励起電圧（kV）	15
管電流（μA）	1000
フィルタ	Cr厚
マイラー	フィルム
ピーキングタイム	1.0usec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	EO-I (keV)
13	Al	アルミニウム	K α	37.548	1.95-1.62
14	Si	ケイ素	K α	211.420	1.80-1.80
19	K	カリウム	K α	452.230	3.16-3.16
22	Ti	チタン	K α	344.098	4.55-4.67
25	Mn	マンガン	K α	104.665	5.75-5.97
26	Fe	鉄	K α	11097.373	6.23-6.27
20	Ca	カルシウム	K α	122.192	3.56-3.61
30	Zn	亜鉛	K α	525.066	8.46-8.82

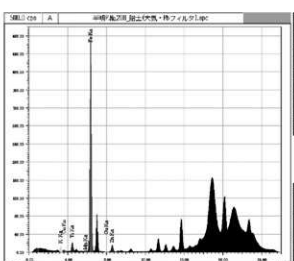
土器胎土（真空・Crフィルタ）



測定条件	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	96
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
フィルタ	Pb薄
マイラー	フィルム
ピーキングタイム	1.0usec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	EO-I (keV)
20	Ca	カルシウム	K α	16.604	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	14.570	4.35-4.67
26	Fe	鉄	K α	181.791	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	13.573	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	26.220	8.46-8.82

白色物質（大気・Pbフィルタ）

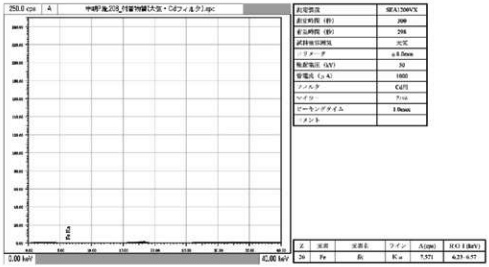


測定条件	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	89
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
フィルタ	Pb薄
マイラー	フィルム
ピーキングタイム	1.0usec
コメント	

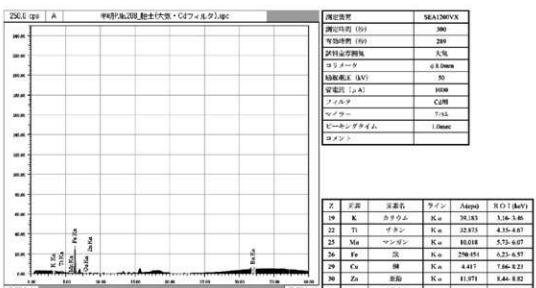
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	EO-I (keV)
19	K	カリウム	K α	118.399	3.16-3.46
22	Ti	チタン	K α	192.220	4.55-4.67
26	Fe	鉄	K α	4302.824	6.23-6.57
20	Ca	カルシウム	K α	53.242	3.56-3.84
25	Mn	マンガン	K α	48.701	5.75-5.97
30	Zn	亜鉛	K α	137.630	8.46-8.82
29	Cu	銅	K α	22.619	7.86-8.23

土器胎土（大気・Pbフィルタ）

第４０図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ２

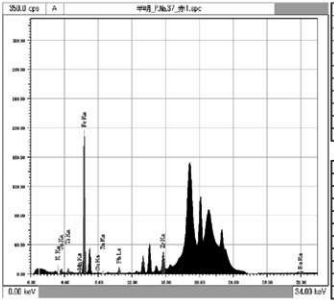


白色物質（大気・Cd フィルタ）



土器胎土（大気・Cd フィルタ）

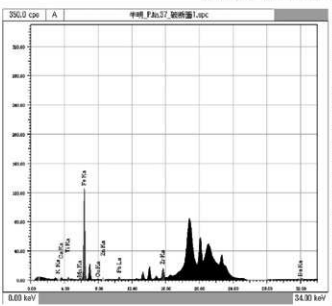
第 41 図　須恵器高坏脚部内部付着の白色物質と土器胎土部分蛍光Ｘ線分析スペクトルデータ３



測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	91
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
フィルタ	Pb用
ベイラー	3ベン
ピーキングタイム	1.0usec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	117.910	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	63.109	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	73.691	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	47.247	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	1751.771	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	23.129	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	44.411	8.44-8.82
40	Zr	ジルコニウム	K α	430.277	15.51-15.98
56	Ba	バリウム	K α	80.597	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	95.787	10.34-10.74

赤色物質（大気・Pb フィルタ）



測定装置	SEA1200VX
測定時間（秒）	100
有効時間（秒）	95
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ8.0mm
励起電圧（kV）	50
管電流（μA）	1000
フィルタ	Pb用
ベイラー	3ベン
ピーキングタイム	1.0usec
コメント	

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI(keV)
19	K	カリウム	K α	41.409	3.16-3.46
20	Ca	カルシウム	K α	38.502	3.54-3.84
22	Ti	チタン	K α	42.380	4.35-4.67
25	Mn	マンガン	K α	33.413	5.73-6.07
26	Fe	鉄	K α	1112.259	6.23-6.57
29	Cu	銅	K α	19.096	7.86-8.23
30	Zn	亜鉛	K α	38.006	8.44-8.82
40	Zr	ジルコニウム	K α	236.291	15.51-15.98
56	Ba	バリウム	K α	50.477	31.75-32.37
82	Pb	鉛	L α	50.165	10.34-10.74

土器胎土（大気・Pb フィルタ）

第 42 図　土師質土器坏外面付着の赤色物質と土器胎土部分蛍光 X 線分析スペクトルデータ

第5章 総 括

第1節 遺跡の立地と遺構

1．遺跡の立地

半明遺跡は、背後に鳥井丘陵を控え、南に大田平野を望むところに所在する。南向きの緩斜面である点は好立地といえる。

一方、遺跡は丘陵尾根に挟まれた谷部に位置することから、出水時には谷奥から砂礫が流れ込むような環境であった。調査区の北西側で、遺跡の基盤となる10層に覆われるように土石流で押し流されたとみられる山石が確認されている。また、調査区の東側を中心として遺物包含層である7層・8層が砂礫層である12層に覆われており、大雨などの際には繰り返し土石流に見舞われたこと示している。このことは、調査地点が集落に向くような安定的な環境ではなかったことを窺わせる。

2．検出された遺構

溝状遺構の性格　鳥井丘陵は標高100 m前後の低い山塊である。北側は日本海に面しており、背後に山地を控えるわけではないが、遺跡が所在する谷は降雨時ではなくても、かなりの湧水がある。

10層上面で確認されたSD3は、この谷から延びる溝状遺構である。出土した土師質土器や杭の放射性炭素年代から平安時代の遺構とみられる。底面には、1列に並ぶように杭が打ち込まれている。杭は、しがらみを絡める支柱、あるいは板などの押さえとして使われたとみられ、溝の機能を保つために管理が行われていたようである。砂礫で埋まることから、本来は水が流れていたと想定でき、SD3は谷水を利用するために設けられた水路であったと考えられる。

7層上面のSD1・SD2は、層位からみてSD3よりも後出するものだが、白磁が出土しており、やはり平安時代の遺構である。両者は、谷奥方向から並行して延びているが、幅は狭く浅い。その状況からは、SD3と同じ機能は想定し難いが、砂礫で埋まっているので、やはり水路の可能性がある。

花粉分析・植物珪酸体分析　平安時代の遺構面である10層と、これを覆う7層・8層の植物珪酸体分析によれば、イネ・イネ籾殻・ムギ類、花粉分析では水田雑草であるサジオモダカ属・オモダカ属のほか、ソバ属が明らかになっている。試料採取地周辺は水田稲作、休耕期にはムギ類、ソバの栽培が行われていたことが想定される。また、周囲はススキやチガヤが繁茂する草地があり、森林の縁辺にはネザサ類も分布していたようだ。

このような状況からすれば、SD3は水田に水を引く水路とみられ、SD1・SD2についても同様に耕作に関わる施設であったことが想定される。

ピットと土坑の性格　調査区内で確認された多数のピットは、径が小さく、一部は列状に並ぶものの、建物跡になるような規則性のある配置は確認できない。また、SD3の横で検出されたSK1は大形で楕円形状の整った土坑であるが、その機能は不明と言わざるをえない。

発掘調査を行った地点が水田あるいは畑であったとするなら、これらも農作業に関連する施設であった可能性が考えられよう。

第2節　出土遺物

1．土器

弥生土器ほか　弥生土器（第16図1、第25図1・2）、土師器（第25図3～7）は、いずれも小片である。前者は弥生時代中期、後者は古墳時代前期に遡る。半明遺跡の背後にある鳥井丘陵には、鳥井南遺跡[1]・御堂谷遺跡[2]・尾ノ上遺跡[3]など当該期の遺跡が展開する。

これらは小片であることから、背後の丘陵にある遺跡から谷水などによって流入したものとみられる。

須恵器　坏蓋（第26図14・15）や高台付の坏（同図16～18）のほか、高台をもたない坏（同図20～27）がある。このうち坏蓋は、14が輪状つまみ、15はつまみを欠くがボタン状になるようである。高台付の坏は、いずれも高台の内側に回転糸切り痕を残す。これらは石見の須恵器編年9期とされるものに類似する。回転糸切りによる切り離しは、9B期に始まるが、これが主体となるのは10期以降とされている[4]。

高台もたない坏は、口径が大きく体部が丸みを帯びるもの（20・21）と、口径が小さく体部は直線的で外傾するもの（22～27）がある。底部の切り離しは、回転糸切りのみである。前者に近い形態で低い高台をもつ坏や後者は、白坏遺跡の自然流路上層で出土しており、自然流路上層では「延喜九年」と記された木簡が確認できる[5]。このようにみると、須恵器は8世紀末～10世紀初め頃に属するものと考えられる。

土師質土器　高台付坏（第27図33～44）、高台の付かない坏（第28図46～70）、皿（第29図71～82）、柱状高台付皿（同図83～89）がある。高台付坏は、底部を回転糸切りで切り離した後、外方に広がる高台を付ける。足高高台と呼べるほど高台が高いものはない。また、高台の付かない坏のうち、第28図46・47、52～54は、前述した須恵器の同種のものと形態的に類似する。中祖遺跡では、これらと足高高台付坏が出土しており[6]、概ね9世紀～10世紀前半頃のものと思われる。

皿と柱状高台付皿は、松江市天満谷遺跡SD01[7]や出雲国府跡1号井戸跡[8]では白磁Ⅳ類とともに確認された。半明遺跡でも白磁Ⅳ類・Ⅷ類が搬出していることから、11世紀後半～12世紀代のものと考えられる。

2．陶磁器

中国産陶磁器　越州窯青磁碗（第30図93）は、釉薬の発色が良く、胎土が精良である。底部を欠くなど不明な点があり、Ⅰ類またはⅢ類とみられる。Ⅰ類は9世紀代、Ⅲ類であれば10世紀後半～11世紀中頃に位置づけられる[9]。褐釉陶器（第30図100）は、Ⅰ類に近い時期と考えられる。越州窯青磁碗がⅠ類なら、これらは須恵器や土師質土器坏と併行する段階である。

白磁は、SD1出土の底部（第12図1）は内面見込みの釉を環状に剥ぎ取ったもので、Ⅷ類に属し、12世紀中頃～後半に位置づけられる。SD2出土の口縁（第14図1）や、遺構に伴わない口縁（第30図95～98）・底部（同図99）は、肉厚な玉縁などの特色をもつことからⅣ類に属し、11世紀後半～12世紀前半のものとみられる。時期的には、前述した土師質土器皿・柱状高台付皿と併行する段階と考えられる。

龍泉窯青磁碗（第30図94）は、体部外面に鎬をもつ大きな蓮弁がある。Ⅱb類に属し、13世紀前半に位置づけられる。

国産陶器　中世須恵器（第30図101・102）は外面に格子タタキ、内面にハケメが入り、亀山焼あるいは勝間田焼とも呼ばれる。内面のハケメは、タタキの当て具痕を消すものであるが、こうした特色は鎌倉時代以降に現れるとされる。天満谷遺跡では、13世紀前半代とみられており、龍泉窯青磁の時期に近い。

3．鉄製品

鍋　鍋（第31図106）は、口縁部が屈曲し蓋受とする形態である。中世の鉄鍋は五十川伸矢の研究があり、鍋A：口縁に蓋受けの屈曲がつくもの、鍋B：弦をかける吊耳が口縁に付き底部に短い三足があるもの、鍋C：口縁に内側に吊るすための耳が付くもの（内耳鍋）に分けられる。これによれば、鍋Aに含まれるが、その年代は12世紀後半から中世末までとされる[10]。

五百川の論考を基に出雲の鉄鍋を検討した原田敏照は、1類：口縁部に蓋受けの屈曲がつくもの、2類：把手が付くもの、3類：吊るすための耳が口縁の内側につくものに大別する。そして鍋A類に当たる1類は、蓋受けが大きく屈曲し短いA類と、屈曲が緩やかで長いB類に分けている[11]。この分類よれば、半明遺跡出土の鍋は1A類となるが、1A類は共伴する土師器から概ね13世紀後半～14世紀という年代観が示されている。

半明遺跡の鉄鍋は、出土層位が3層で、白磁碗Ⅷ類を伴う7層上面のSD1よりも上位に含まれており、12世紀中頃～後半以降のものである。鍋Aでも蓋受けが大きく屈曲するものは12世紀代には存在するとみられることや、7層より上位の4層で出土した遺物には龍泉窯青磁碗や中世須恵器があることから、12世紀末～13世紀代のものと考えておきたい。

犂先　犂は、牛馬に曳かせて田畑を耕す唐犂に取り付けて使われた。犂の使用は、史料からは8世紀後半まで遡る。平安時代中期の『宇津保物語』や後期の『今昔物語』では、豪族・豪農が水田耕作に犂を使用したことが記されており、これらが中・近世の犂耕の源流と考えられている[12]。

犂先（第31図107）は、発掘現場では4層に含まれる遺物として取り上げた。鍋よりも深い地点で確認されているため、出土した標高をあらためて確認したところ14.87mであった。7層上面のSD1は検出面が14.75～14.9mであり、犂先は取り上げ層位どおり4層でも良いが、7層中であった可能性も考えられ微妙である。犂先の周囲で出土した土師質土器の標高は、9世紀～10世紀前半の土師質土器36・65・59・80は14.74～14.9m、11世紀後半～12世紀の柱状高台付皿85は15.0mであり、犂先の出土位置と大きな差はない。犂先はSD1が検出された7層上面よりも下に含まれていたともみられることから、12世紀末以前に遡る可能性もある。

犂先は、益田市匹見町広瀬で明治時代に出土したものが知られる。東京国立博物館が所蔵するこの犂先は、古くは古墳時代の犂耕に関わる資料と評価されたが、再検討が行われ、室町時代末以降のものであることが明らかになっている[13]。犂先は2つあり、長さは22㎝と25㎝、幅はともに18㎝である。上面（平坦な側）には舟形の隆条があり、起こした土をかき分けるものとされる。同様な犂先は、広島県福山市草戸千軒町遺跡で出土しており、土を傍にやる機能をもつ犂ヘラが伴う[14]。また、富田川河床遺跡でも、1666年（寛文6）の洪水で埋没したSB24で、犂先と犂ヘラが出土するが、犂先に舟形の隆条はみられない[15]。

半明遺跡の犂先は、上面に舟形の隆条はなく平坦で、匹見町広瀬出土品や草戸千軒町遺跡のものとは異なる。先端部の破片であるため、大きさをそのまま比べられないが、刃先から10㎝ほどの同じ部位で幅を比較すると、半明遺跡は9㎝程度であるのに対し、匹見町広瀬出土品・草戸千軒町遺跡・富田川河床遺跡のものは14～16㎝と幅が広い。半明遺跡の犂先は、室町～江戸時代前期のものより幅が狭いようである。

島根県内の鋳造鉄製品　山陰の中世鉄製品については八峠 興の論考などがあり、集成が行われている[16]。第9表はこれらを基にして、島根県内出土の鋳造鉄製品を一覧にしたものである。製品の多くは鍋・釜類で、平安時代後期の12世紀代以降、江戸時代までの資料が知られる。

半明遺跡出土の鋳造鉄製品は、12～13世紀代に位置づけられ、県内の鋳造鉄器としては古い段階のものと言える。また、犂先は、前述した出土例以外には知られておらず稀少である。

第3節　遺跡の評価

半明遺跡は、鳥井丘陵を背に、大田平野を南に望む位置にある。今回の調査範囲は、谷筋に当たるため、遺構としては水路や土坑、ピットが検出されたにすぎないが、周囲の尾根筋や丘陵裾部に広がる南向きの緩斜面は、集落、あるいは官衙など公的施設を営むのに好条件を備えた場所といえる。出土遺物の中に、墨書土器や転用硯など文字に関わる遺物や、越州窯青磁・白磁など中国産陶磁器が含まれることは、調査範囲の周辺に公的施設や館などが存在したことを窺わせる。また、犂先の出土から、平安時代末には牛馬に犂を引かせて田畑を耕す犂耕が行われていたことも確認でき、先進的な農耕技術が早い段階から取り入れられたようだ。

『倭名類聚抄』によれば、安濃郡は波禰・刺鹿・安濃・静間・高田・川合・邑陀・佐波の8郷よりなる。また、『延喜式』は、石見国の駅家として波祢・託農・樟道・江東・江西の5駅をあげる。半明遺跡の周辺は、郡家が置かれた安濃郷に含まれたと推定される。郡家の所在地については、「コホゲ」の遺称や「内丁」・「外丁」の字名が残る長久町稲用説[17]や、式内社の迩幣姫神社があり「丁」の字名がみられる長久町土江説[18]がある。波祢の駅家は、「天馬」（伝馬）の地名がある波根町字上町の八幡宮付近に比定されており、旧波根湖の北東にあったとみられる[19]。これを繋ぐ古代山陰道について関和彦は、式内社との関わりが深いと考えており、波禰郷の朝倉彦命神社・苅田神社、刺鹿郷の刺鹿神社、安濃郷の野井神社、そして氏が郡家と推定する迩幣姫神社付近に至る経路を想定する[20]。

波禰駅家から安濃郡家までの山陰道推定経路の周辺では、天王平廃寺をはじめ、高砂遺跡・高原遺跡・中尾H遺跡・御堂谷遺跡・八石遺跡で文字に関連する資料が出土している（第10表・第43図）。天王平廃寺は、伽藍配置の詳細は明らかでないが、塔とその西側に建物跡が残っていた。塔心礎のほか水煙、「大」と4字をヘラ書きする文字瓦が確認された。同廃寺に近い高砂遺跡では、瓦に「陥衆」・「知識随力」などと刻書した平安時代後半の瓦経が出土している。中尾H遺跡と高原遺跡では木簡が検出され、前者には「二斗一升二合」と墨書がある。貢納物に付けられた荷札木簡とみられる。御堂谷遺跡は転用硯のほか、朱墨の付いた皿などが出土しており、背後の丘陵に寺院がある可能性が指摘される。また、八石遺跡は安濃郡家の推定地に近く、円面硯が出土している。これら文字に関連する資料がみられる遺跡は、役所・寺など公的施設の存在を窺わせるものであり、相互に山陰道を通じて結ばれていたとも考えられる。

第9表　島根県内出土の鋳造鉄器一覧

遺跡名	所在地	遺構名	製品名	点数	時期	共伴遺物	文献
半明遺跡	大田市長久町		犂	1	12 ～ 13C	土師質土器	本報告
			鍋	1	12 ～ 13C		
北原本郷遺跡	雲南市木次町		鍋	1	12C 末～ 13C	鍛冶関連遺物・土師質土器	(1)
出雲大社境内遺跡	出雲市大社町	宇豆柱	釿	1	13C	鍛造釿・土師質土器	(2)
古市遺跡	浜田市下府町	SE2008	鍋	1	13C	折敷・土師質土器	(3)
原田遺跡7区	雲南市木次町		鍋	1	13C 後半～ 14C		(4)
福富Ⅰ遺跡	松江市乃木福富町	SB031	鍋	1	13 ～ 14C	銭貨	(5)
大井谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町	大溝2	鍋	1	14 ～ 15C		(6)
森Ⅴ遺跡	飯石郡飯南町	SK19	鍋	1	14 ～ 15C	土師質土器	(7)
		SK18	把手付鍋	1	15C 前半	土師質土器	
		SX	把手付鍋	1	15C 後半	土師質土器	
		SK09	鍋	1	15C 後半	五徳・土師質土器	
下布施氏館跡	雲南市木次町		鍋	1	14 ～ 16C 後半	陶磁器・釘	(8)
矢田横穴1群	安来市矢田町	2号穴	鍋	1	15C 後半	土師質土器・備前壺	(9)
板屋Ⅲ遺跡	飯石郡飯南町	SX01	把手付鍋	1	15C	鉄鎌	(10)
大年／元遺跡	益田市美都町	竪穴遺構	鍋	1	15C 後半～ 16C	陶磁器	(11)
静間城跡	大田市静間町	主郭2	釜蓋	1	15C 後葉～ 16C 前葉	陶磁器・銭貨・鉄製品	(12)
普源田城跡	浜田市三隅町	段2	鍋	1	16C 前半	陶磁器	(13)
古志本郷遺跡	出雲市古志町	SX01	鍋	1	16C 以降	土師質土器	(14)
森Ⅴ遺跡	飯石郡飯南町	SK07	鍋	1	16C 以降	土師質土器	(7)
		SK10	鍋	1	16C 以降	五徳・土師質土器	
石見銀山遺跡静田地区	大田市大森町	SB01 坑口前	鍋	2	16C 後半	火箸・陶磁器	(15)
清水荒神塚遺跡	雲南市三刀屋町	埋納坑	鍋	1	16C ～ 17C 前半	土師質土器	(16)
殿屋敷遺跡	益田市匹見町	遺構外	鍋	2	中世		(17)
大鹿遺跡	雲南市木次町		鍋	1	中世	銭貨	(18)
広瀬	益田市匹見町		犂	2	室町末以降	槍・鏃・兜	(19)
富田川河床遺跡	安来市広瀬町	SB024	犂	1	17世紀中葉	陶磁器・錘・銭貨・小柄・小刀・刀子・硯	(20)
			ヘラ	2			
		SB031	鍋	4		陶磁器・小柄・鎌・鉈・鎹前・銭貨	
			釜	1			
青木遺跡	出雲市東林木町		鍋	1			(21)
下山遺跡	飯石郡飯南町		鍋	1			(22)
馬場遺跡	雲南市三刀屋町		鍋	2			(23)
西ノ平遺跡	雲南市木次町	C17 号墓	鍋	1	近世	煙管	(24)
小池古墳群	仁多郡奥出雲町	横穴墓前庭	鍋	1			(25)
崎前遺跡	仁多郡奥出雲町		鍋	1		土師質土器	(26)
宮ノ前遺跡	松江市玉湯町		鍋	1			(27)
石見銀山遺跡竹田地区	大田市大森町		鍋	1			(28)
古八幡付近遺跡	江津市敬川町		羽釜	1			(29)

第10表　大田市域の文字関連資料一覧

遺跡名	所在地	種別		釈文	時期	文献
半明遺跡	大田市長久町	須恵器	転用硯		奈良	本報告
		須恵器	墨書	東	平安	
		土師器	刻書	□	平安	
御堂谷遺跡	大田市長久町・鳥井町	須恵器	転用硯		奈良～平安初	(1)
中尾H遺跡	大田市久手町	木簡		(表) 二斗一升二合、(裏)石□	奈良	(2)
高原遺跡	大田市波根町	木簡		□□□□□□品□	奈良	
天王平廃寺	大田市波根町	瓦	刻書	大大大大	奈良・平安	(3)
高砂遺跡	大田市波根町	瓦経	刻書	陪衆　知識随力	平安	(4)
八石遺跡	大田市大田町	須恵器	円面硯		奈良・平安	(5)
鯛渕遺跡	大田市静間町	須恵器	墨書	郡　大	奈良～平安初	(6)
		須恵器	墨書	佛		
		須恵器	墨書	卜		
		須恵器	墨書	□		
		須恵器	刻書	司		
小金川遺跡	大田市静間町	須恵器	転用硯		奈良・平安	(7)
白坏遺跡	大田市水上町	須恵器	墨書	上内	奈良	(8)
		須恵器	墨書	大	奈良	
		須恵器	墨書	大	奈良	
		須恵器	墨書	梨	平安	
		須恵器	刻書	若狭氏成	平安	
		木簡		□□		
		木簡		□主　千寡		
		木簡		□嶋		
		木簡		止知一解　尚世名		
		木簡		小豆六斗		
		木簡		大豆五		
		木簡		豊□　稲せ		
		木簡		小豆六		
		木簡		小豆		
		木簡		三百丸		
		木簡		□主　千寡		
		木簡		□利生		
		木簡		真成		
		木簡		小月　長		
		木簡		人上　三主		
		木簡		縣主		
		木簡		□賜而　別召		
		木簡		九ゝ八十□　八九七□		
		木簡		□九　八ゝ□　五八□		
		木簡		延喜九年十一月四日	平安	
		木簡		□		
		木簡		草□　六□		
		木簡		□□　千□		
		木簡		□□□		
		木簡		□□		
庵寺遺跡	大田市仁摩町	須恵器	墨書	□	奈良・平安	(9)
ナメラ迫遺跡	大田市仁摩町	土師器	墨書	□	平安	(10)
		土師器	刻書	□井	平安	
中祖遺跡	大田市温泉津町	土師器	刻書	佐右	平安	

第43図　安濃郡の主な古代遺跡と式内社・官衙推定地

古代山陰道は、波禰駅家から旧波根湖の南岸を南西に向かい、鳥井丘陵の南側を通って安濃郡家に至った可能性がある。半明遺跡は、この推定山陰道からそう遠くないところに位置する。8世紀末から10世紀前半段階の墨書土器・刻書土器・転用硯がみられることは、付近に郡衙関連など公的施設があったことを思わせる。一方、白坏遺跡で出土した「止知一斛　尚世名」木簡は、国衙から耕地の耕作を農民が請け負う負名制と呼ばれる体制が10世紀初めにはこの地域に成立していたことを示す。「尚世名」とは徴税単位としての名の名称である[21]。遺跡名の「半明」は小字から命名したものだが、「明」は「名」に音が通じ示唆的である。

11世紀後半～13世紀前半段階には、白磁・龍泉窯青磁など中国産陶磁器のほか、国産陶器が出土するようになる。また、山陰では古い段階の鋳造鉄器が入り、先進的な農業技術である犁耕もいち早く導入されている。こうした様相からすれば、例えば有力者の館などが付近に存在することも考えられよう。

今回の発掘調査範囲は、遺跡の中心ではなかったことから、建物跡などの施設は検出されなかった。しかしながら、墨書土器・転用硯・中国産陶磁器・鋳造鉄器など特色ある遺物が出土しており、周辺が古代から中世前期における安濃郡の中心地域であったことを示す手がかりが得られた。

註

(1) 大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
大田市教育委員会 2018『鳥井南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
(2) 島根県教育委員会 2019『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴墓Ⅳ群 1 号穴』
(3) 島根県教育委員会 2019『尾ノ上遺跡・桜田遺跡』
(4) 榊原博英 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター
(5) 大田市教育委員会 1989『白坏遺跡発掘調査概報』
(6) 島根県教育委員会 2008『中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』
(7) 島根県教育委員会 1987『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
(8) 島根県教育委員会 2003『史跡出雲国府跡 1』
(9) 中国陶磁の分類は次の文献による。
太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』
(10) 五十川伸矢 1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 46 集　国立歴史民俗博物館
(11) 島根県教育委員会 2003『板屋Ⅲ遺跡（2）』
(12) 木下忠 1977「島根県匹見町広瀬出土の犂先の再検討」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会
(13) 前掲註（12）に同じ。
(14) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 1994『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ』広島県教育委員会
(15) 島根県教育委員会 1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
(16)a. 八峠興「山陰における中世の鉄製品について」『古文化談叢』第 52 集　九州古文研究会
b. 島根県教育委員会 2007『原田遺跡（3）』
(17)a. 野津左馬之助 1925『島根縣史 4』島根県
b. 中林保 1978「石見国」『古代日本の交通路Ⅲ』大明堂
(18) 関和彦 2015『古代石見への誘い道』今井出版
(19) 前掲註（17)b に同じ。
(20) 前掲註（18）に同じ。
(21) 井上寛司 1994「律令制の変容と解体」『温泉津町誌　上巻』温泉津町

第9表文献

(1) 島根県教育委員会 2005『北原本郷遺跡 1』
(2) 出雲大社 2018『出雲大社境内遺跡出土品保存修理報告書』
(3) 浜田市教育委員会 1995『古市遺跡発掘調査概報』
榊原博英 2001「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第 9 号
(4) 島根県教育委員会 2007『原田遺跡（3）』
(5) 島根県教育委員会 1997『福富Ⅰ遺跡・屋形 1 号墳』
(6) 出雲市教育委員会 2001『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』
(7) 頓原町教育委員会 2001『森Ⅴ遺跡』

(8) 島根県教育委員会 2005『前田遺跡（2）・下布施氏館跡・原田遺跡Ⅰ区』
(9) 島根県教育委員会 1969『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅰ集
(10) 島根県教育委員会 2003『板屋Ⅲ遺跡（2）』
(11)2002 年美都町教育委員会調査
(12) 島根県教育委員会 2018『静間城跡』
(13)2018 年島根県教育委員会発掘調査
(14) 島根県教育委員会 2001『古志本郷遺跡Ⅱ』
(15) 大田市・島根県教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅰ』
(16) 三刀屋町教育委員会 1976『殿河内遺跡発掘調査報告書』
(17) 匹見町教育委員会 1999『戦国時代の殿屋敷遺跡』
(18) 三宅博士 1985「土師質土器を伴う石鉢について」『島根考古学会誌』第 2 集
(19) 木下忠 1977「島根県匹見町広瀬出土の犂先の再検討」『考古論集』松崎寿和先生退官記念事業会
(20) 島根県教育委員会 1983『富田川河床遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
(21) 島根県教育委員会 2004『青木遺跡（中近世編）』
(22) 島根県教育委員会 2000『下山遺跡（1）』
(23) 島根県教育委員会 2001『馬場遺跡』
(24) 雲南市教育委員会 2005『西ノ平遺跡・コフケ遺跡』
(25) 横田町教育委員会 1992『島根県仁多郡横田町町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』
(26) 仁多町教育委員会 1994『日ヤケたたら跡・芝原遺跡』
(27) 島根県教育委員会 2006『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
(28) 大田市・島根県教育委員会 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告Ⅱ』
(29) 島根県教育委員会 2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』

第10表文献

(1) 島根県教育委員会2019『御堂谷遺跡・諸友大師山横穴墓Ⅳ群1号穴』
(2) 島根県教育委員会2013『門遺跡・高原遺跡Ⅰ区・中尾H遺跡』
(3) 島根県教育委員会1970『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅱ集
(4) 大國晴雄2004「釈迦の教えを伝える瓦経の発見・高砂遺跡」『しまね考古風土記』島根県遺跡調査員の会
(5) 大田市教育委員会2000『八石遺跡』
(6) 大田市教育委員会2017『鯛渕遺跡』
(7)2020年島根県教育委員会発掘調査
(8) 大田市教育委員会1989『白坏遺跡発掘調査概報』
(9) 島根県教育委員会2009『五丁遺跡・庵寺Ⅰ遺跡・於才迫遺跡』
(10) 島根県教育委員会2008『中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』

第11表　半明遺跡出土土器観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量 0 内復元値（cm） 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
12-1	24	145		SD1		白磁	碗			5.9	緻密	良好	外面：黄灰色 2.5Y6/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：露胎 内面：施釉、蛇の目釉剥ぎ	白磁碗Ⅳ類
12-2	24	141		SD1		土師器	高台付坏				密（0.5 ～ 1 mm の砂粒を多く含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：黄灰色 2.5Y6/1	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	内黒状
12-3	24	149		SD1		土師器	坏				密（1 ～ 3 mmの赤色粒子を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	回転糸切後、底部に粘土を貼った痕跡
12-4	26	143		SD1		土師器	坏			4.8	密（1 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：黄灰色 2.5Y5/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	内黒状
14-1	24	215		SD2		白磁	碗				緻密	良好	外面：灰白色 5Y8/1（釉） 内面：灰白色 5Y8/1（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
14-2	24	216		SD2		土師器	皿			(6.2)	密（1 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、静止糸切り 内面：回転ナデ	
16-1	25	249		SD3		弥生土器	壺				粗（1 ～ 3 mmの砂粒を多く含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：斜格子文、円形浮文 内面：刺突文	
16-2	25			SD3		土師質土器	坏	(13.8)			密（1 mmの砂粒を僅かに含む）	良	外面：灰白色 2.5Y8/2 内面：灰白色 2.5Y8/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
16-3	25			SD3		土師質土器	坏			(9.0)	密（0.5 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：黄灰色 2.5Y4/1 内面：黄灰色 2.5Y4/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
16-4	25	237		SD3	7	土師質土器	高台付坏			(7.0)	やや粗（1 ～ 2 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい褐色 7.5YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
18-1	26	248		SK1		土師器	坏	(14.6)	(5.5)	(7.6)	密（1 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：灰黄色 2.5Y7/2 内面：灰黄色 2.5Y7/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
18-2	26			SK1		土師器	坏	(15.8)			密（1 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：灰白色 2.5Y8/2 内面：灰白色 2.5Y8/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
18-3	26	265		SK1		土師器	皿			(5.0)	密（2 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
25-1	27	47	B2		4	弥生土器	壺				粗（0.5 ～ 1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：黒色 5Y 2/1	外面：刺突、羽状文、凹線 内面：ナデ	
25-2	27		C3			弥生土器	甕			(6.4)	粗（1 ～ 2 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい橙色 7.5YR7/3 ～褐灰色 10YR6/1 内面：にぶい橙 7.5YR7/3	外面：調整不明 内面：調整不明	
25-3	27	235	C3		7	土師器	壺				粗（1 ～ 3 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：橙色 5 YR7/6 内面：橙色 5 YR7/6	外面：斜行刺突文 内面：調整不明	
25-4	27	219	C3		7	土師器	壺				粗（1 ～ 3 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：竹管文、沈線 内面：調整不明	
25-5	27		B2		3	土師器	甕	(28.4)			粗（1 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい橙色 7.5YR7/3 内面：にぶい橙色 7.5YR7/3	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ、ケズリ	
25-6	27		C2		7	土師器	甕				粗（1 ～ 2 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 10YR8/2 内面：灰白色 10YR8/2	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	
25-7	28		C3			土師器	高坏				粗（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：ハケ目 内面：調整不明	円形粘土板充填
25-8	28		B2		3	土師器	低脚坏				粗（1 ～ 3 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：明黄褐色 10YR7/6 内面：明黄褐色 10YR7/6	外面：ヨコナデ 内面：ヘラミガキ	
25-9	27		B2		3	土師器	低脚坏				粗（1 ～ 5 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：にぶい橙色 7.5YR6/4 内面：にぶい橙色 7.5YR6/4	外面：ハケ目 内面：ナデ	

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
25-10	28	169	B3		7	土師器	甕	(18.0)			粗（1 ～ 2 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：にぶい褐色 7.5YR ～黒色 5Y2/1 内面：にぶい褐色 7.5YR5/3	外面：ヨコナデ、ケズリ 内面：ケズリ	胴部外面火を受け黒変
25-11	28	9	B2		3	土師器	甕	(20.8)			粗（1 ～ 8 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：黒褐色 7.5YR3/1 内面：にぶい褐色 7.5YR5/4	外面：ヨコナデ、指頭圧痕、ナデ、ハケ目 内面：ヨコナデ、ヘラケズリ	外面煤付着
25-12	28		B3			土製品	土錘	長：(3.6)	幅：1.8	孔厘：6 mm	密（1 mmの砂粒を少し含む）	良	外面：灰黄褐色 10YR6/2	外面：ナデ	重量 7.7 g
25-13	28		B3		7	土製品	土錘	長：(4.7)	幅：1.5	孔厘：5 mm	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：ナデ、指頭圧痕	芯棒に粘土を巻き付けて成形 重量 7.5 g
26-14	29		B2		3	須恵器	蓋	つまみ径：(5.2)			やや粗（1 ～ 3 mm程度の砂粒を多く含む）	硬焼	外面：灰色 N6/ 内面：灰色 N6/	外面：回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	輪状つまみ
26-15	29	156	B3		7	須恵器	蓋	(14.7)			密（1 ～ 2 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 N5/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
26-16	29	240	B4		側溝砂礫層	須恵器	高台付坏			(8.5)	密（0.5 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白 5Y7/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
26-17	29		B3		7	須恵器	高台付坏			6.5	やや粗（1 ～ 5 mm程度の砂粒を多く含む）	硬焼	外面：灰色 7.5Y5/1 内面：灰色 7.5Y5/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
26-18	29					須恵器	高台付坏			6.3	密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	不良	外面：灰白色 2.5Y8/1 内面：灰白色 2.5Y8/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後周囲回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
26-19	29	97	B3		7	須恵器	高台付坏（転用硯）				密（0.5 ～ 1 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰色 N5/ 内面：灰色 N5/	外面：回転ナデ、回転糸切り後周囲回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	高台は意図的に打ち欠き、底部が外面中央に「ノ」へラ痕。
26-20	30	15	B2		3	須恵器	坏	(16.2)	6.3	(7.2)	密（0.5 ～ 1 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
26-21	30	1・2・8	B2		3	須恵器	坏	(17.6)	7.6	(7.3)	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	口縁端部内外面に黒変、灯明皿か。
26-22	30	77	B2		10	須恵器	坏	(13.4)	4.3	(6.2)	密（0.5 ～ 1 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰白色 N7/ 内面：灰白色 N7/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
26-23	30・31	61・63	B2		4	須恵器	坏	12.0	4.1	5.1	密（0.5 ～ 1 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰白色 N7/ 内面：灰白色 N7/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面墨書「東」
26-24	30		B2		3	須恵器	坏	(12.2)	(4.3)	(6.4)	密（0.5 ～ 2 mm程度の砂粒を多く含む）	硬焼	外面：灰色 N6/ 内面：灰色 N6/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	口縁外面重ね焼きの痕跡。
26-25	30	13	B2		3	須恵器	坏	(12.0)	3.7	6.0	密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	硬焼	外面：青灰色 5PB6/1 ～灰白色 5PBN8/ 内面：青灰色 5PB6/1 ～灰白色 5PBN8/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	口縁外面重ね焼きの痕跡。胎土が硬焼。
26-26	30	7	B2		3	須恵器	坏	11.0	4.5	4.9	粗（1 ～ 5 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 N 7/ ～灰色 N 4/ 内面：灰白色 N 7/ ～灰色 N 4/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	口縁外面重ね焼きの痕跡。全体的に歪む。
26-27	30		B2		3	須恵器	坏			6.7	密（1 ～ 2 mm程度の砂粒を少し含む）	硬焼	外面：灰白色 N7/ 内面：灰白色 N7/	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量（内復元値）(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
27-28	30	208	C3		4	須恵器	高坏				密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	脚を打ち欠き、パレットとして使用。脚内部に付着物。
27-29	30	34	A2		7	須恵器	壺				やや粗（1～3 mm程度の砂粒を多く含む）	良好	外面：灰白色 5Y7/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：回転ナデ、ヘラケズリ、刺突文 内面：回転ナデ	
27-30	32	214	C3		7	須恵器	壺				密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良好	外面：灰色 5Y6/1 内面：灰白色N 7/	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-31	32	157	B2		7	須恵器	瓶				密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良好	外面：灰白色 N8/ 内面：灰白色 N7/	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	肩部に注口が付く器種か
27-32	32	46	B2		4	須恵器	甕				密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良好	外面：灰白色N 7/～灰黄色 2.5 Y 6/2 内面：灰白色N 7/	外面：平行文タタキ、カキ目 内面：同心円文当て具痕	外面光沢ある自然釉
27-33	32		B2		3	土師質土器	高台付坏			(6.6)	密（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-34	32	20	C2		3	土師質土器	高台付坏			(7.2)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：にぶい黄橙色 10YR6/3	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-35	32	51・52	B2		4	土師質土器	高台付坏			(7.0)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：浅黄橙色 7.5YR8/4 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-36	32	58	B2		4	土師質土器	高台付坏			(7.1)	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 5YR7/4 内面：灰黄褐色 10YR6/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-37	32	19	C2		3	土師質土器	高台付坏			7.8	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-38	32	160・164	B2		7	土師質土器	高台付坏			(7.8)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/4 内面：灰黄褐色 10YR6/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-39	33	16	B2		3	土師質土器	高台付坏			(7.9)	やや粗（1～2 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-40	33	18	C2		3	土師質土器	高台付坏			(8.7)	密（1 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：灰白色 2.5 Y 8/2 内面：灰白色 2.5 Y 8/2	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-41	33	115	C2		7	土師質土器	高台付坏			(7.2)	やや粗（1～2 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
27-42	33	197	B3		4	土師質土器	高台付坏			6.8	密（1～2 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2～黒褐色 10YR3/1 内面：褐灰色 10YR5/1	外面：回転ナデ、貼り付け高台 内面：回転ナデ	内外面、脚部外面に黒変あり
27-43	33		B2		3	土師質土器	高台付坏				密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	不良	外面：淡赤橙 2.5YR7/4 内面：淡赤橙 2.5YR7/4	外面：回転ナデ、回転糸切り、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-44	33	121	C2		7	土師質土器	高台付坏				密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：橙色 2.5YR7/6 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り、貼り付け高台 内面：回転ナデ	
27-45	33		B2		3	土師質土器	高台付坏				密（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3～黒褐色 10YR3/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	内面黒変あり
28-46	33		B2		4	土師質土器	坏	(13.6)	3.5	(6.6)	密（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 10YR8/2～黒褐色 10YR3/1 内面：灰白色 10YR8/2～黒褐色 10YR3/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	内外面黒変あり
28-47	34		B3		4	土師質土器	坏	(12.8)	4.4	(6.4)	密（0.5～1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：褐灰色 10YR6/1 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
28-48	34	184	B3		4	土師質土器	坏	(15.2)	5.9	5.8	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-49	34	147	B3		7	土師質土器	坏	(14.0)			密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
28-50	34		C4		7	土師質土器	坏	(15.6)			密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：灰黄色 2.5Y7/2～黒褐色 2.5Y2/1 内面：灰黄色 2.5Y7/2～橙色 2.5YR7/6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	
28-51	34	114	C2		7	土師質土器	坏	(15.2)			密（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰黄褐色 10YR6/2 内面：灰黄褐色 10YR6/2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	外面黒変あり
28-52	34	6	B2		3	土師質土器	坏	(13.2)	4.9	(6.6)	密（0.5～1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：淡橙色 5YR8/4 内面：淡橙色 5YR8/4	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面に筋状圧痕あり
28-53	34	72	B2		10	土師質土器	坏	(13.2)	5.2	(6.8)	密（1～2 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：灰黄色 2.5Y7/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-54	33	4	B2		3	土師質土器	坏	(12.6)	4.8	6.1	粗（1～2 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後ナデか 内面：回転ナデ	底部内面煤書あり
28-55	34		B2		3	土師質土器	坏			(5.5)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良好	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-56	34	130	B3		7	土師質土器	坏			(5.8)	密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：浅黄色 2.5Y7/3 内面：浅黄橙色 10YR8/4	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面に筋状圧痕2本あり
28-57	34		B 3		3	土師質土器	坏			(5.7)	密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良好	外面：黄灰色 2.5Y4/1 内面：にぶい橙色 7.5YR7/4	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面黒変あり
28-58	35	14	B2		3	土師質土器	坏			5.5	密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3～灰黄褐色 10YR5/2 内面：灰黄褐色 10YR5/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	内面全面が黒変
28-59	35	50	B2		4	土師質土器	坏			(5.8)	密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：浅黄色 2.5Y7/3 内面：浅黄色 2.5Y7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面に筋状圧痕あり
28-60	35		B2		7・8	土師質土器	坏			6.0	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面に筋状圧痕あり
28-61	35	30	B2		3	土師質土器	坏			6.1	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい橙色 5YR7/4 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-62	35	173	B2		4	土師質土器	坏			6.2	密（1～2 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 2.5Y8/2 内面：灰白色 2.5Y8/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-63	35		B2		4	土師質土器	坏			6.4	密（1 mm程度の赤色粒子を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-64	35	99	B3		7	土師質土器	坏			6.5	密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR7/3 内面：浅黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-65	35	24・39	B2		3・4	土師質土器	坏			(6.6)	密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	不良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-66	35	229・230	B3		7	土師質土器	坏			(6.8)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：灰黄褐色 10YR6/2～にぶい橙色 5YR7/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3～灰黄褐色 10YR5/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-67	35		B3		7	土師質土器	坏			(6.1)	密（0.5～1 mm程度の砂粒を少し含む）	良好	外面：浅黄橙色 7.5YR7/3 内面：浅黄橙色 7.5YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-68	35	218	B3		7	土師質土器	坏			6.7	粗（1～3 mm程度の砂粒多く含む）	不良	外面：にぶい橙色 7.5YR7/3 内面：にぶい橙色 7.5YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
28-69	36	11	B3		3	土師質土器	坏			6.9	粗（1～5 mm程度の砂粒多く含む）	良	外面：灰黄色 2.5Y7/2 内面：灰黄色 2.5Y7/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量 0 内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
28-70	36	228	B3		7	土師質土器	坏			6.4	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：淡黄色 2.5Y8/3 内面：淡黄色 2.5Y8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	底部外面に筋状圧痕あり
29-71	36		C2		3	土師質土器	皿	(8.2)	2.2	(5.2)	密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	不良	外面：灰白色 2.5Y8/2 内面：灰白色 2.5Y8/2～黒褐色 2.5 Y 3/1	外面：回転ナデ、ヘラ切り？ 内面：回転ナデ	
29-72	36	193	B3		4	土師質土器	皿	9.3	2.2	5.0	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/2 内面：にぶい黄橙色 10YR7/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	内面油煙の可能性がある黒色の付着物あり。
29-73	36	194	B3		4	土師質土器	皿	(9.4)	2.6	4.8	密（1～5 mm程度の赤色粒子砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-74	36	40	B2		4	土師質土器	皿	(10.4)	2.3	(4.9)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい橙色 5YR7/4 内面：灰白色 2.5Y8/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-75	36		B2		3	土師質土器	皿	(10.4)	1.9	(6.1)	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-76	36		B2			土師質土器	皿	10.7	2.4	5.1	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：にぶい橙色 2.5YR6/4～浅黄橙色 7.5YR8/4 内面：にぶい橙色 2.5YR6/4～浅黄橙色 7.5YR8/4	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-77	36	202	B3		4	土師質土器	皿	8.9	2.5	4.9	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-78	36	166	B3		7	土師質土器	皿	(9.0)	2.6	4.1	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい褐色 7.5YR6/3～浅黄橙色 10YR4/2 内面：にぶい褐色 7.5YR6/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-79	37	247	B4		7	土師質土器	皿	(9.6)	2.3	(2.7)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：灰白色 10YR8/2 内面：灰白色 10YR8/2	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-80	37	42	B2		4	土師質土器	皿	(9.6)	2.0	(5.3)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-81	37	37	B3		4	土師質土器	皿	9.7	2.6	4.3	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	不良	外面：灰白色 10YR8/1～橙色 5YR8/1 内面：灰白色 10YR8/1～橙色 5YR8/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	□縁内外面に黒変。□縁部外面に赤色顔料。
29-82	37	88	C3		4	土師質土器	皿			4.9	やや粗（1～2 mm程度の砂粒、赤色粒子を多く含む）	不良	外面：にぶい橙色 5YR7/3 内面：にぶい橙色 5YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-83	37	56	B3		4	土師質土器	柱状高台付皿	(8.2)	2.8	4.5	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい橙色 5YR7/3 内面：にぶい橙色 5YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-84	37		B3		3・4	土師質土器	柱状高台付皿	(10.8)			密（0.5 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：灰白色 2.5Y8/1 内面：灰白色 2.5Y8/1	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	□縁外面に黒変あり
29-85	37	23	B2		3	土師質土器	柱状高台付皿			(3.8)	密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：明褐灰色 7.5YR7/2 内面：にぶい橙色 7.5YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	
29-86	37		B3		4・7	土師質土器	柱状高台付皿			4.1	密（0.5～1 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい橙色 10YR7/3～褐灰色 10YR4/1 内面：にぶい橙色 10YR7/3～褐灰色 10YR4/1	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-87	37		B2		4	土師質土器	柱状高台付皿			4.4	密（0.5～1 mm程度の砂粒を多く含む）	不良	外面：にぶい黄橙色 10YR7/3 内面：にぶい黄橙色 10YR7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量（）内復元値（cm）			胎土	焼成	色調	調整・手法の特徴	備考
								口径	器高	底径					
29-88	37	32	B2		3	土師質土器	柱状高台付皿			4.5	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄色 2.5Y7/3 内面：浅黄色 2.5Y7/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-89	38	177	B3		7	土師質土器	柱状高台付皿			4.8	密（0.5 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 7.5YR8/3 内面：浅黄橙色 7.5YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り 内面：回転ナデ	
29-90	38	153	B3		4	土師質土器	柱状高台付坏			(7.4)	密（1～2 mm程度の赤色粒子を少し含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-91	38	28	B2		3	土師質土器	柱状高台付坏			(7.6)	やや粗（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：浅黄橙色 10YR8/3～にぶい橙色 2.5YR6/3 内面：浅黄橙色 10YR8/3	外面：回転ナデ、回転糸切り後未調整 内面：回転ナデ	
29-92	38		B3		3	土師質土器	鉢				密（1～3 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：にぶい黄褐色 10YR7/2 内面：にぶい黄褐色 10YR7/2	外面：調整不明 内面：調整不明	
30-93	38	43・167	B2・B3		3・4・7	青磁	碗	(17.4)			緻密	釉良	外面：灰オリーブ 5Y5/2（釉） 内面：灰オリーブ 5Y5/2（釉）	外面：施釉 内面：施釉、沈線	越州窯系 蓮花
30-94	38	122	B3		4	青磁	碗				緻密	釉良	外面：灰オリーブ 5Y6/2（釉） 内面：灰オリーブ 5Y6/2（釉）	外面：施釉、鎬蓮弁文 内面：施釉	龍泉窯系Ⅱb類
30-95	38	179	C3		4	白磁	碗				緻密	釉良	外面：灰白色 5 Y7/2（釉） 内面：灰白色 5 Y7/2（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
30-96	38		B2		3	白磁	碗				緻密	釉良	外面：灰白色 5 Y7/2（釉） 内面：灰白色 5 Y7/2（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
30-97	38		B2		3	白磁	碗				緻密	釉良	外面：灰白色 7．5 Y8/1（釉） 内面：灰白色 7．5 Y8/1（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
30-98	38		C2		7	白磁	碗				緻密	釉良	外面：灰白色 5 Y7/1（釉） 内面：灰白色 5 Y7/1（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
30-99	38		B3		3	白磁	碗				緻密	釉良	外面：灰白色 2．5 Y8/1（釉） 内面：灰白色 5 Y8/1（釉）	外面：施釉 内面：施釉	白磁碗Ⅳ類
30-100	39	67	B2		4	褐釉陶器	壺			(6.0)	緻密	釉良	外面：オリーブ褐色 2.5Y4/3 内面：オリーブ褐色 2.5Y4/3	外面：施釉 内面：施釉	中国産
30-101	39		B3・B4			中世須恵器	甕				密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	不良	外面：灰白色 2.5Y8/1 内面：灰白色 2.5Y8/1	外面：格子文タタキ 内面：ハケ目	
30-102	39	78	C3		4	中世須恵器	甕				密（1 mm程度の砂粒を僅かに含む）	良	外面：灰白色 2.5Y8/1 内面：灰白色 5Y7/1	外面：格子文タタキ 内面：ハケ目	
30-103	39		B2		3	中世須恵器	鉢	(28.0)			粗（1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 N8/～灰 N4/ 内面：灰白色 N8/～灰 N4/	外面：ハケ目 内面：ハケ目	
30-104	39					瓦質土器	短頸壺	(17.8)			密（1 mm程度の砂粒を少し含む）	良	外面：灰白色 2.5Y7/1 内面：暗灰色 N4/	外面：調整不明 内面：ナデ	
30-105	39		B2			瓦質土器	香炉	(11.2)	(6.1)	(12.6)	密（0.5～1 mm程度の砂粒を多く含む）	良	外面：灰白色 2.5Y7/1 内面：灰白色 2.5Y7/1	外面：スタンプ文 内面：調整不明	

第12表　半明遺跡出土木製品・鉄製品・石製品観察表

挿図番号	写真図版	取上番号	地区	遺構名	層位	種別	器種	法量（cm）			重量	備考
								長	幅	厚	（g）	
14-3	24	211		SD2		木製品	曲物	19.5	2.6	0.8		曲物底部か。表面に刃物の痕跡、鉄釘が刺さる。 木取：柾目
16-5	26			SD3		木製品	杭	29.3	5.5	5.5		ミカン割。先端を割って尖らせている。 木取：芯持材
16-6	26			SD3		木製品	杭	31.2	3.7	3.3		ミカン割。先端を割って尖らせている。 木取：芯持材
31-106	39・42		B3		3	鉄製品	鉄鏃	14.4	4.1	0.6		復元口径：43 cm
31-107	40・42	49	B2		4	鉄製品	紡先	10.2	10.7	1.8	371	鎌鉄製
31-108	41		C2		3	石製品	敲石	12.4	6.0	4.7	540.12	石材：安山岩（デイサイト）
31-109	41		B3		7	石製品	磨石	7.8	9.6	4.4	488.8	石材：安山岩（デイサイト）
31-110	41	90	B3		4	石製品	砥石	22.1	9.1	6.5	1961	石材：流紋岩

写真図版

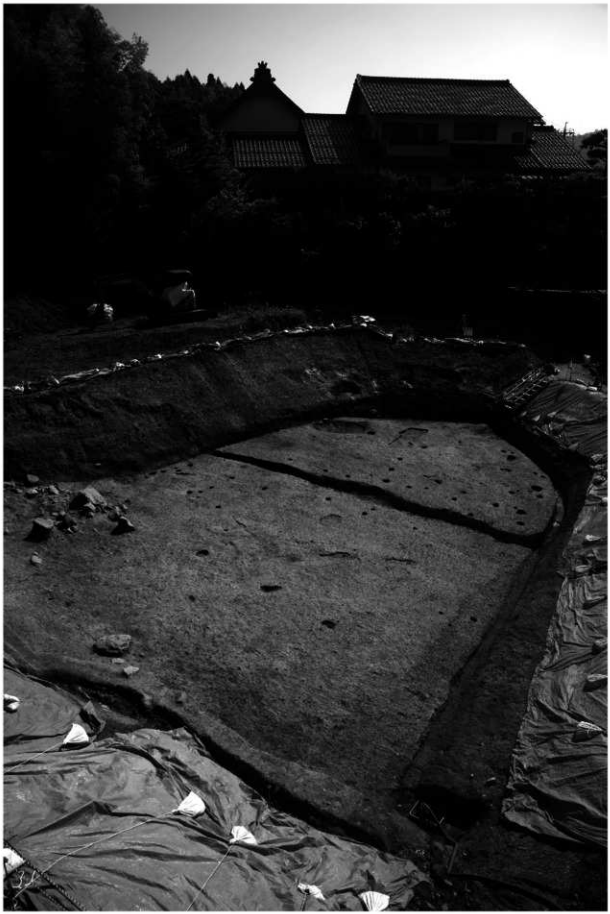
1．遺跡の位置（南西から）

2．遺跡全景空撮（南から）

図版２

１．遺跡全景（南西から）

２．遺跡全景（北から）



１．遺跡近景（南西から）

図版 4

1．調査区近景（南西から）

2．調査区近景（南東から）

1．調査区北壁西側土層（南から）

2．調査区北壁東側土層（南から）

図版 6

1．調査区北壁東側土層（南から）

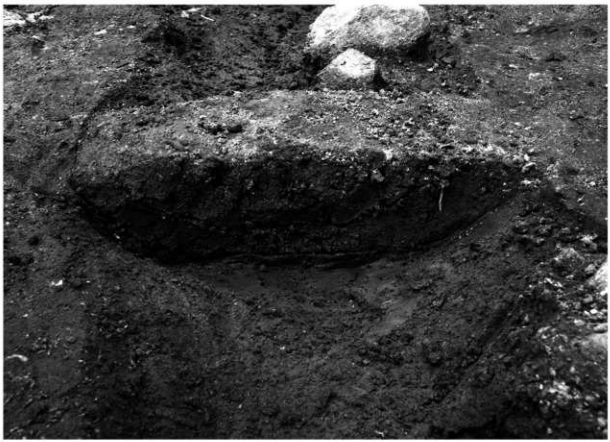
2．中央トレンチ土層（北東から）

１．第７層上面ＳＤ１検出状況
（南から）

２．調査区北壁ＳＤ１断面土層
（南から）

1．ＳＤ１遺物出土状況（南西から）

2．ＳＤ１掘り下げ状況（南から）

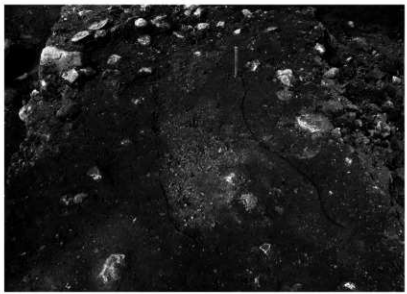


1．ＳＤ１土層（Ａ－Ａ′：南から）

2．ＳＤ１土層（Ｂ－Ｂ′：南から）

1．ＳＤ１完掘状況（南西から）

2．ＳＤ１完掘状況（南から）



1．第７層上面ＳＤ２検出状況（南から）

2．ＳＤ２土層（南から）

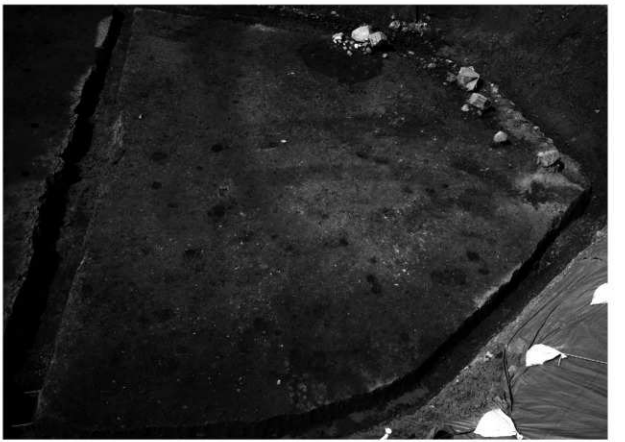
3．ＳＤ２完掘状況（南から）

1．調査区西半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）

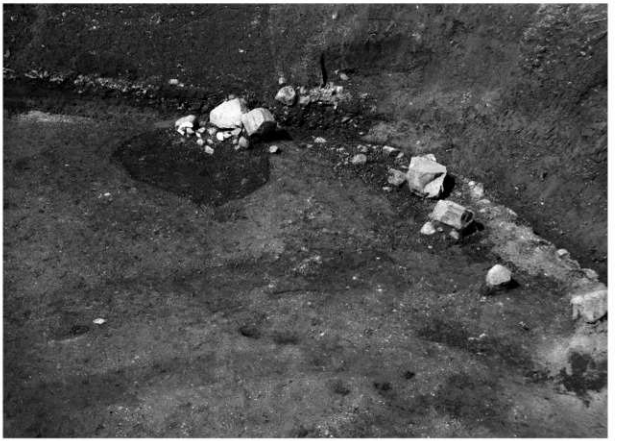
2．調査区西半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）

1．調査区西半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）

2．調査区西半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）



1．調査区東半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）



2．調査区東半部第 10 層上面遺構検出状況（南から）

1．調査区東半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）

2．調査区東半部第 10 層上面遺構完掘状況（南から）

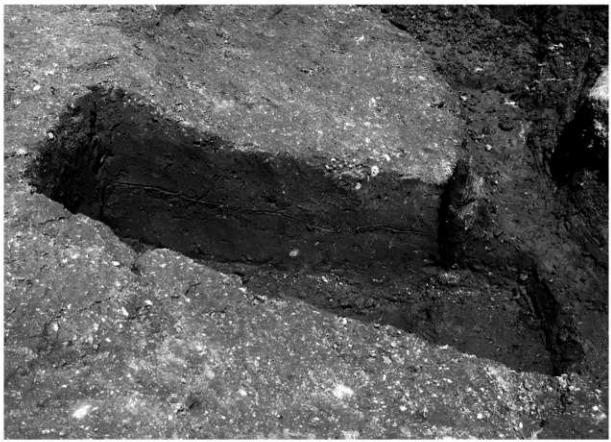
図版 16

1．ＳＤ３検出状況（南から）

2．調査区北壁ＳＤ３断面土層（南から）

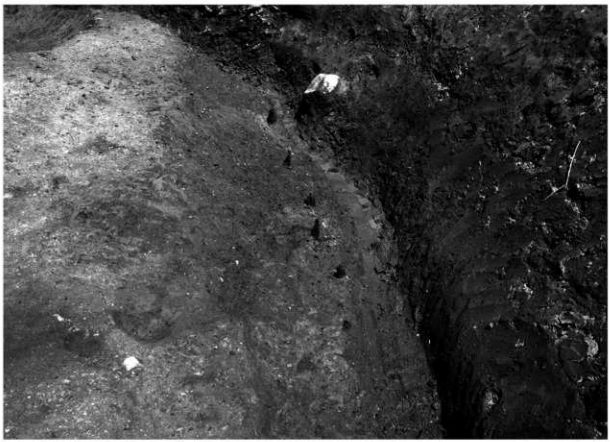
1．SD3A－A´断面土層（南から）

2．SD3断ち割り状況（南から）



1．ＳＤ３Ｃ－Ｃ′断面土層（南から）

2．ＳＤ３Ｂ－Ｂ′断面土層（南から）



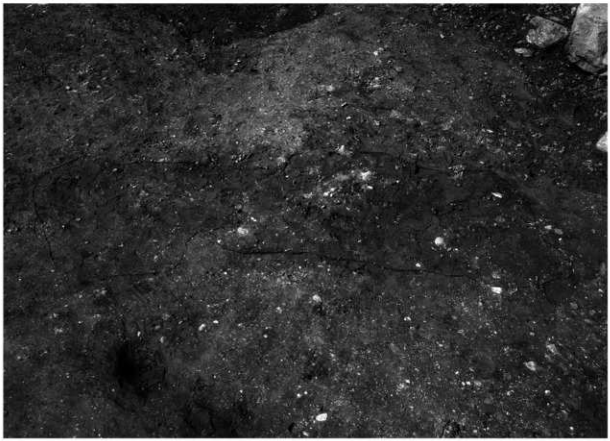
1．ＳＤ３完掘状況（南から）

2．ＳＤ３杭列（南西から）

1．ＳＫ１検出状況（南から）

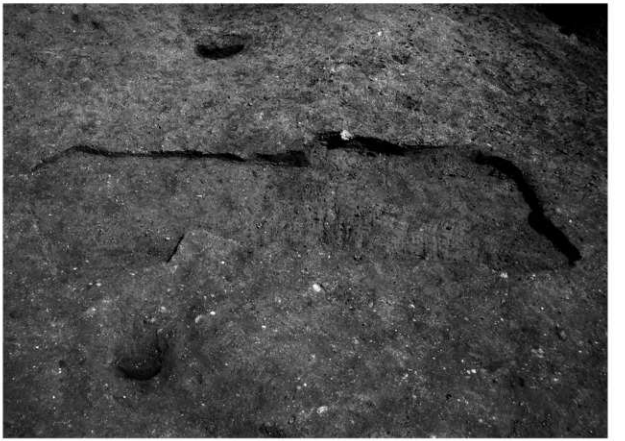
2．ＳＫ１断面土層（南から）

1．ＳＫ１完掘状況（南から）



2．ＳＫ２検出状況（南から）

1．ＳＫ２断面土層（西から）

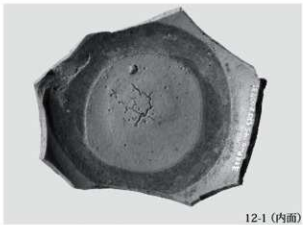


2．ＳＫ２完掘状況（南から）

1．B 2グリッド7 層出土遺物
28−52 出土状況（東から）

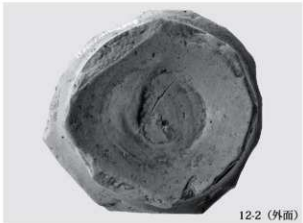
2．調査区北壁西側遺物出土状況
（南から）

3．B 2グリッド 3 層出土遺物
25−11 出土状況（南から）


12-1（内面）

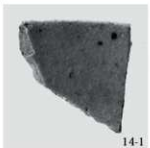
12-1（外面）

12-2（内面）


12-2（外面）

12-3

12-4


14-1

14-1

14-2

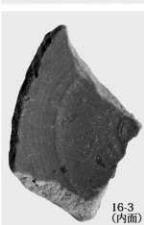
14-3

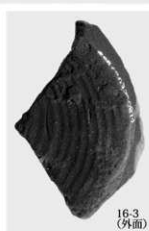
SD1 及び SD2 出土遺物

16-1（上面）

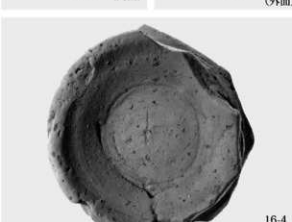
16-1（側面）

16-2


16-3
（内面）


16-3
（外面）

16-4
（内面）

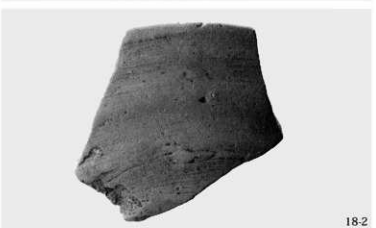

16-4
（外面）

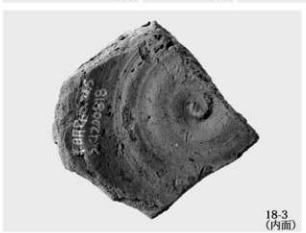
SD3 出土遺物

16-5

16-6

18-1


18-2


18-3
（内面）

18-3
（外面）

SD3 及び SK1 出土遺物

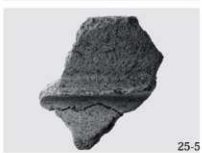
25-1

25-3

25-4

25-9

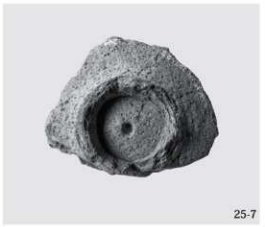
25-2


25-5

25-6

遺構外出土遺物 1

25-10


25-7

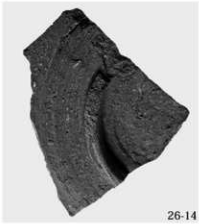
25-8

25-11

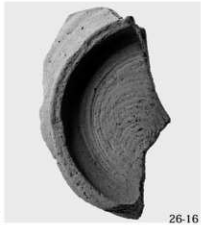
25-12

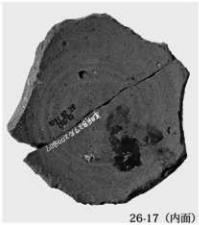
25-13

遺構外出土遺物 2


26-14

26-15


26-16


26-17（内面）

26-17（外面）

26-18

26-19（内面）

26-19（外面）

遺構外出土遺物 3

26-20

26-21

26-22

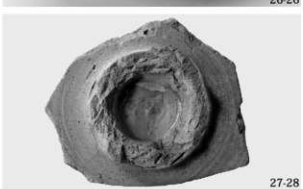
26-23

26-24

26-25

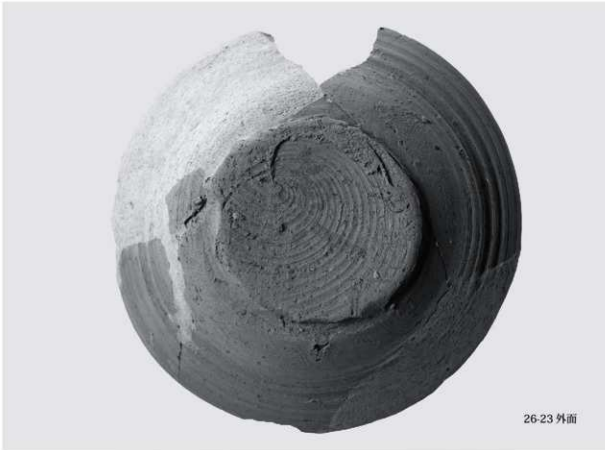
26-26

26-27


27-28

27-29

遺構外出土遺物 4



26-23 外面

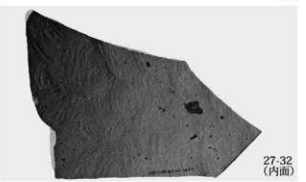
26-23 底部外面赤外線写真

遺構外出土遺物 5

27-30

27-31

27-32
（外面）


27-32
（内面）

27-33

27-34

27-35

27-36

27-37

27-38

遺構外出土遺物 6

27-39

27-40

27-41

27-42

27-43

27-44

27-45

28-54（内面）

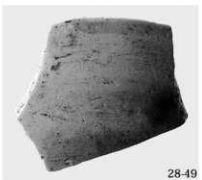
28-46

28-54

遺構外出土遺物 7

28-47

28-48


28-49

28-50

28-51

28-52

28-53

28-55

28-57

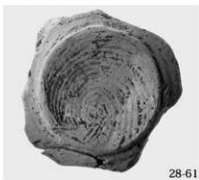
28-56

遺構外出土遺物 8

28-58

28-59

28-60


28-61

28-62

28-63

28-64

28-65

28-66

28-67

28-68

遺構外出土遺物 9

28-69

28-70

29-71

29-72

29-73

29-74

29-75

29-76

29-77

29-78

29-79

29-80

29-81

29-82

29-83

29-84

29-85

29-86

29-87

29-88

遺構外出土遺物 11

29-89

29-90

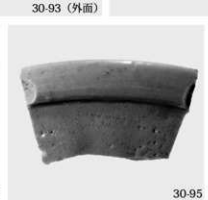
29-91

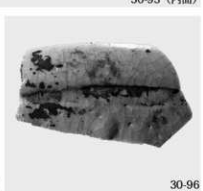
29-92

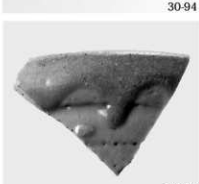
30-93（外面）

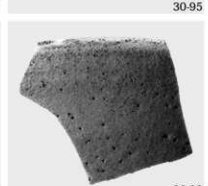
30-93（内面）

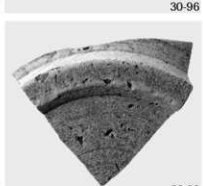
30-94


30-95


30-96

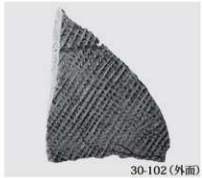

30-97

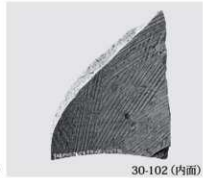

30-98


30-99

遺構外出土遺物 12

30-100

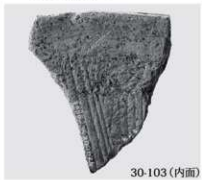

30-102（外面）


30-102（内面）

30-101（外面）

30-101（内面）

30-103（外面）

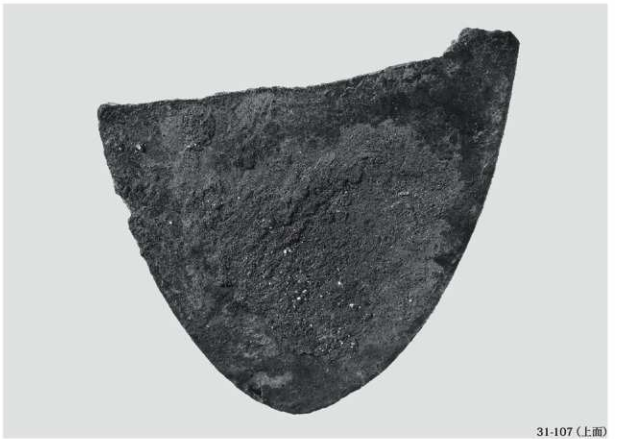

30-103（内面）

30-105

30-104（外面）

30-104（内面）

31-106



31-107（上面）

31-107（下面）

遺構外出土遺物 14

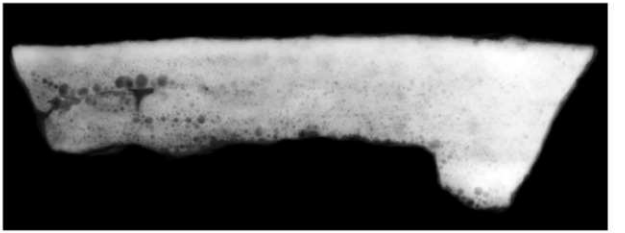
31-108

31-109

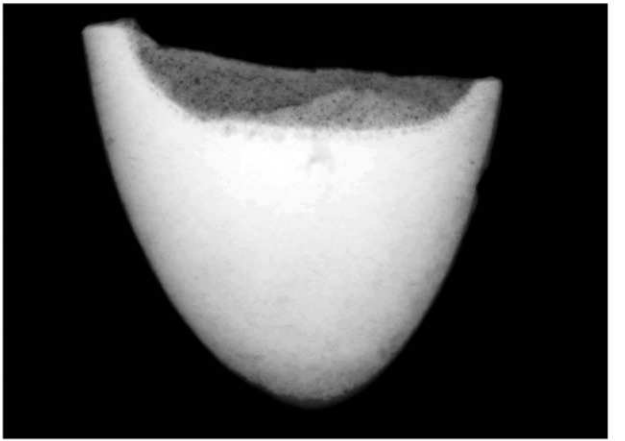
31-110

珪化木

遺構外出土遺物 15



1．鍋（31-106）X線透過撮影画像



2．犂先（31-107）X線透過撮影画像

報告書抄録

ふりがな	はんみょういせき
書名	半明遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一般国道9号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	5
編著者名	角田徳幸　大庭俊次　渡邉正巳　上山晶子
編集機関	島根県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町33番地　TEL0852-36-8608　FAX0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　URL：http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発行機関	島根県教育委員会
発行年月日	2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はんみょういせき 半明遺跡	しまねけんおおだしながひさちょうちながひさ 島根県大田市長久町長久	32205	A170	35° 12′ 23″	132° 29′ 27″	20200601 ～ 20200914	550	記録保存調査（道路建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
半明遺跡	集落	平安時代 鎌倉時代 室町時代	水路3 土坑2 ピット54	弥生土器 土師器 須恵器 土師質土器 陶磁器 墨書土器 刻書土器 鋳鉄製犂先	墨書土器・刻書土器・転用硯など文字関連資料や越州窯系青磁碗などの中国製陶磁器が出土した。 平安～鎌倉時代初期の鋳鉄製犂先は希少である。

要約

半明遺跡は推定古代山陰道近くに位置し、近隣には式内社である野井神社がある。墨書土器、刻書土器、転用硯などの文字関連資料や、越州窯系青磁など古い段階の中国製陶磁器が出土するなど官衙的様相を呈している。

また、SD3は護岸用の杭列があり、灌漑水路と思われる。鋳鉄製犂先も出土しており平安～鎌倉時代初期の農業生産の様相を考えるうえで貴重な資料が得られた。当地において先進的な農業技術を導入した集団の存在がうかがわれる。

半明遺跡

一般国道９号（大田静間道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書５

発　行　2021（令和３）年３月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財センター
〒690-0131　島根県松江市打出町33番地
電話　0852-36-8608
印　刷　有限会社　古浦印刷
〒690-0874　島根県松江市中原町91